

# 元総社蒼海遺跡群（143）

前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

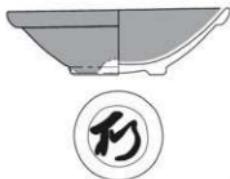
2  
0  
2  
3  
・  
3

2023.3

前橋市教育委員会

# 元総社蒼海遺跡群（143）

前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書



S = 1/3

古代土壙墓出土の白磁碗

2023.3

前橋市教育委員会

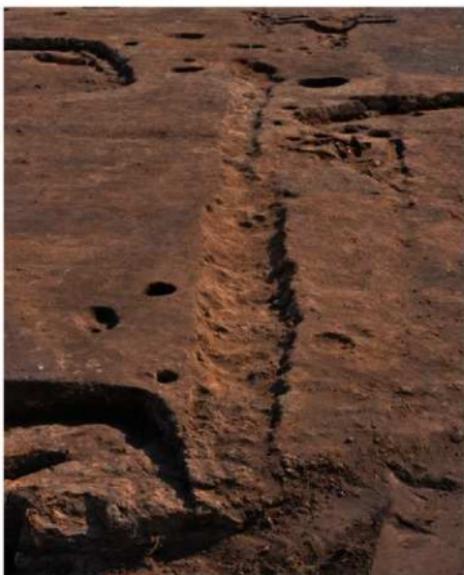
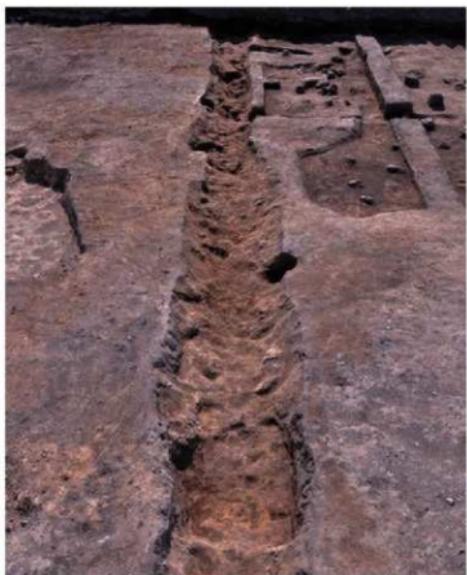




北方上空から見た区画溝 W-2 と基壇建物跡群の位置関係

区画溝（W-2）は残念ながら直接的に時期を示す遺物に恵まれなかつたが、7世紀後半の竪穴建物跡を切り、10世紀代の竪穴建物跡に切られることから、8～9世紀に機能していたものと推定される。溝は今回の調査区に北接する（104）地点で東へ屈曲していることが判明していることから北辺は確定、南辺は沿海域の破壊も激しく現状で不明であるが、南北370m、東西350mの方形区画の可能性がある（写真黄色推定線）。

この区画内南寄りからは、近年の調査で上野国府に伴う倉庫群か、群馬郡衛正倉の一部と考えられる礎石建物跡が8棟確認されており（写真赤囲み線）、その区画も推定されている（写真水色推定線）。今後の検証は勿論であるが、今回確認された区画溝は、ある段階での倉庫群を区画した可能性が考えられる。



8～9世紀の区画溝 W-2

左・南半 右・北半 共に北から

区画溝は上面を削られているとは言え、幅は1mにも満たない。掘方も安定せず、基準線的な粗面段階を示しているのかも知れない。



7世紀中葉の竪穴建物跡 H-1 南西から

座標北から約45°傾く4×5mの長方形竪穴部。対角線上に4ヶ所の主柱穴と南東壁際に梯子穴、北東壁に大形の竪、右手前に小さな貯藏穴。



H-1 竪 検出状況 南西から



H-1 竪 遺物出土状況 南西から



H-1 竪 煙道検出状況（赤線は煙道） 南東から



H-1 貯藏穴 遺物出土状況 南東から



10世紀の竪穴建物跡 H-22 西から

座標と同じ角度で  $3.5 \times (5)$  m の顯著な長方形竪穴部。明確な柱穴不明、東壁に竈。左手前は H-23。



H-22 竈付近 散乱する羽釜片 北西から



H-22 内黒土器 埋 出土状況



H-22 竈前からの馬前肢骨出土状況 西から

解剖学的位置を保つ状態で、床面に馬の前肢が放置されていたものと考えられる。食用として持ち込まれたものか？



10世紀の大形竪穴建物跡 H-26a・b 北から

4.3 × (6.5)mの長方形竪穴部のH-26b[焼失建物]を、埋めながら西側へ拡張して 6.3 × (6.5)mの正方形竪穴部のH-26aとしている。明確な主柱穴は不明、竪穴は南西側にあることを最後のダメ押し拡張で確認している。宿舎的な建物か。



H-26b 炭化材等検出作業状況 北から



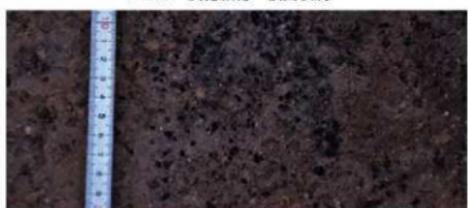
H-26b 炭化材・焼土検出状況 北から



H-26b 炭化穀物 検出状況



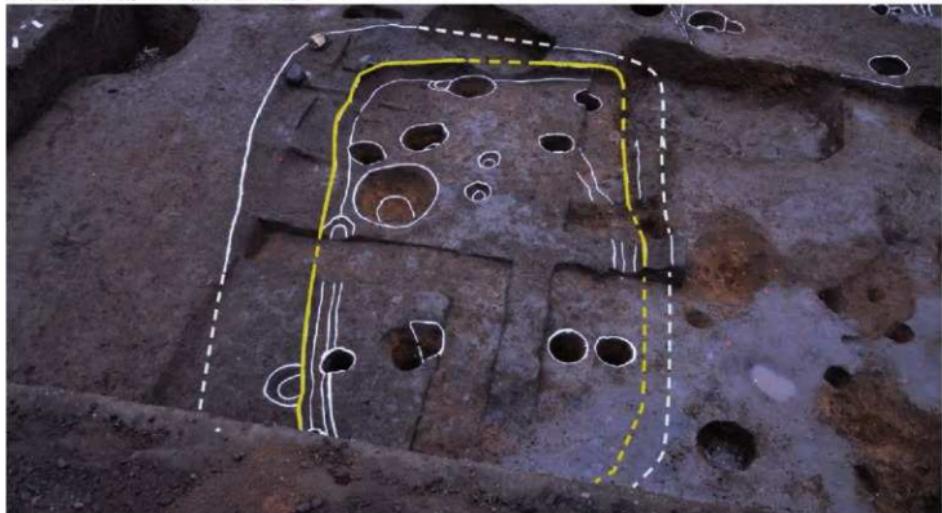
H-26b 炭化米 検出状況



H-26b 炭化米 検出状況 接写



H-26b 土屋根状の焼土 断面



12世紀初頭の竪穴建物跡 H-21a・b 西から

$2.5 \times (4)$  mの長方形竪穴部のH-21b（内側黄線）を一回り大きく拡張し、 $3.4 \times (4.5)$  mのH-21a（外側白線）としている。主柱穴は対角線上に2ヶ所一对4ヶ所を配している。H-21bは2次堆積のAs-B軽石によって埋められ、結果H-21bの床面はAs-Bの貼床となっていた。以上の点から、H-21a・bは、As-B軽石の隣下（1108・天仁元年の浅間山噴火）を契機に改修した、1軒の竪穴建物であったと考えられる。



H-21a・b の土層断面 接写



H-21a の竪状施設と床面硬化範囲 北から



H-21a 床面上からの白磁片出土状況 西から



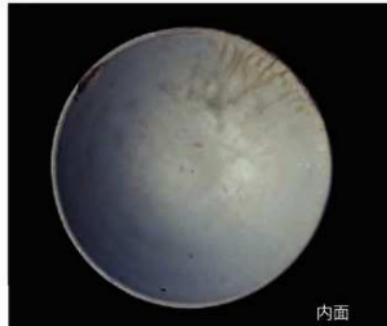
DB-3 古代土塙墓 南から



DB-3 白磁碗 出土状況 西から



DB-3 (150)



内面

### 白磁碗を副葬する古代の土塙墓

調査最終日、12世紀初頭の竪穴建物跡であるH-21aの竈状施設の掘方調査中、円形に回る骨粉が確認され、土塙墓の存在が確認された。

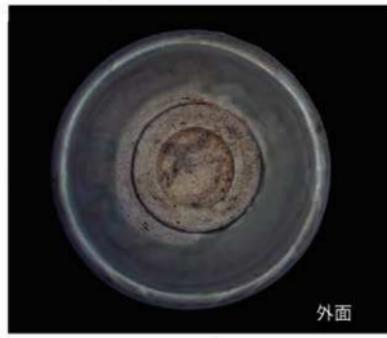
人の頭骨と考えられたこの骨粉を精査していたところ、その傍らから完形の白磁碗が出土した。最後の最後、大発見であった。

土塙墓は南北軸の長方形で、北頭位の伸展葬で埋葬された人骨は、後日の鑑定によって成人（性別不明）であることが判明した。

白磁は10世紀後半の優品で、中国河北省の邢州窯産と推定。

釉の厚いところは青みのある輝きを放っているが、残念ながら口縁に僅かな剥離がある。

底部外面、高台内側の無釉部分には1文字の墨書が確認された。鑑定によれば「梅」で、同様の例は中国との貿易の玄関である博多や、平安京で出土しており、墨書は中国の商人ギルド（同業者の自治集団）によって記されたサインと考えられている。



外面



国府成立前の土器群



国府のマチの土器・陶磁器等



H-21a の基石 (84)



H-19 出土の銅滓? (156)



H-21a の白磁碗 (83)



蒼海城 堀跡 W-1 北から



北壁 南から



堀跡 W-1 土層断面

堀は薙耕塁で、東側の段は改修による新段階堀の底面（左写真）。下層には水性堆積の砂層が幾重にもあり、一時的な水流を窺わせる（右写真）。



東から



堀跡 W-1 法面下半に確認されたピット列

斜めに上がるピット列。柱穴と言うより、ステップ状の断面であることから、作業用の足場の可能性が考えられる。

## はじめに

前橋市は、関東平野の北西部に位置し、名山赤城山を背に利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる群馬県の県都です。市域は豊かな自然環境に恵まれ、2万年前から人々が生活を始め、市内のいたる所にその息吹を感じられる遺跡や史跡、多くの歴史遺産が存在します。

古代において前橋台地には、広大に分布する穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ、王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野国の中心地として栄えました。また、続く律令時代になってからは總社・元總社地区に山王廃寺、国府、国分僧寺、国分尼寺など上野国の中枢をなす施設が次々に造されました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎧をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東七名城の一つに数えられ、「関東の華」とも呼ばれた腰橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地となり、横浜港から前橋シルクの名前で遠く海外に輸出され日本の発展の一翼を担いました。

今回、報告書を上梓する元總社蒼海遺跡群（143）は古代上野国の中核地域の調査であり、上野国府推定地域にも近接することから、調査成果に多くの注目を集めています。今回の調査では、古墳時代後期と平安時代の竪穴建物跡を主体とする集落跡と中世の蒼海城堀跡が見つかりました。また、平安時代の土壙墓からは、舶載品と考えられる白磁碗がほぼ完形の状態で出土しており、元總社蒼海地区の特殊性を窺わせるものとなっております。残念ながら、現状のまでの保存が無理なため、記録保存という形になりましたが、こうした成果の積み重ねが「国府の解明」に繋がるものと確信しております。

最後になりましたが、関係機関や各方面の多大なるご配慮・ご尽力により調査事業を円滑に進めることができました。また、直接調査に携わってくださった担当者・作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

令和5年3月

前橋市教育委員会

教育長 吉川 真由美



## 例 言

- 本書は、前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う元総社蒼海遺跡群（143）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 発掘調査は、前橋市（主管課：都市計画部区画整理課）の委託を受け、前橋市教育委員会事務局文化財保護課の指導・助言のもと、山下工業株式会社（代表取締役 山下尚）文化財事業部が実施した。発掘調査から報告書刊行までの作業は、前橋市の費用負担で実施した。
- 発掘調査の要項は次のとおりである。  
遺跡所在地 群馬県前橋市元総社町 1799-1、1888-1、1888-2、1888-5、2691-8  
遺跡略称 3A270 遺跡番号 前橋市0142・0147 遺跡 調査面積 1,293m<sup>2</sup>  
調査期間 【現地調査】令和4年1月5日～同年3月23日 【整理】令和4年6月20日～同年12月31日  
調査担当者 青木利文 調査員 永井智教・岡口信夫・辻口菜穂子・岡田萌
- 遺構写真は各調査員が撮影し、空撮は神崎龍太による。遺物写真は橋本優が撮影した。
- 遺構測量及び平面図作成は田中啓明が行った。
- 現地調査において、竪の調査については外山政子（元榛名町史編纂室）の指導・助言を受けた。
- 現地調査に従事した作業員は以下の通り。

- 石原三郎 岩崎のぞみ 柳澤礼子 栗田満 下橋幸徳 津田千鶴 中野光雄 堀口満夫 渡辺寿美子  
8. 整理作業は青木指示のもと永井が担当し、各調査員と青木ゆかり・川邊みづき・谷藤龍太郎・富田和美・津田がこれにあたった。  
9. 本書の執筆は、Iが前橋市教育委員会事務局（文化財保護課）、人骨鑑定は谷畠美帆（明治大学）、獣骨鑑定は植田浩二（明治大学）、炭化材同定は高橋敦（株式会社古生態研究所）、他は辻口・岡田・永井である。  
10. 本書の編集は永井監修のもと谷藤・川邊が行った。  
11. 発掘調査資料及び出土遺物は一括して前橋市教育委員会が保管している。  
12. 調査及び報告書の作成にあたっては、下記の諸氏からご助言・ご協力を賜った。（五十音順・敬称略）  
阿久澤智和 出浦崇 梅澤重昭 小宮俊久 斎藤達也 佐野良平 高島英之 高橋清文 田中広明 中村岳彦  
並木史一 藤井康隆 前沢和之 前原豊 松田猛 三浦京子 右島和夫 村山卓 吉田智哉

## 凡 例

- 遺跡、全体図におけるX・Y値は、平面直角座標DX系（世界測地系）の座標値、挿図中の北は座標北である。
- 挿図中で用いる遺構等の略称は以下のとおりである。  
【竪穴建物跡】H 【溝跡】W 【土坑】D 【土壤墓】DB 【ピット】P 【攪乱】K 【土器】P 【石】S 【井戸跡】I
- 遺構図は1/300・1/200・1/80・1/40、遺物実測図は1/4・1/2とし、各図中には縮尺とスケールを示した。  
遺構図・遺物実測図の網掛けについては、個々の図中に凡例を示した。
- 本書で用いる火山噴出物の略称と年代については以下のとおりである。  
【複層山B軽石】As-B 天仁元年（1108） 【榛名山二ツ岳・洗川テフラ】FA 5世紀末 【浅間山C軽石】As-C 3世紀末～4世紀初頭

## 目 次

### 巻頭図版 はじめに 例言・凡例・目次

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の位置と環境	1
III 調査の方針と経過	5
1 調査の基本方針	5
2 調査経過	5
IV 基本層序	5
V 遺構と遺物	7
(1) 竪穴建物跡	7
(2) 溝跡	11
(3) 土坑	11
(4) 墓跡	12
(5) 井戸跡	12
(6) 各時代の出土遺物	12
VI 元総社蒼海遺跡群（143）出土人骨	35
VII 元総社蒼海遺跡群（143）出土獣骨の同定結果	35
VIII 元総社蒼海遺跡群（143）出土炭化材・炭化種実の同定	37
IX 発掘調査の成果と課題	38
抄録	



## I 調査に至る経緯

本発掘調査は、前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴い実施され、24年目にあたる。本調査地周辺では埋蔵文化財調査が長年にわたって行われていることから、遺跡地であることが確認されている。

令和3年11月1日付で前橋市長 山本 龍（区画整理課）（以下「前橋市」という。）より、埋蔵文化財発掘調査業務に係る依頼が前橋市教育委員会（以下「市教委」という。）に提出された。市教委では既に他の発掘調査を実施中のため、市教委官僚による調査実施が困難であると判断し、民間調査組織へ発掘調査業務を委託することで合意に至った。事業実施にあたっては市教委の作成する調査仕様書に則り、

市教委による監理・指導のもと発掘調査を実施することとなった。令和3年12月8日付で前橋市と、民間調査組織である山下工業株式会社との間で業務委託契約が締結されるとともに、両者に市教委を加えた三者で協定を締結し、発掘調査に着手した。

なお、令和3年度は現地での発掘作業のみ実施し、整理作業については令和4年度業務として、山下工業株式会社が受注した。なお、遺跡名称である「元総社蒼海遺跡群（143）」（遺跡コード：3A270）の「元総社蒼海」は土地区画整理事業名を採用し、「（143）」は過年度に実施した発掘調査と区別するために付したものである。（文化財保護課）

## II 遺跡の位置と環境

### 遺跡の位置

今回報告する元総社蒼海遺跡群（143）は、前橋市西部の元総社地区に位置する。一帯は市内でも開発の遅れた地域と言われていたが、昭和40年代の国道17号高前バイパスの開通、次いで昭和50年代の関越自動車道前橋インターチェンジ供用開始と共に周辺地域の区画整理が順次的に実施され、都市化が進んだ。今回の調査原因である前

橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業も、一連の流れの中で実施されているもので、事業もようやく終盤に差しかかろうとしている。本地區南方では西部第一落合土地区画整理事業も開始され、元総社地区の変貌はより加速度的に進むこととなるだろう。

### 地理的環境

遺跡は榛名山東麓未端に位置し、約13,000年前の榛名山系の山体崩壊である「陣場岩屑なだれ」によって形成された広大な扇状地形である「相馬ヶ原扇状地」の末端でもある。岩屑なだれ層下には、約20,000年前に形成された「前橋泥流」が堆積しており、南東に広がる前橋台地の基層をなしている。

岩屑なだれや前橋泥流の上には、「前橋下部泥炭層」の堆積後、浅間・板鼻黄色輕石（As-YP・約13,000年前）・浅間・総社輕石（約11,000年前）を含む「前橋上部泥炭層」が堆積し、それを供水性堆

積物である「総社砂層」が厚く覆う。総社砂層上には黑ボク土が生成された後、浅間C輕石（3世紀末降下）以降複数回に及ぶ火山灰を被っている。地形を詳しく見ると、扇状地の等高線に直行して下る八幡川・牛王頭川・稲谷川・牛池川等の小川河川があり、総社砂層の供給源となる平面、砂層を深く抉る部分も多く、総社周辺の地形を左右したのだろう。また、古墳時代後期の榛名山活動期には、火山灰を泥流として押し流して谷筋を埋め、今日に近い比較的平坦な地形を造り出した。



Fig.1 遺跡の位置

「国土地理院発行 地図帳地図1/200000」を改変

## 歴史的環境

総社周辺は、先述の「総社砂層」堆積後、地表面が安定して黒ボク土が生成され始めた縄文時代前陣以降、遺跡の分布がみられるようになる。弥生時代以降の広域での考古学的縄文についても、昨年度刊行の（142）報告書においてまとめているため、ここでは今回報告の主体である古墳時代後期後半以前の様相について触れておきたい。

**古墳時代後期後半** 中期末～後期初頭に発生した榛名山火山災害後の復興的様相が発展し、榛名山東麓では標高 150 m 程度まで大小の集落遺跡が連続と点在する様相へと至る。元総社周辺では、これまでの調査で夥しい数の横穴建物跡が検出されており、大形横穴建物跡を複数作る大規模集落遺跡の片鱗が見えてくるが、後世の国府→菅原城の擾乱に阻まれて未だ全貌は不明である。

後期後半の墳墓としては、総社地区の北部に總社二子山古墳（イ）と總社愛宕山古墳（ロ）が相次いで築造されている点は示唆的である。總社二子山古墳（イ）は全長 90 m を超える前方後円墳で、葺石・埴輪をもつ、後円部に角閃石安山岩の加工石材を用いた横六式石室、前方部に安山岩乱石積の一回り小さい横六式石室をもつ、2つの石室に時期差が存在するか否かは明らかにしないが、前者は 6 世紀に榛名火山から噴出した軽石（FP）を加工して用いる特徴的な石室構造で、高崎市錦貫銀山古墳（全長 98 m の前方後円墳）に代表され、利根川中流域に広くその分布をもつ。一方の後者は榛名山南東麓に多く分布し、後期前半の棟東村高塚古墳（ヲ）等がそのプロトタイプとなる。つまり 2 系統の石室を一つの墳丘に内包する總社二子山古墳（イ）は、2 系統の集團による前方後円墳であった可能性が考えられる。なお、前方部石室からは過去に頭椎大刀の優品が出土していることが鞆岡によって知れるが、一般にこの種の大刀は物部氏との関係を示唆する。続く愛宕山古墳（ロ）は一辺 56 m の大方墳で、近年の調査で幾重にも埴丘を覆う葺石が確認され、後期初頭の王山古墳のそれを彷彿とさせるものであった。安山岩乱石積の大規模な横六式石室内外には精美な側板式家形石棺が納められているが、残念ながら副葬品は不明である。とは言え本古墳が方墳であること、前方後円墳である總社二子山古墳（イ）に次いで築造されたと考えられることは重要である。同時期の畿内に目を転じると、森吉一によって羽柴陵と説かれている奈良県桜井市赤坂天王山古墳が墳頂・規則・家形石棺をもつという点で酷似しているが、葺石や横六式石室構造には在地の伝統が明顯である。何にせよ愛宕山古墳の被葬者が、畿内中軸部と深い関わりを持っていた事は確かであろう。

**古墳時代終末期（飛鳥・白鳳期）** 集落遺跡は元総社地区に広がり、堅穴建物跡の数は増加の一途を辿る。該期後半には元総社菅原道跡群で大きな掘立柱建物跡が、王山廐寺（シ）下層からは規則的に並ぶ掘立柱建物跡群も確認されており、これらは正方形に斜行する地割を指向している。特に後者建物跡群については、豪族居館や群馬評定院ないしその前身である屯舎に關係する遺構群との理解があり、元総社菅原道跡群等で確認されている同時期の夥しい数の堅穴建物跡も、これに付随するのである。

墳墓として、まず總社古墳群中の宝塔山古墳（ハ）と蛇穴山古墳（ニ）があげられる。宝塔山古墳（ハ）は一辺 66 m の大方形墳で、3段築成で葺石をもつ。複室構造の横六式石室は截石切削積の精緻なものであるにも関わらずさすらに漆喰を厚く塗って仕上げており、玄室に納められた脚部をもつ特異な別抜式家形石棺には格狭間の意匠があしらわれている。格狭間は仏教文化の影響とされており、墳墓の事例としては大阪府太子町の聖德太子墓の棺台が知られる程度である。また、横六式石室はその平面形態が奈良県奈良市帶解黄金塚古墳（一辺 30 m の方墳）と酷似することが指摘されている。帶解黄金塚古墳は鮮我石川麻呂の墓であるといふ奥田尚の説があり、總社愛宕山古墳（ロ）と共に、蘇我氏との関わりが見える点は興味深い。蛇穴山古墳（ニ）は一辺 44 m の方墳ないしは長方墳で、近年の調査では二重周溝で法面に葺石をもつ中堤の存在や、愛宕山古墳同様に幾重にも埴丘を覆う葺石の存在が明らかとなっている。石室は硬質の加工石材をバネ状に組み合わせた玄室と截石切削積の短い狭戸とハの字状に開く前庭部という特殊な構造であるが、これは後世の改変である可能性が近年の調査によって高まった。石室内には漆喰が塗られ、玄室中央には棺台とされる大きな加工石がある。

**群集墳**については、元総社周辺では確認されておらず、總社古墳群北方の稻荷山古墳（ト）等、小円墳数基が点在する程度である。また、元総社地区を流れている染谷川・牛池川・八幡川・牛王削川の上流部には棟東村長久保古墳群（ル）・前橋市清里・長久保古墳群（タ）・吉岡町南下古墳群（カ）、高崎市金古如来古墳群（ヌ）があり、長久保古墳群（ル）は後期後半からの継続で、数十基が累重を重ねる程に密集し小規模前方後円墳を群中に伴う等、典型的な後期群集墳の様相を示しているが、清里・長久保古墳群（タ）は小円墳の点在で石室内から鉄釘を出土する例があり、南下古墳群（カ）は宝塔山古墳（ハ）に類似する截石切削積の精緻な石室を作り、方墳が数基点在、金古如来古墳群（ヌ）では金具を多量に出土、吉岡町三津屋古墳（ヨ）は明瞭な

Tab.1 周辺遺跡一覧

集落	14	大屋敷遺跡	28	棟高村北遺跡	42	日輪寺親首前遺跡	ヲ	高塚古墳	
1	元総社菅原道跡群	15	總社町屋敷遺跡	29	棟高南八幡街道遺跡	43	南橋東原遺跡	ワ	大藏城山古墳
2	元鶴寺寺道跡	16	大渡道場遺跡	30	熊野堂遺跡		吉積・古墳群	カ	南下古墳群
3	大友原敷遺跡	17	前橋城	31	井出村東遺跡	イ	總社二子山古墳	ヨ	三津屋古墳
4	天神遺跡	18	石倉下宅地遺跡	32	三ツ寺Ⅰ遺跡	ロ	愛宕山古墳	タ	清里・長久保古墳群
5	弗菴遺跡	19	元總社稻葉遺跡	33	三ツ寺Ⅱ遺跡	ハ	宝塔山古墳		神社
6	中尾遺跡	20	新保田中村前遺跡	34	三ツ寺Ⅲ遺跡	ニ	蛇穴山古墳	ア	總社神社
7	鳥羽遺跡	21	日高遺跡	35	棟高遺跡群	ホ	遠見山古墳	Б	三宮神社
8	上野国分僧寺・尼寺中間	22	小八木村東遺跡	36	北谷遺跡	ヘ	大小路山古墳		寺院
9	国分境遺跡	23	正觀寺道路Ⅰ～IV	37	池端北耕地下ノ割遺跡	ト	稻荷山古墳	а	上野国分寺
10	北原遺跡	24	小八木志賀貝戸遺跡	38	七日市遺跡	チ	王山古墳	б	上野国分尼寺
11	下東西遺跡	25	正觀寺西原遺跡	39	大久保 A 道跡	リ	諸口古墳群	с	山王庵寺
12	柿木遺跡	26	中泉源十内遺跡群	40	熊野・辺玉遺跡	ヌ	如來古墳群	д	新保庵寺
13	村東遺跡	27	普谷万年貝戸遺跡	41	金竹西遺跡	ル	長久保古墳群		

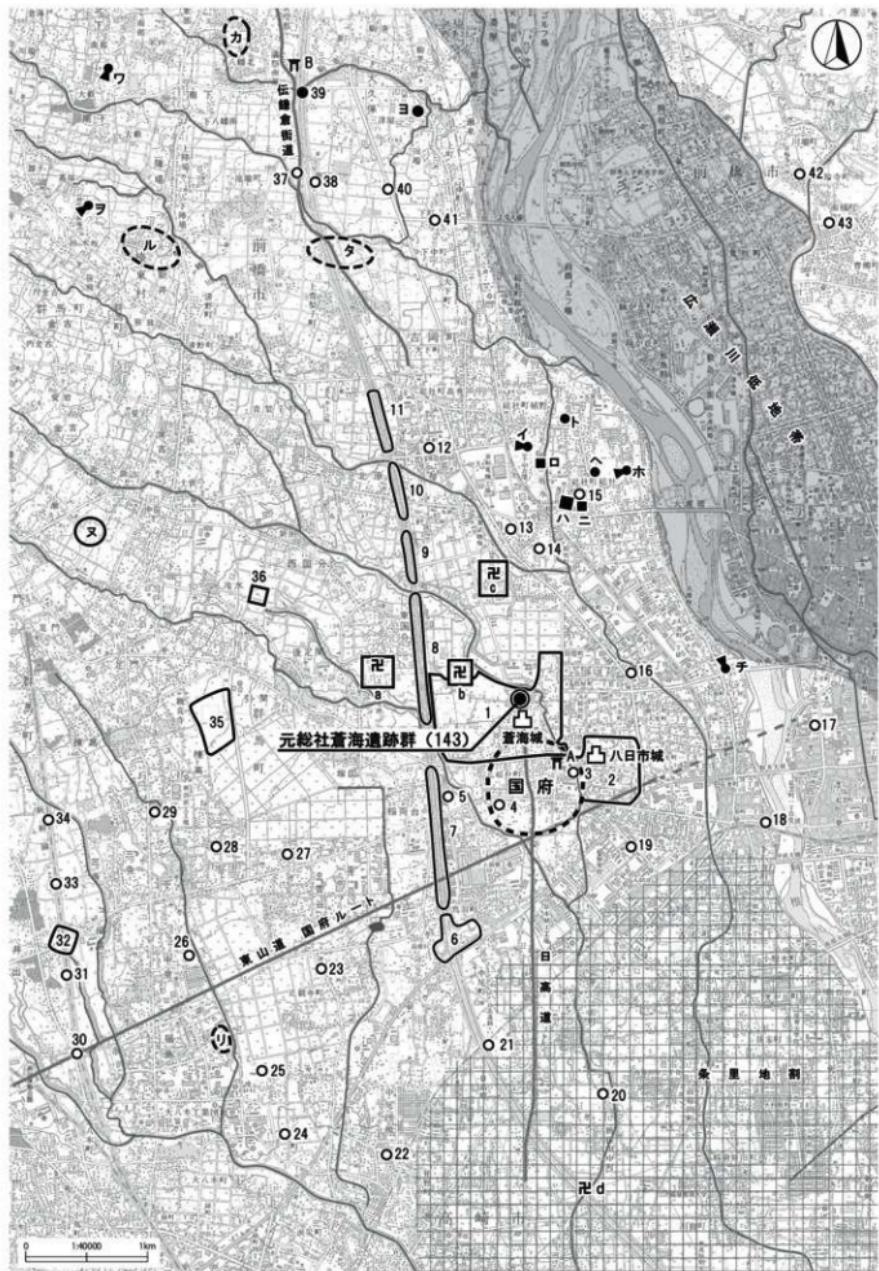


Fig.2 元總社蒼海遺跡群（143）の周辺遺跡

八角墳で載石切削積の横穴式石室をもつ。いずれも総社地区の遺跡群との関係で理解すべきと思われる。

白鳳期には総社古墳群北方に山王庵寺（c）が建立される。前期評段跡に創建された寺院としては上野唯一のもので、昭和・平成の2回におよぶ確認調査が行われ、出土瓦に見られる線刻・押印から旧寺名が「放光寺」であった可能性が考えられる点、塔跡周辺から出土した大量の塑像から畿内中西部の寺院と深く関わる寺であった事が判明している。また、先述した下削構を豪族邸館や評論・屯倉とした場合、そうした重要施設を移動させて遺置することになる。また、塑像は造形技術水準の高いもので、作風は斑鳩法隆寺塔本塑像に類似している。奇しくもここで再びの蘇我氏の墓は、総社愛宕山古墳（口）から蛇へ山古墳（二）への流れに沿う事象と言え得る。また、東山道駿路の開闢もこの時期で、今日までの研究によって「牛堀・矢ノ原ルート」→「下新田ルート」→「国府ルート」へ3時期・3ルートの変遷が定説となっている。最初の「牛堀・矢ノ原ルート」は太田一伊勢崎一高崎の平野部をほぼ東西の直線で通ることが発掘調査で判明している。元総社エリアからは遠く南方であり、その間を南北に繋ぐ連絡路として「日高道」が以前より指摘されているが、開闢時期については不明である。

奈良時代 元総社蒼海遺跡群の南東、総社神社に近い一带で堅穴建物跡が姿を消す。代わりに正方位の区画溝や掘立柱建物跡、基礎建物跡が出現する。無論、元総社エリア内に以前より推定されている上野国府との関わりで理解されると考えられるが、国府城の一角に設けられたと考えられる群馬郡都の可能性が高いと考えられつつある。現在前橋市教育委員会による確認調査が継続中であり、今後の動向が注目されるところである。また、やや標高の高い前橋市池端北耕地下ノ割遺跡（37）では廻をもつ大規模な掘立柱建物跡が単独的に検出されており、その性格については不明であるが、前時代の南下古墳群（カ）や三津屋古墳（ヨ）等が近傍であること勘案すれば、国府の出先施設等の可能性もある。他にも高崎市棟高南八幡街道遺跡（29）には、布掘の掘立柱建物跡や大型堅穴建物跡からなる公的な羽翼體をもつ遭構群があり、その性格が注意される。推定国府城の西方には、国分寺（a）・国分尼寺（b）も建立される。上野国分寺（a）は昭和の調査成果からある程度整備が行われていたが、近年県教育委員会の再調査で伽藍配置が異なることが判明。その研究は新たなスタートに立っている。国分尼寺（b）は近年高崎市教育委員会によって確認調査が進められており、伽藍配置が判明しつつある。一方で説明には国府周辺域を含め、古墳時代以来の生産域の再編が行われる。前橋・高崎台地とその間の井野川低地帯を包括する広域条里の施工である。前橋市南部拠点地区遺跡群No.11では坪交点からまとまつた土器の出土が確認され、施工年代を示している。また、条里的施工に伴い用水路網の整備も行われており、前橋台地では広瀬川から取水した用水路網（女溝や川曲大溝）が、高崎台地から井野川低地帯では様名白川から取水した用水路網（後の長野用水）が開削されたと考えられる。これらの用水路からは発掘調査によって「物部」と記した遺物が出土している点が注目される。また、交通網の整備も行われたと考えられ、高崎市倉賀野地区や新保・日高地区では条里余剰帶を利用した道路跡と推定される遺構が検出されている。当説明前半に想定される東山道駿路の「下新田ルート」も、現状広瀬川以西では未確認だが、おそらく条里余剰帶を利用したものであったと推定される。なお、当説明における条里施工は確実であるが、先行する飛鳥時代にその設営に関わると推定される短命な集落遺跡が点在していることは興味深い。本地域における条里施工弱化は、今後も検討を深める必要がある。

平安時代 国府城やその周辺では、集落・寺院・条里は前時代からの継続と理解されるが、集落は標高の高いエリアに集中する傾向が

指摘でき、畠作や馬匹生産を視野に置く必要があるだろう。吉岡町大久保A遺跡（39）はかつて「有馬島牧」の可能性が示唆されたが、その後渋川市半田中原遺跡から「有牛」墨書き土器が出土したことでの牧關係遺跡説は否定された経緯がある。現状では三宮神社（B）が北に隣接して創建していること、古代伝路の可能性がある「鎌倉街道」沿いに位置する点から、群馬桃井郷の中心的集落であると考えられる。何れにせよ、こうした集落の成立背景は、条里水田の荒廃と対をなす現象と言えるのだろう。

古代末～中世 元総社地区に蒼海城が築城される。その詳細な時期や成立過程については不明な部分が多いが、「上毛伝説碑記拾遺」「總社記」には長元元年（1028）に城館の存在を示す記述があり、實際の発掘調査成果でもこれを肯定し得るような古代末の遺構・遺物の集中が、蒼海城中枢部で確認されている。しかしながらその実体は「区画溝に囲まれた何か」で、居宅のようなものと推察される。「吾妻鏡」には、治承四年（1180）に元総社地区を支配していた源氏方の千葉常胤の居宅を平氏方の足利俊綱が焼き払ったとの記述があり、まさにその千葉氏の居宅が蒼海城初期の姿であったと思われる。

その後、建武四年（1337）に山内上杉憲頼が上野守宣護に、上杉氏家宰である長尾氏が14世紀中頃までに入部したと考えられ、長尾氏は白井城の白井長尾氏と蒼海城の總社長尾氏とに分立、守護代として来る。享徳三年（1454）に始まる享徳の乱は東国全城を巻き込む戦乱となり、上野国でも長尾景春の乱（文明九年・1477）や長享の乱（長享元年・1487）が相次いで勃発する。これらの戦乱を契機に蒼海城は城郭化したようである。大永七年（1527）には北条氏綱方の白井・總社長尾氏と真輪・豊橋長野氏の間で抗争が勃発、蒼海城は長野方業の攻撃を受けている。後に長尾氏は上杉家の関係修復を果たすも、長尾氏とは依然緊張関係が続いた。永禄九年（1566）、甲斐国の武田信玄によって真輪城が落城、翌年には蒼海城も攻略され上野国西部は武田氏の支配域となる。以降、元総社地塊は武田・上杉・織田・北条の支配が繰り返され、天正十八年（1590）の小田原城落城によって徳川家康の支配域となる。蒼海城には同年に諏訪頼永に替わって秋元長朝が入部する。秋元氏は荒廃した蒼海城を捨てて父景朝ゆかりの地である上野駒込（現在の総社町）に新城を築くことを選んだようで、新城が完成するまでの間に蒼海城の東方牛池川対岸の八日市町に居住し、慶長十五年（1610）に完成した新城である総社城に入城、これをもって蒼海城は廃城となった。



山崎一 1978 「群馬県古城跡の研究 上巻」より作成

Fig.3 蒼海城籠張図

### III 調査の方針と経過

#### 1 調査の基本方針

今回の発掘調査は、区画整理事業地内の道路新設に先立つもので、ちょうど十数路部分に相当する。直前まで平屋の「文化住宅」複数棟と鉄筋コンクリートのアパート1棟が建っており、緩い傾斜地を水平に造成するための削平をかなり受けている印象であった。また、南側畑地には蒼海城本丸西側へ続く堀跡が確認され、その延長部の確認も明白であった。こうした経緯もあり、隣接既調査区の成果を参考に、事前の確認調査は行わずに本調査となった。現地調査は排土処理の関

係から、蒼海城堀跡部分の調査を先行し、その後堀跡部分に排土山を形成するスイッチバック方式で実施することとした。蒼海地区最後の大面積調査で、かつ蒼海城の堀底を見ることのできる最後のチャンスと考え、堀跡調査は弊社の機械力を集結させてこれに臨んだ。堀跡以外は、堀の東側では擾乱層直下の総社砂層上位、堀の西側ではAs-C混土下位の黒ボク土上面を確認面とした。

#### 2 調査経過

令和4年1月5日、アパート跡地である推定堀跡東側の遺構残存状態を探るために、トレンチを重機により掘削。思いのほか残存状態が良いことを確認、心の準備。そのまま堀跡の重機削削に移行。翌6日から作業員投入。堀の立ち上がり→堀底の順で精査を行う。排土は既に重機のバケットが届かない深さ・距離なため、調査区端で堀跡を切断するトレンチを開削。ここに人力精査の排土を運び、重機で上げる方法で調査。12日に堀跡部分の確認を文化財保護課より受けた後、空掘・測量、その後埋め戻し。休日を利用して東端から表土除去開始。これを追いかけて人力で鶴巣による遺構確認を行い、適宜遺構に附着して掘り下剥開始。並行して堀跡西側の表土削削。東側とは驚くほど土の様相が異なっており、剥ぎ足りない部分を何度も再進入して削削するという試行錯誤もあった。

調査は冬から春にかけてという最悪の条件下であった。特に一面総社砂層が露呈した東側調査区では、北側からの季節風による砂塵が凄まじく、給水車で川の水を汲んで持ち込み、動力噴霧器で散水するも焼け石に水状態であった。かと思えば降雪によって作業中止となったり、土が凍結して作業不可能となることも度々で、迫る調査期限に担

当以下調査員はかなり精神的に追い詰められた。終盤に至って春の気配を感じるようになった頃、ようやく西側調査区の遺構に手がついたが、良好な焼失建物跡や平安期とは思えない程に重複した建物跡群に悩まされ、調査関係者全員が体力・気力の限界に達する頃、ほぼ完掘することができた。埋め戻しを翌日に控えた調査最終日、12世紀初頭の竈という誰も経験したことの無い遺構のダメ押しをしたところ、担当者の移植ゴテが白磁碗の完形品を握り当てた。急速精査したところ、竈の下に古代の土塙墓があったことが判明した。白磁碗は頭骨と思われる骨粉集中の脇からの出土で、前作品と判断された。既に測量用の杭を撤去した後で手間取ったが、人骨も発砲ウレタンで土ごと取り上げる等、今回の調査で最大の成果とも言える資料を記録することができた。つくづく調査は最後まで気を抜けないことを再認識した、印象深い出来事であった。

整理作業と報告書作成は、契約締結後の令和4年6月から開始。遺物の水洗・注記・接合、9月から遺物実測に着手、点数多く11月まで要した。その後図版作成と原稿執筆、編集を経て、3月6日に本書の刊行に漕ぎつけた。

### IV 基本層序

調査区は北西から南東へ延びる微高地で、南東方向への緩斜面地であったようだが、中央を南北に走る蒼海城堀跡を境に東側は昭和期の

アパート造成によって削平され、確認面の環境は調査区内でかなり異なる。以下が、本地点の基本層序である。

- 0 昭和期の宅地造成に伴う擾乱層。調査区東側のみ。
- I 灰褐色土 As-A等を含む砂質土壤。耕作土。調査区西側のみ。
- II 暗灰褐色土 As-B軽石を含む。いわゆるB混。調査区西側のみ。
- III 灰褐色土 As-Cを多量に含む。いわゆるC黑。調査区西側のみ。
- IV 黑褐色土 As-Cを多量に含む。いわゆるC黑。調査区西側のみ。
- V 淡黒褐色土 しまり強い。いわゆる黒ボク。調査区西側確認面。東側では南東端のみ現存。
- VI 淡黄褐色土 総社砂層。調査区東側の確認面は本層上位に相当。下位に薄い泥炭質黑色土層を数枚挟んでいる。

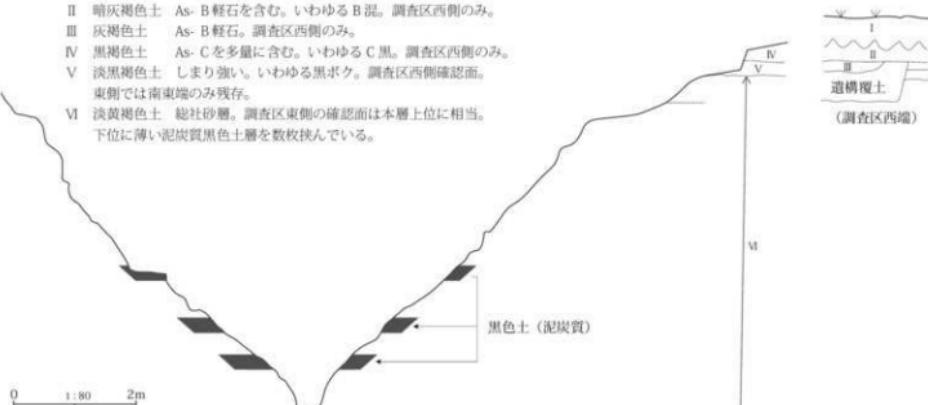
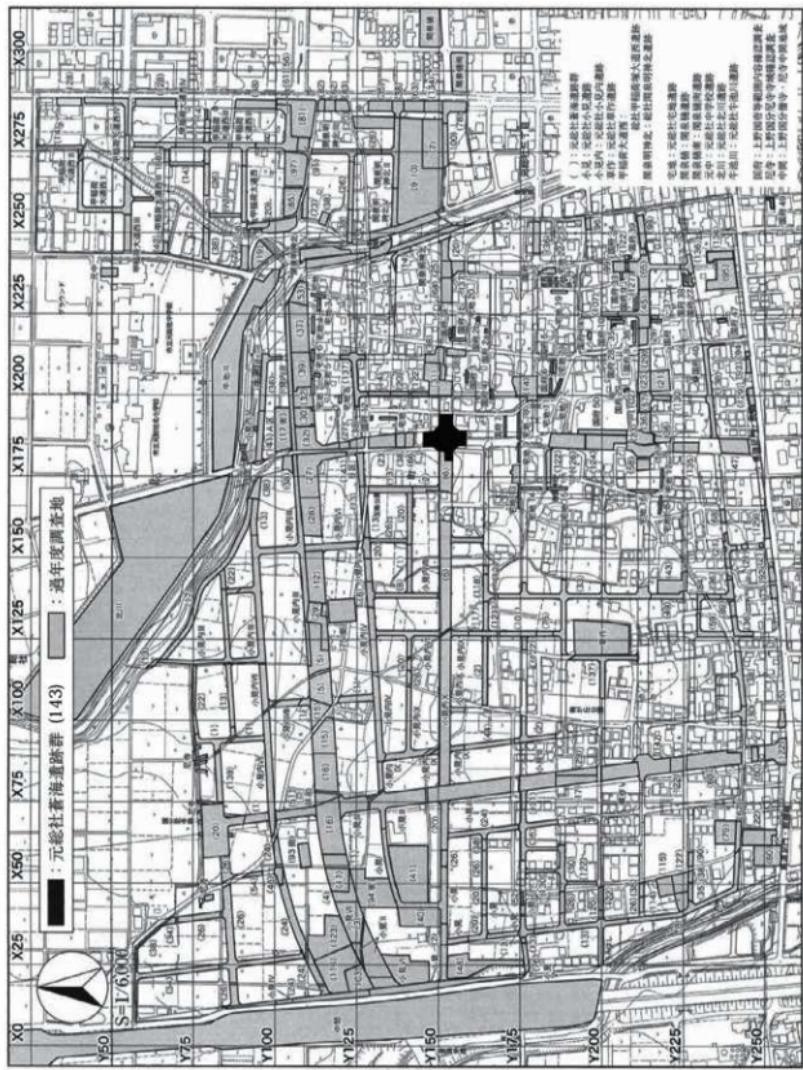


Fig.4 基本層序模式図



## V 遺構と遺物

今回の調査区は、北に平成27年度実施の元総社薺海遺跡群(104)、西に元総社薺海遺跡群(6)東調査区が隣接しており、南北に走る薺海城跡等の検出遺構や出土遺物は予め予想可能であった反面、東半部では昭和期の文化住宅群等の建設による削平・擾乱が懸念された。実際には中央の堀跡と西半部は隣接調査区の成果から予想された範囲であったが、東半部は全面的に上面削平されているものの遺構を消滅させるほどではなく、予想以上の遺構数であった。既に述べたように

季節的な条件の悪さ、それから生ずる作業進捗の遅れがスケジュールを圧迫し、精度の低い調査となってしまったことは否めない。

今回の調査区では古墳後期～奈良時代、平安時代の堅穴建物跡と溝跡・土坑・土壤墓、遺物もその時期の土器・陶磁器・鉄器をはじめ、縦文時代の土器・石器もある。遺構の教示は図・表を、遺物は概観表を参照されるとし、ここでは堅穴建物跡、溝跡、墓跡を中心に説明する。なお、ピットの多くは時期不明であることから、割愛させて頂く。

### (1) 堅穴建物跡

現地調査段階ではH-29まで附番し、H-5・20を欠番としたが、枝番を合わせて合計29軒である。本報告では遺物注記や遺構図面原図の混乱を避ける意味で欠番枝番のままとした。以下、遺構毎に説明する。

**H-1 堅穴建物跡** 調査区中央北寄りに位置し、薺海城跡であるW-1に切られ、北西壁の一部を近年の擾乱によって失っている。堅穴部は北に対して斜行する軸方向で、正方形に近いが南北にやや長い長方形である。覆土は比較的黒味が強く自然堆積と考えられ、土師器・須恵器片が出土している。床面はほぼ直床で、総社砂層の上に貼床状の汚れた土を認めるが、硬化範囲ははっきりしなかった。壁周溝は竈を除いて全周するようである。床面からは土器以外に砾石と自然石が散在的に出土しており、南東壁際から出土した自然石4点は使用状態を示す括弧石と考えられる。柱穴については対角線上に4ヶ所深い主柱穴(P1～4)と、南東壁際に浅い出入口の梯子穴を1ヶ所確認できた(P6)。竈は北東壁の中央南寄りから検出された。構築材として総社砂層の板状材を両側に使用していた。焚口部付近で土師器長胴瓶がソケット状に重なって出土しており、天井部の構築材であったことがわかる。また、煙道入口部には太い柱状粘土質(燒結している)が検出されているが、位置も燃焼室より奥であること、高さも20cmあるので、窓を支える支脚ではなく燃焼室奥の天井を支える構造材と判断される。貯蔵穴は竈に向かって右手前から1ヶ所確認され(P5)、長方形の収口段の中に円形で深い部分がある。上面からは土師器片と須恵器片各1点が重なった状態で出土した。本遺構は貯蔵穴の土器を相間に7世紀中葉と位置づけられる。

**H-2 堅穴建物跡** 調査区中央北端近くに位置する。北側半分以上を薺海城跡であるW-1に、南西壁の一部をわずかにW-2によって切られている。堅穴部は北に対して斜行する軸方向の方形で、南東壁の中央が丸く張り出している。覆土は比較的黒味が弱く、自然堆積で、土師器・須恵器片が出土している。床面はほぼ直床で、硬化範囲ははっきりしなかった。壁周溝は張り出し部でやや浅いが、残存する範囲では全周している。床面からは土器以外に括弧石と考えられる自然石が出土している。柱穴については対角線上の主柱穴と考えられるもの(P2・3)と、位置的には柱穴だが長方形気味で貯蔵穴の可能性があるもの(P1)、南東壁張り出し内の深い梯子穴と考えられるもの(P4)が確認された。竈は確認できなかった。本遺構は床面出土土器から7世紀末～8世紀初頭に位置づけられる。

**H-3 堅穴建物跡** 調査区東側に位置し、北側過半が調査区外に、不鮮明であったがH-7が上に乗っている。堅穴部は北に対してやや斜行する方形で、比較的深い。覆土は比較的黒味が弱く堆積状況は人為的埋め戻しの可能性があり、土師器・須恵器の細片が出土している。床面はほぼ直床で、砂質の凹凸を均す程度に薄く硬質な黒色土があるが、その硬化範囲についてははっきりしなかった。壁周溝は西側のみで、東側には確認できなかった。床面からは東側付近から完全ないしはそれに近い土師器・須恵器が出土しているほか、壁近くから括弧

石と考えられる自然石が散在的に出土している。柱穴については明確なものは確認できず、南東壁際東寄りのものは浅く梯子穴の可能性がある。竈は確認できなかった。本遺構は出土土器を根拠として7世紀末～8世紀初頭に位置づけられる。

**H-4 堅穴建物跡** 調査区中央北寄りに位置し、H-2の東側至近にある。北側をW-1に切られ、南東を擾乱で破壊され、東側が調査区外となり、確認段階で床面がほぼ消失するほどの残存状態であった。堅穴部は北に対して斜行する方形である。覆土は殆ど残っていないが、比較的黒味が強い。平安期の須恵器塊片が出土しているが、混入か重複と考えられる。床面は周囲がほぼ直床ないしは浅い掘方をもつが、中央部分はやや深く掘方があり、床面自体が一段下がっていた可能性があるが残存性が悪く判別しない。壁周溝は南西辺のみで、北西辺側には確認できなかった。柱穴については擾乱下も含めて柱穴と思われる小穴が4ヶ所確認されたが、位置的に主柱穴といえるのは3ヶ所(P1～3)である。他に2ヶ所の土坑(D2・3)があり、覆土は埋め戻し風で掘方の一部と考えられるが、D3(D-2と同一)についてはその形状から、上位に想定される平安期堅穴建物に伴う貯蔵穴の可能性もあるだろう。竈は北西辺のほぼ中央に確認されたが、空焼き時の火床面とその下の掘方で確認されたのみで、残存状態は悪いが改修された形跡がある。なお、竈は竈内部で収まる。貯蔵穴は竈に向かって右側にあり(D1)、平面は不整長方形で比較的深いものを円形で更に深い構造に改修していた。根拠に乏しいが、本遺構は7世紀前半頃と推定される。

**H-5 堅穴建物跡** 調査区東端近くにあり、今回調査区で最東端である。確認面の順序は東に向かって下り始めており、東側現道へ擦り付けるような昭和の造成の為、遺構の東半は削平され床面も消失している。また、東側には近世土坑(D-16)が重複、昭和期の配管に伴う溝状の擾乱も括弧状に本遺構を切っている。堅穴部はほぼ正方形で、覆土は殆ど残っていないが、比較的黒味がある。床面はほぼ直床で西辺近くに掘方があり、硬化面は南半部で認識され、出入口と後述する竈と貯蔵穴の導線を示している。壁周溝は確認できず、柱穴についても明確なものは確認できなかった。竈は東壁南端に火床面で残存していたが軸方向は不明で、あるいはコーナー部であった可能性がある。貯蔵穴(P1)は竈に向かうと背後ないしは右背後に相当する位置にあり、平面は横円形で比較的深い、北側から埋め戻されたかのような堆積で、底面には白色の粘土質土も確認され、本来粘土貼りであった可能性がある。覆土中位から羽釜片が出土している。本遺構は貯蔵穴出土遺物から10世紀代と推定される。

**H-7 堅穴建物跡** 調査区東側に位置し、H-3の上に乗っている。古い立木痕跡と思われるシミ状の黒色土部分が確認面で確認が困難であった上に、近世以降の剥がれ裏状の擾乱から廻れる民家の擾乱が全体的に及んでおり、残存状態は悪い。堅穴部は壁面が確認できなかつたが、方位に近い方形であったと考えられる。覆土は殆ど残っていないが、比較的黒い。床面は硬化面が確認され、概ね竈の前面に相当

する。硬化面の西端付近には被熱を受けた浅い窪みがあり、かと判断したが鉄塊系遺物は確認できなかったことから鍛冶炉ではないようである。遺物はほぼ柱の近くの床直で出土しており、土師質土器の小皿等がある。竈は竪穴部の残存状態が惨憺たる状況であったものの比較的良好で、南東・北西軸であることからコーナー部設置であることがわかる。燃焼室は判斷しないが竪穴部床面より下に潜る煙管状の長い煙道部が掘方内より確認された。本遺構は10世紀後半～11世紀代と推定される。

**H-8 竪穴建物跡** 調査区東側に位置し、H-7 の南東至近にある。I-1 に切られ、上位は削平されている。竪穴部はほぼ正方形で、覆土は暗褐色であった。床面は竪穴中央付近に硬化面を確認されたが、調査開始時に投入したトレントンによって半分以上を失ってしまったため、判斷しない。壁周溝は竈を除き全周し、比較的太くしっかりしたプランで検出された。柱穴は小穴を複数確認したもの、明確なものは無く（P5・6 は後世か）、南廻廊に近いもの（P1・2）は出入口施設にかかる可能性を指摘できる程度である。床面下には全面的に浅い掘方があり、特に中央部分には不整形に深い部分が認められたが、西側のものは縄文期の土坑の可能性がある。竈は東辺南端にあり、掘方では東西主軸であることからコーナー部設置ではない。改修を経て2 時期あるようだが、後世のビットに切られた上に覆土も薄く、平面と断面で確認を繰り返したものの判然しない結果となってしまった。瓦片が數点出土しており、構築材と考えられるがその位置は動いているようであった。貯蔵穴は竈に向かって右背後にあり、平面横円形で上端に浅く段をもつ（D1）。本遺構は10世紀後半と推定される。

**H-9 竪穴建物跡** 調査区中央北東寄りに位置し、D-5 に僅かに切られる以外は比較的の残存状態は良いが、近傍の H-1 と共に上位はかなり削平を受けている筈で、本来的な深さは倍以上であったのだろう。竪穴部は北に対して斜行し、南北に長い開長方形で、全体に丸みがある特徴的なプランと言える。覆土は黒味の強い自然堆積で、土師器・須恵器片が出土している。床面は南北がほぼ直床で、硬質な織紋砂層上に貼床状の汚れを認めるが、硬化範囲ははっきりしなかった。北半は床面が無く、不定形な掘り込みとなっている（D1）。明確な掘り込み面を層位的に示せないものの、上半は黒褐色の竪穴部と同じ覆土であることから、建物廃絶後程なくして床面から掘り込まれたと理解される。壁周溝は断続的であるが全周しておらず、東辺では壁から離れて二重になっている。内側の壁周溝は床面を剥がして確認されたことを考慮すれば古段階と判断されるので、東壁を拡張する改修が想定される。柱穴については北辺と南辺の壁下中央に対となる小穴があり（P1・2）、稀であるが主柱穴 2ヶ所であったと考えられる。注目されるのは、北壁下中央の柱穴（P2）は、先の床面からの掘り込み（D1）がこれを避けたかのような半島状に突出する部分に位置している点である。おそらく床面からの掘り込み（D1）は、上屋の存在していた建物内での掘削であった為、無理矢理でも柱を残す必要があったのだろう。掘り込みの性格については、硬質な織紋砂層を削り除いて剥ぎ取ったかのような凹凸が観察されること、排土と思しき土塊内部には無いので、基本掘出した可能性が高い。つまり竈構築材の採掘坑と考えられる。竈は東辺の南寄りにあり、明確な構築材は抜き取られたのか判斷しない。断面観察を繰り返した結果、南寄りの旧竈をやや北の新竈に作り直した可能性が導かれた。貯蔵穴は一般的な位置（竈右側）から確認されなかったが、これについては竈左側の貯蔵穴が廃絶後の廻材採掘坑（D1）によって消失した可能性も排除しきれない。本遺構は壁周溝から想定された竪穴壁を東に拡張する改修、竈を作り直す改修が認められ、廃絶（＝空家）を挟んで 2 時期存続した建物と捉えられる。そして最後には上屋を残したまま廻材の採掘に供されたという、興味深い所見が得られた。7世紀末～8世紀初頭に位置づけられる。

**H-10 竪穴建物跡** 調査区東側に位置し、H-6 の南西、H-8 の南東至近にある。昭和期の宅地に伴う配管が集約する場所であり、その撤去に伴う擾乱も激しく、残存状態は悪い。竪穴部はほぼ正方形の概略正方形で、覆土は暗褐色でやや黒味があった。床面は竪穴中央で僅かに硬化面が確認されたが、大半は擾乱による損傷を受けていた。従って壁周溝は確認できなかった。柱穴は不明で、北辺西寄りの竪穴壁に奥いくむ土坑状の跡（P1）が確認されたが、柱穴とは考え難い。床面下には全面的に浅い掘方があり、土坑状の浅い窪みが複数確認されたが、擾乱と判断し難い状態であった。竈は擾乱によって失われたようで、東辺南端にあったと推定される。貯蔵穴は竈に向かって右背後で確認され（D1）、平面は不整梢円形で、基盤層中の石を避けたようである。覆土中から土師質土器の高台付碗と小皿が出土している。これを根拠に、本遺構は 10 世紀中葉～後半に位置づけられる。

**H-11 竪穴建物跡** 調査区東側南寄りに位置し、近世～現代までの擾乱によって破壊されている上、南東隅は調査区外となる。竪穴部は北に対してやや斜行し、南北に僅かに長い長方形である。覆土は暗褐色系で埋め戻しと考えられる層序、土師器片が含まれている。床面は貼床状に複数面認められるが、全体的に緩く硬化面では確認できなかった。床下には掘方をもち、中央部分は不定形土坑状にやや深く。壁周溝は竪穴壁の残存する全ての場所に認められ、竈の袖下にも巡る。柱穴については対角線上から 4ヶ所確認された（P1～4）。竈は南西辺の南寄りに確認されたが、大半は擾乱により破壊され、右袖のみ残存している状態であった。袖は粘土質で構築され、先端には土師器皿が逆位で封入された状態で出土した。貯蔵穴は竈に向かって左側にあり（D1）、平面長方形でやや深いものを、円形で深い構造へ改修していた。竈に封入された土器を根拠に、6世紀後半～7世紀前半に位置づけられる。なお、H-4 は貯蔵穴や床面・掘方が本遺構に類似していることから、同期的と考えられる。

**H-12a 竪穴建物跡** 調査区中央南東寄りに位置し、H-12b の覆土上で確認した。昭和期の鉄筋コンクリートアパートの合併浄化槽とそれに繋がる配管、さらにそれらの撤去によって破壊されており、床面と推定貯蔵穴を辛うじて把握したに過ぎない。竪穴部の形態は全く不明であるが、面的に確認された床面硬化範囲と推定貯蔵穴（D1）の位置関係から、H-12b よりも東側に中心をもつ正方形のプランであった可能性がある。床面からは高台付碗（柄碗 62）が出土している。竈は擾乱によって失われているが、推定貯蔵穴の位置から逆算すると東辺の南寄りであったと推定される。推定貯蔵穴（D1）は円形であった。本遺構は 10 世紀後半に位置づけられる。

**H-12b 竪穴建物跡** 調査区中央南東寄りに位置し、近世～現代までの擾乱や土坑（D8）によって破壊されているが、遺構自体が汚染しない、比較的の残存状態は良かった。上に H-12a、西側に H-19 が重複しているが、切り合いの実質は擾乱で不明。遺物から本遺構が最も古い。竪穴部は北に対してやや斜行し、東西にやや長いが正方形の輪郭内である。覆土は黒味が比較的強いもので、土師器・須恵器の破片が西方から流れ込んだかのように多数出土している。床面はほぼ直床、周囲が掘方状に下がる部分もあるが、掘方は無いに等しい。汚れた土が貼床状に薄く認められたが、硬化範囲は判然としなかった。壁周溝は竈を除いて全周していたようで、北辺と西辺では竪穴部の壁から少し離れている。柱穴については対角線上から 4ヶ所確認され（P1～4）、北東の 1ヶ所を除いて新旧認められた。壁周溝の在り方を含め、竪穴部の拡張と柱の付け替えという大規模な改修を、最低 1回は想定できる。竈は東辺中央やや南寄りに確認されたが、廃絶時の破壊のためか判然としない。とは言え右袖には土師器皿 1 個体が逆位の封入状態で出土し、空焚き内の充填上下から煙道を確認している。貯蔵穴は竈に向かって右側にあり（P5）、断面逆台形の平面円形である。柱穴

(P4) が側面に露呈する位置関係で掘り上ったことから、貯蔵穴も本来は新旧あったと思われるが、把握することが出来なかった。本遺構は出土器を根拠に、7世紀前半に位置づけられる。東に位置するほぼ同時期の H-11 が先述のように埋め戻しを思わせる覆土であることから、建て替えの可能性は十分と言える。

**H-13 穫穴建物跡** 調査区南側東寄りに位置し、北東一部を攪乱によって破壊されているが、比較的保存状態は良好である。南東部で H-14 の北西隅を切っている。竪穴部は北に対してやや斜行し、東西に長い長方形である。覆土は黒味のある褐色系で、床面はほぼ直床である。壁周溝は認められず、柱穴についても明瞭なものは無い。竈は東辺の南寄りに確認され、煙道が窓穴外へ大きく伸びる(旧)段階から、より手前に作り直された(新)段階へ、大きく 1 回の改修が確認された。貯蔵穴は竈に向かって右側にあり(D1)、丸ん方形で比較的大きいものを、南にずらして二回りほど小さい円形に改修している。これは竈の新旧に対応するものであると言える。また、竈の左側から確認された小穴(P1)も貯蔵穴の可能性があり、土器片が入っていた。本遺構は 7世紀末~8世紀初頭と考えられる。

**H-14 穫穴建物跡** 調査区南側東寄りに位置し、南側の一部を攪乱、東側大半は調査区外、北西隅は H-13 に切られる。また、覆土中に 10世紀代の土坑(D-21)が重複していた。竪穴部は北に対してやや斜行し、半分近くが調査区外であることから不確定だが、正方形と考えられる。覆土は黒味が強い自然堆積で、床面は浅い削り込みをもつ。北西隅の床面には自然石が張りして周囲が下がっており、除去を試みたが踏めた可能性がある。壁周溝や柱穴、竈は確認されなかった。明確な出土遺物は無く困難だが、本遺構は 7世紀後半以前と考えられる。竪穴部を剥離したが石に当たり、放棄された建物の可能性もある。

**H-15 穫穴建物跡** 調査区中央やや南寄りに位置し、蒼海城城跡である W-1 に西半を切られ、近年の攪乱によって南北を失っている。竪穴部は北に対して斜行、東西に長い長方形である。覆土は黒味が強い。新旧 2 時期あり、北東辺の北寄りに旧段階の壁が残り、竪穴部の角度をすらすら改修があったようだ。床面はほぼ直床で、新段階のほうが深い。壁周溝は旧段階のみである。柱穴については明瞭なものは確認できなかった。竈は北東辺の中央に旧段階(A)が煙道のみ残存、南東隅には新段階(B)が攪乱に南半を破壊された状態である。貯蔵穴は竈に向かって左側にあり(P2)、P1・P3 については掘方の可能性がある。遺物は少ないが、新段階貯蔵穴の北側床面上から土器の小型腹頭器が出土している。時期判定困難な器種だが、これを根拠に 6世紀代と考えたい。

**H-16 穫穴建物跡** 調査区南側の南寄りに位置し、H-17 の覆土上面で確認した。総社の壁上位の確認面と H-17 とは異なるプランを確認したことから精査して検出に至ったが、硬化した床面範囲と弧を描く壁の立ち上がりを把握したのみで、竈等は不明であった。弧を描く部分から丸ん方形の竪穴部を推定できない訳でもないが、角度が北に対して傾く方形となってしまい、平安朝の竪穴建物としては相応しくない。何より竈の痕跡が確認できないことも不可思議である。しかし後述する H-27 のような西側に竈状の火所を持っていたとすれば、竈は中世の W-3 によって破壊されたという説が芽つく。床面出土遺物から本遺構は 10世紀後半以降に位置づけられる。

**H-17 穫穴建物跡** 調査区南端近くに位置し、北半上位を H-16、南端を H-18、東隅を W-2、南西辺中央を I-2 に切られ、南東辺の西半は桑根の攪乱が入っている。竪穴部は北に対してやや斜行する正方形で、覆土は黒味が比較的強い。土器部・須恵器の破片が床面ないしやや浮いた状態で多く出土している。床面はほぼ直床だが周囲は隻い掘方をもつ部分もある。硬化範囲は判然としなかった。壁周溝は竈付近と南東辺を除いて確認されたが、攪乱を受けた南東辺も本来は巡っ

ていた可能性がある。柱穴については対角線上で 4ヶ所、西側 2ヶ所は新旧 2基がセットで確認され、柱の付け替えを伴う改修が最低 1 回行われていたことがわかる。竈は東辺中央に確認されたが、廃絶時の破壊か上位の H-16 の床面造作によって攪乱されており、形態を明らかにすることは叶わなかった。貯蔵穴は竈に向かって右側にあり、深い円形部分の上線に浅い方形部分をもつ。本遺構は出土遺物から 6世紀後半に位置づけられる。

**H-18 穫穴建物跡** 調査区南端に位置し、北辺で H-17 を切り、東辺北半を D-19、西辺全てを D-20 に切られ、南側過半は調査区外となる。北辺は H-17 との重複部分が攪乱されており不明だが、僅かに残存する東辺の壁を根拠とすれば北に対してやや傾く方形と考えられる。覆土は比較的黒味があり、調査区壁断面では東側に燒土等が認められることから、竈が近いことを知れる。床面はほぼ直床だが、硬化範囲は凍結が激しい時期の調査であったため明らかにし得なかった。壁周溝・柱穴は未確認である。竈は先述のように土層から東辺の調査区外と推定される。本遺構は出土遺物から、7世紀中頃と考えられる。

**H-19 穫穴建物跡** 調査区中央南寄りに位置し、H-12a・b の西に接しているが、近世の D-8 が存在し、切り合い関係は不明である。昭和期の鉄筋コンクリートアパート下に相当し、その撤去に伴う攪乱が激しく、北半は失われている。また、後世の土坑(D-25・40・41)もある。竪穴部は北に対してわずかに傾くがほぼ正方形の形で、上位が削平されていることは言え深い。床面は竈前を中心に硬化しており、周囲は柔らかい。また、竪穴部西南隅には焼土が集中し、焼失建物の可能性がある。柱穴は確認されなかった。竈は東辺の南寄りに焼土・粘質土の集中があり、これを竈の残骸とした。貯蔵穴は竈の両側に 2ヶ所確認し、南の D2 の方が古く、北の D1 が新しい。從て竈も新旧あったと思われるが、南東隅は攪乱で失われており不明である。本遺構は出土遺物から 10世紀代と考えられる。

**H-21a・b 穫穴建物跡** 調査区西側西端近くに位置し、H-22・23・DB-3 を切り、D-13 に切られ、東辺中央を攪乱している。新旧 2 時期あり、新段階を H-21a、旧段階を H-21b とした。

**H-21a** は竪穴部が北に対して西へ少し傾く東西軸の長方形で、As-B 磁石を含む「B混土」を覆土とする。「B混土」は当地域では中世の遺構覆土の指標となる上で、当初は竪穴建物跡埋没過程の窓地が中世に攪乱されたものと考えて掘り始めたが、当該土の直下から床硬化面が確認されたものである。床面は As-B 磁石を多く含む土で形成され、竈設施前を中心に硬化していた。床面上からは白磁碗破片と鉄鏃、棒石が出土している。柱穴は床面上で確認できず、後述する旧段階 H-21b の調査時に確認しており、その内のいくつかは新段階である本遺構に伴う可能性が考えられる。竈(竈設施)は竪穴部の北辺東寄りにあり、竪穴部内に取り巻く竪穴部外には出ない位置関係である。環状と西側へ半島状に伸びる範囲で焼土・炭化物を含む粘質土が確認され、環状部には 3 個の石が正三角形の位置で据えられて、石の内側は被熱していた。断面を多く残して精査したが、いかなる形状の施設であったか、解明することは叶わなかった。ただ、半島状に伸びる粘質土下には床硬化面が確認できた部分があるので、粘質土の範囲は崩壊した構築土を示す施設の範囲では無いようである。近世住家に見られるような「へつり」に近い形態であった可能性がある。竈設施の左手前には円形の土坑が 1ヶ所確認され、貯蔵穴の可能性がある。

**H-21b** は H-21a 下から入笠状に確認された。竪穴部は H-21a と相似形で、二回り程度小さく、位置的には南に偏る。As-B を含む H-21a の床面を剥がすと、As-B を主体とする砂層が現れ、この砂層直下から床面が確認された。床面はあまり硬くなく、床下には浅い掘方をもつ。なお、床面構成土(=掘方)には As-B の混入は無い。柱穴は 4箇で確認され、2ヶ所が組となる位置関係のものがある。新旧

に対応する可能性があるが、雪の降る調査終盤の精査であり、細かい検討を行う余裕が無かった。壁周溝は北辺西半のみで確認された。遺物は土器細片以外、本遺構に伴うものは出土していない。竈についても確認されなかった。状的にはH-21bはH-21aの改修前の姿と考えられ、具体的には竪穴部の拡張である。この新旧の堆積土層中におけるAs-Bの在り方を見る限り、改修はAs-B降下（被災）を契機としていると考えられる。なお、H-21bに竈が確認できず、床面が硬くない、伴う遺物の出土が無い点を考慮すれば、H-21bは建築中の建物であった可能性もある。いずれにせよH-21a・bは、As-Bの降下時、浅間山天仁元年（1108）の噴火を跨ぐ時期の遺構と位置づけられる。

**H-22 竪穴建物跡** 調査区西端南側に位置し、H-21a・21b・23・26a、D-13に切られ、南辺が調査区外となる。竪穴部は北に対してやや東に傾く南北軸の長方形で、竈の位置から調査区外となる南端部は僅かだろう。覆土は淡い黒色で、床面は竈前から南にかけて硬化しているが、それ以外は柔らかく判別しにくい。掘方もごく浅いものであった。床面上には焼土や粘質土が分布していたが、これは竈由来と思われ、焼失建物とは思われない。また、床面上や少し浮いた状態、すなわち覆土最下層から比較的多くの遺物が出土しており、竈前の床面上から出土した馬骨は廬屋内への廻棄であるが、解剖学的位置を保った前肢という鑑定所見である。かなり奇異な事例と考え、土ごと切り出して取り上げた。柱穴については、明確なものは確認できなかつたが、床下相当から不定形な土坑・小穴が確認された。本遺構以前のものも含まれていると思われる。竈は東辺中央南寄りにあり、袖に粘質土が残るが全体に貧弱な構造で、煙道部先端はH-26aに切られて失っている。燃焼室上部から羽釜破片が多数、煙道入口相当からは支脚状の石が立てられた状態で出土している。貯蔵穴は竈の両脇にあり、何回かの作り直しが想定される。最終的なものは竈左側で、多数の土器や馬骨が出土した。右側のものは複数基重複した状態で、床面のものと床面を切るものがあるが、先述の馬の前肢骨の取り上げを優先せざるを得ず、細かい観察を果たせなかつた。本遺構は出土遺物や切り合い関係から、10世紀後半に位置づけられる。

**H-23 竪穴建物跡** 調査区西端に位置し、H-21a・21bに切られ、H-22を切っている。また、西側調査区は平成17年度に（6）地点東調査区H-3・5として調査されており、同一遺構である。

竪穴部は北に対してやや傾く南北軸の長方形で、覆土は淡い黒色である。床面は竈前から中央部分南にかけて硬化し、部分的に壁周溝が巡る。柱穴は複数のピットが確認されているが、明確に伴うものは不明である。竈は東壁中央南寄りと南隅に2ヶ所確認され、南隅をA、東壁中央南寄りをBとした。断面観察ではBからAへ造り替えられており、2基共土坑状に下がるタイプであるが、共に残存状態は芳しくなく、具体的な構造については判断しなかつた。貯蔵穴はそれと想きものが2ヶ所確認された。南壁近くのD1はB竈に伴う旧段階のもので、覆土は埋め戻し土であった。北壁に近いD2は、既に（6）地点の調査でも確認されていたが自然堆積の黒色系覆土で、A竈に伴う新しいものと推定される。本遺構は出土遺物や切り合い関係から、11世紀前に位置づけられる。

**H-24 竪穴建物跡** 調査区西側に位置し、H-26a・bに切られている。北に対して傾いた角度、比較的黒味の強い覆土から、当初は古墳時代の竪穴建物跡の可能性を考えたが、結果として硬化面等は確認できず、竪穴建物跡という確認は得られなかつた。方形のプランとして掘り上がつたが、自然遺構の可能性も否定できない。平安期の跡か出土しているが、H-26bのものを取り上げ段階で混入した可能性が高い。

**H-25 竪穴建物跡** 調査区西側に位置し、H-26a・26b・29を切り、東辺はW-1に切られている。また、覆土には中世墓(DB-1)がある。

竪穴部は北に対して僅かに傾く南北軸の長方形で、比較的深く、黒味のある覆土である。床面中央部は広く硬化しており、遺物・自然石が散在、東側には焼土の分布もある。壁周溝は部分的に途切れる部分もあるがほぼ完周し、西辺では二重になる部分もあることから、壁を拡張する改修が行われたことを窺うれる。柱穴は規則性に乏しいものの比較的深いが數ヶ所あるが、壁周溝から窺われる改修によって付け替えられた結果の累積のようで判然としない。竈はW-1に破壊された東辺に存在していたよう、床硬化範囲が集約される東辺中央南寄りに推定される。貯蔵穴はD1としたものがそれで、竈に向かって右手前に相当する。やはり新旧2時期あり、新段階のものは周囲が土手状に高くなっている。本遺構は出土遺物から11世紀前半頃と考えられる。

**H-26 竪穴建物跡** 調査区西側に位置し、H-22・24を切り、H-25に切られる。また、南側は調査区外となる。新旧2段階あり、新段階をH-26a、旧段階をH-26bとする。

**H-26a**は竪穴部が浅く、北に対してやや傾く方形プランで、調査区外を勘案しても正方形に近いものであったと推定される。覆土は黒味が強く、床面は中央部から南にかけて硬化面が確認されるが、東側では柔らかく下層のH-26b 覆土と区別が困難であった。壁周溝は確認されず、柱穴は浅いものか壁際に不等間隔に並ぶが、主柱穴と言えるしっかりしたものは確認できなかつた。床面上の壁近くには所々に焼土が見られたが、床面は被熱していないのでむろではなく、炭化物も伴わないことから焼失建物という誤りでも無い。壁土等の可能性がある。遺物は小破片のみで、明確に伴うものは無い。竈は調査区外で、最後に重機でダメ押ししたところ、南西隅近くにあることが判明している。貯蔵穴は竈の背後に相当する南西隅付近に1ヶ所、調査区壁に半分かかった状態で確認された。円形で比較的深い。本遺構はH-26bを西側へ拡張したものと考えられるが、旧段階であるH-26bの西壁付近で床面に弱い段差があり、水平で無い点からは通常の建物（住居）とは異なる性格が考えられる。

**H-26b**の竪穴部はH-26aと同角度で、南辺が調査区外となるが南北軸の長方形である。H-26aの床面下から確認された。床面は中央部南寄りに硬化面が確認され、ほとんどは直床だが、北西隅に一段深くなる掘方をもつ。床面上には多量の炭化物と焼土あるいは焼失建物であることは確実である。炭化物に混じて炭化米や炭化穀物の殻やそれが散乱したものが輸出され、屋根裏に収納されていたものが抜け落ちたと考えられる。また、炭化物の下や間からは多数の土器・鉄器が出土した。土器は完形品が少なく、火災後に周囲から捨てられた零落体である。壁周溝は確認されず、柱穴も小穴が点在するが主柱穴は見当たらない。竈はH-26aで指摘したように調査区外で、H-26aと同一であったと思われる。貯蔵穴は竈の左後ろ、調査区壁にかかって2ヶ所重複して確認され、床面との兼ね合いか新旧である。本遺構は遺物や切り合い関係から、10世紀末～11世紀初頭に位置づけられる。また、遺物に鉄器各種が多い割に鉄滓が見られず、鉄器の修繕工房のような性格が考えられる。

**H-27 竪穴建物跡** 調査区西側に位置し、D-32・W-1に切られている。竪穴部はほぼ正方位の方形で、非常に浅い。比較的黒味の強い覆土であるが、この部分は確認面も黒く、確認に難儀した。床面は竈前がやや硬いが、それ以外では認定する困難で、D1とした南西隅の堆みは掘方であると考えられる。壁周溝や柱穴は検出できなかつた。竈は西辺中央にあり、竪穴内に収まることから、当初は古墳時代の建物跡と考えていた。平面横円形の浅い土坑状となる堆み中央に被熱部があるが、構築材の粘質土等は確認できなかつた。正確にはH-21aと同様、竈設置とすべきかも知れない。竈周辺からは破片化した土釜と土師質土器の塊が出土しており、特に土釜は復元後の使用痕跡等

の観察から、移動式竈として転用されたものと判断された（外山政子氏ご教示）。本遺構の竈（竈状施設）は、この移動式竈に対応したものであったと考えると、構築材が確認できること、竪穴部の壁から出ないこと、西側に設置される稀有な状況の説明もつく。時期については10世紀後半に位置づけられる。

**H-28 積穴建物跡** 調査区西側に位置し、D-28・38に切られている。北側は調査区外だが少しの木調査区を挟み、(6) H-1として平成17年度に調査されている。それを参照すると竪穴部は北に対してやや傾き、南北にやや長い長方形である。今回調査区では土坑によって大半破壊されているが、東面南寄りから竈の焼道部分が確認された。煙道は深く、竪穴外へ延びるものであった。本遺構は、今回調査では時期の特定が可能な遺物は出土しなかったが、(6) の報告では遺物こそ示されていないが、9世紀後半～10世紀初頭とされている。

**H-29 積穴建物跡** 調査区西側に位置し、H-25・D-35に切られている。H-25と同角度だが規模は小さく、残存部分で壁周溝が確認された。時期判定可能な出土遺物は無く、時期不明であるが、H-25の抜張前とすれば平安時代であろう。

## (2) 溝跡

3条を調査した。W-1は蒼海城塹跡、W-2は古代の区画溝、W-3は中世でW-1と平行することから、関連遺構と考えられる。

**W-1** 調査区を南北に縱断し、調査区北側で東方に屈曲している。溝（堀）の両側、すなわち東西で確認前の高さが異なっており、これは先述した後世の削平もあるだろうが、地形の勾配に合わせた曲輪の造成も考慮される。高い側には調査直前まで旧道があり、その部分は段切状に削られてテラス状となっていた。この道の開闢に際してはかなりの土量を移動したはずであるが、堀の上層にその気配は無かった。（永井）

両側が確認できる調査区中央部分を広く底面まで調査し、北側の屈曲部分は幅広のトレンチ調査を行った。完掘した調査区中央部分では堀幅約12m、深さ約6mを測る。大きく分けて3期の変遷が認められ、a→b→cの順である。

a期の堀は薦葉樹原状に最大深度まで掘られており、湧水層に達している。下層には上層屈曲部により砂とシルトのラミナ状堆積が複数認められ、管理された水路として利用された時期が一定期間想定される。その後、この堀は堀肩部の序盤である総社砂層の砂礫ブロックと黒色土の混成土で埋没。短期間に廃絶され、さらに東方向からのみ堀の傾斜に沿った層状堆積土によって埋め戻される。この堆積土は総社砂層下層に認められるやや粘質の砂質堆積土由来の小ブロックを含み、やや風化が進んでいる。のことから、a期の掘削時発生土は堀の東側に土壠として積み上げられ、a期廃絶時には埋め戻し土として利用されたと想定される。

b期の堀は、堀底がa期に比べやや西に移動し、また堀底はU字状を呈し浅い。西に移動するのはa期の廃絶に伴う埋め戻し土の存在に起因すると考えられ、また、b期掘削による切り合いは深い。北壁の土層には僅かであるが砂とシルトのラミナ状堆積が認められ、水流があった時期も想定できる。b期の堀はa期廃絶後に長大な隙地として残されていた堀跡を利用する形で再掘削され、地山削削を伴わない、掘削事業としてはa期に比べ大きなものではなかったと思定する。また、この段階では何回か溝をさらいのような小規模な再掘削が行われ維持されていた形跡が観察できる。

c期の堀は、堀底がa、b期に比べ東に移動し、断面は逆台形状を呈する。東側立ち上がりの地山（硬質な総社砂層）を掘削して垂直に近い壁面を作り出し、その発生土は西側に積み上げた形跡が観察できる。堀底はわずかに砂の堆積を認めたが、雨水程度であり水流はなかつ

たものと考える。東側と西側の堀肩には大きな高低差があり、堀といよりは壁に近い施設を志向しているように思える。（辻口）

北側の屈曲部分の調査区でも中央部分の調査区と同様に3期の変遷が認められるが、異なる点がいくつか見受けられる。

a期の堀はほとんどがトレント外のため部分的な所見になるが、砂とシルトによる互層の上層はブロックをほとんど含まず、短期間に埋没した形跡は見られない。

b期の堀も部分的だが、溝底の細かい砂層と粗い砂粒を多く含む層からは、緩急のある水流の流れがあったと考えられる。

中央部分の調査区との最大の違いは、トレント中央から南壁にかけてa期の堀跡が溝状に掘り込まれている点である。掘り込まれた溝はa期の土層を切り、レンズ状に暗褐色土を堆積したのち、西側から総社砂層ブロックや黒色土によって埋没、これがc期の堀に切られているため、b期からc期の間に掘削されていることがわかる。また、総社砂層ブロック等による埋没土の上面には硬化面が確認され、一時期は通路として使用されていた可能性がある。

c期の堀は、地山掘り込み面とは反対、すなわち覆土をベースとした立ち上がり部分に粘土を多く含む土層が認められ、掘削面の崩落を防止するため貼り付けたものではないかと考えられる。（岡田）

遺物は覆土中から少量出土しており、近世の陶器片や塙、繩文時代と推定される結晶片岩製の石器がある。また、図示には至らなかつたがカワラケの小碎片も採集された。何れにせよ、堀の開闢や変遷を示すような遺物は無い。

**W-2** 調査区中央を南北に貫き、北に対してやや西に傾く。南端は調査区外、北端はW-1に切られ、7世紀代のH-2や6世紀後半のH-17を切るが、平安期のH-16には切られている。幅は1m弱、全体に浅いが後世の削平によるもので、本来は幅1.5m、深さも1m近くあったものと推定される。断面形態は圓柱や逆台形と随所で異なっており、底面には所々に土坑状の窪みや、テラスを有する場所もあって、形状が一定しない。また、中央やや北寄りには2.5m程途切れる部分があるが、残存状態由来であるか否かは不明である。堆積土は黒色で、最下層に地山主体土を多く含む場合がある。遺物はほぼ含まれていない。以上の特徴から本遺構は水路ではなく、区画溝と判断され、掘削作業単位の凸凹が顕著で整わない形態の場所も多いため、未完成で放棄された可能性も考えられる。なお、本遺構は北側の(104)地点で延伸部分相当が翌年に調査されており、東に屈曲している。従つて区画対象は南東にあったのだろう。時期については切り合ひ關係から、8～9世紀と考えられる。

**W-3** W-1とほぼ並行し、調査区中央付近から調査区南端手前まで確認され、幅と深さが安定しない不定形なものである。時期の判明する遺物は無く、覆土特徴から蒼海城塹跡であるW-1に付帯する施設であったと思われる。土壠層の土止め構造等が想起されるが、その場合、土壠は本遺構の東側にあったことになろうか。

## (3) 土坑

時期的には古代・中世・近世以降の、大きく3時期ある。古代の土坑は調査区西側に集中し、基本的には大小円形か不定形で、判明したものは豊穴建物跡を切っているが出土遺物は非常に少ない。近接して確認されたD-29・30は円形で深い類似形態で、豊穴建物跡の空間地にあることから、何等かの補完的な施設であったと思われる。中世の土坑も古代と同様の形態で、遺物を含まないものが過半で生活窓に乏しい。とは言えH-19を切るD-25からは香か火鉢の破片が出土しており、推定土壠下という位置を踏まえると貴重な資料である。近世以降の土坑は長方形のものが目立ち、窓の天地返し等に関係するものと思われる。市街化する前の元総社地区の景観を示す遺構と言える。

Tab.2 土坑一覧表

番号	位置	平面形状	備考（遺物・時期・その他）
D-1	F-15・F-14	円形	
D-2	C-10・B-10	隅丸長方形	H-4 を切る。
D-3	F-15	円形	D-1 を切る。
D-4	F-9	不整円形	
D-5	E-10	隅丸方形	H-9 を切る。
D-6	G-10	不定形	東側を擅品に切られる。
D-7	G-11	円形？	西側を擅品に切られる。
D-8	H-10	隅丸長方形	H-19 を切る。東を擅品に切られる。
D-9	G-12	方形？	東西を擅品に切られる。
D-10	F-15	不整短円形	D-12、D-3 を切る。
D-11	E-13	不整円形	
D-12	F-15 (不整長方形)		
D-13	G-2	隅丸方形	H-21、22、26a を切る。覆土 As-B。
D-14	K-9・J-9	円形	H-17 を切る。H-16 D1 と同一。
D-15	J-9	双円形	石出土。
D-16	F-14・E-14	不整長方形	キセル・角骨出土。近世。
D-17	G-15	双円形	土坑が重複。
D-18	G-15・G-14	隅丸方形	
D-19	K-9・L-9	隅丸長方形	H-18 を切る。覆土 As-B。
D-20	L-8・L-9	(隅丸長方形)	H-18 を切る。擅乱か。
D-21	K-11	不整形	H-14 を切る。
D-22	G-13	隅丸方形	擅乱。近世。
D-23	H-8	椭円形	
D-24	H-8・I-8	隅丸長方形	
D-25	H-10	椭円形	H-19 を切る。
D-26	J-9	不整円形	
D-27	I-10	方形	W-2 に切られる。古代。
D-28	E-3	円形	H-28 を切る。
D-29	F-2・E-2	(円形)	北側調査区外。
D-30	E-4・F-4	円形	
D-31	E-4・D-4	円形	
D-32a	E-4	椭円形	D-32b を切る。
D-32b	E-4	椭円形	D-32a に切られる。
D-33	F-3	双円形	
D-34	F-2・F-3	不整方形	
D-35	G-3・F-3・F-4・G-4	円形	H-29 の一部か？
D-36	H-2	円形	南半部は調査区外。H-26 D1 と同一。
D-37	E-4・D-4	不明	D-31 に切られる。西側調査区外。
D-38	E-3	不明	D-28 に切られる。
D-39	F-12・F-13	不明	H-8 罫、pt を切る。
D-40	G-10・H-10	不整長方形	H-19 を切る。近代。
D-41	H-10	不整長方形	D-40 に切られる。

#### (4) 墓跡

調査区西側から、3ヶ所の墓跡が確認された。その内訳としては中世2基、古代1基である。中世のDB-1・2は共に土塙墓と考えられる。DB-1はH-25の覆土上にあり、骨の出土をもってその存在が判明したが、詳細は不明であった。DB-2は調査区壁にかかっており、調査終盤にダメ押ししたところ、人骨と共に銭と鉄製の毛抜が出土した。骨の出土状態から被葬者は、北頭位で西を向いていたようである。DB-3はH-21aの竈下から確認された。骨粉状になった頭骨と肢の骨が残存しており、南北軸の長方形土坑内に、北頭位の伸展葬であった。頭の傍らからは副葬品と思われる白磁碗が出土している。白磁は大宰府編VI類の玉緑碗で、乳白色・青白色の釉がかかり、外底面に「梅」の墨書きがある優品である。編年上与えられている10世紀後半～11世紀中頃を振り所とし、下限は本遺構を直接切る12世紀初頭のH-21a、上限を近傍の窓穴建物跡に想定される11世紀前半とすれば、本遺構の時期は11世紀後半頃が妥当と考えられる。(人骨についてはVI章の鑑定を参照のこと)

#### (5) 井戸跡

調査区東側から合計5基確認した。安全上確認面から2mで掘り下げる調査を止めている為、出土遺物によって時期判定できたものは無いが、覆土は全体に褐色系の砂質土で、As-Bの混入は少ない。従つて近世と考えられる。郷地の傍らに設けられた農業用井戸であろうか。

#### (6) 各時代の出土遺物

確認された遺構やその周辺からは、多種・多様な遺物が出土した。ここでは時代毎に、概要を記しておきたい。

**織文時代** 少量の土器・石器が、後世の遺構内から出土した。土器は図示に耐える資料は無いが、石器は打製石斧と四石を図示した。打製石斧は片岩製で、破片のため判然としないが弥生期に特徴的な石鎌の可能性もある。

**古墳時代後期～飛鳥・白鳳期** 土師器を主体に、少数の須恵器がある。以下、時期毎にその在り方を瞥見する。

6世紀後半のH-11・17は、全体に厚手だが長脚化した土師器壺と、脚部の張る土師器丸壺(広口壺?)、环蓋模倣・环身模倣の杯に加え、須恵器の無蓋高杯が目を引く。酸化焰気味の焼成からは藤岡産と思われるが、片岩や海綿削刮が見えないで藤岡系とすべきか。

7世紀前半のH-12bは、土師器長脚壺以外に土師器短頭壺や小型壺、大型の高杯と共に脚部の変形する土師器环蓋模倣がある。この土師器は群馬県藤岡から埼玉県北部に良く見られるもので、軟質で橙褐色の焼成ときめ細かい胎土を通過しており、後の「北武藏型」に先駆けて大量生産されたものと言える。須恵器には环身(高杯?)と半球状の蓋があり、环身は精良な胎土上で硬質な焼成から東海産の可能性があり、蓋についてでは天井部外面を手持ちヘラケツリする在地的なもので、県内産と考えられる。

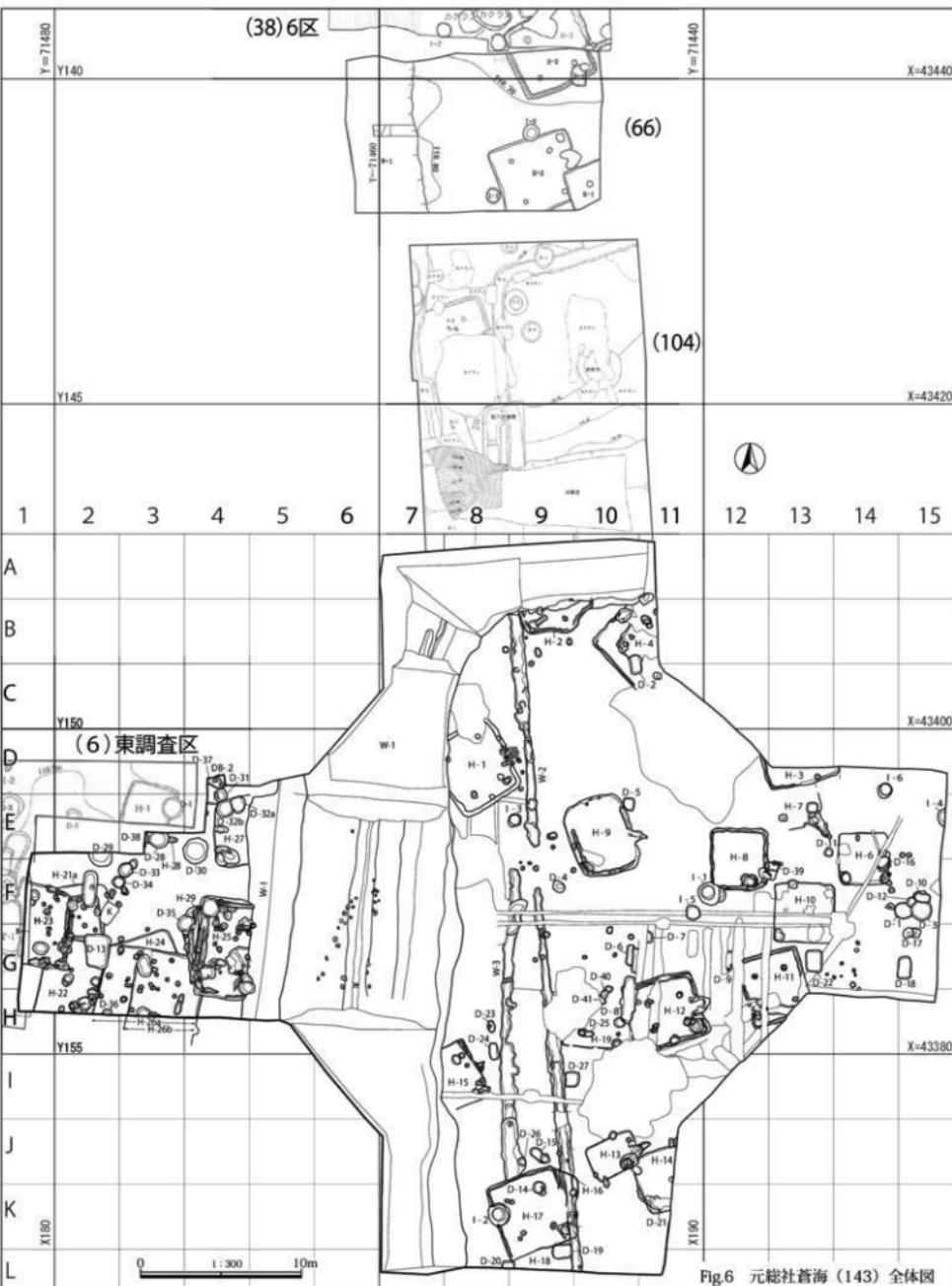
7世紀中葉のH-1は、長脚壺の中に傳手のものがあり、「武藏型壺」の萌芽段階と考えられる。土師器壺の中には半球状で口縁部の内側する「北武藏型」がある反面、古墳時代後期以来の蓋模倣も混在している。他に土師器には台付の小型壺や高杯もあるが、全体に厚手で古墳時代的な器種と言えるのだろう。土師器の蓋模倣と共に重要な出土した須恵器环蓋は東海産と考えられ、TK209型式期の伝世品と考えられる。

7世紀後半のH-2・3・9・13では、土師器「武藏型壺」と「北武藏型」が主体となる。壺の出土数が多いH-9では、大口径から小口径まで大きさの異なる重壺的傾向が見いだせる点、H-3の須恵器高盤やH-13の土師器高盤は、律令的と言える雰囲気である。国府成立前夜の土器様相と言えるだろう。

**平安時代** 10～11世紀で、煮沸具は須恵器系の羽釜(吉井型)や土師器の土釜、壺・皿・皿は須恵器系の技法で成・整型されて酸化焰焼成された土師質土器が主となる。形式的な連続性が不鮮明で、単品での時期判定は難しく、其伴する灰釉陶器や白磁を年代根拠とせざるを得ない。その中でもAs-Bを床面に敷くH-21aの床面出土の白磁は、編年的にも注目される資料と言える。土釜転用の移動式壠と推定されるH-27出土品も注目され、火所の形態変化を示している。土器・陶磁器以外に、鐵鏃等の鉄製品が多く出土しており、鉄のリサイクルの為に集積されていた可能性を考えられる。

他に石、土器片製理盤も甚しき性格とすれば、遊興具の出土が目立つ点は指摘できる。これは当該期の元総社地区全域の特徴とも言えそうで、農耕や手工業生産等、日中の大半を労働・労役に費やす通常集落居住者とは、全く異なる日常生活を垣間見れるようである。

元総社地区では、古代においては高級食器である白磁や灰釉陶器の出土量も多い。豪華的と言える遺物相は、やはりここが国府のマチであることを再認識させられる。(永井)



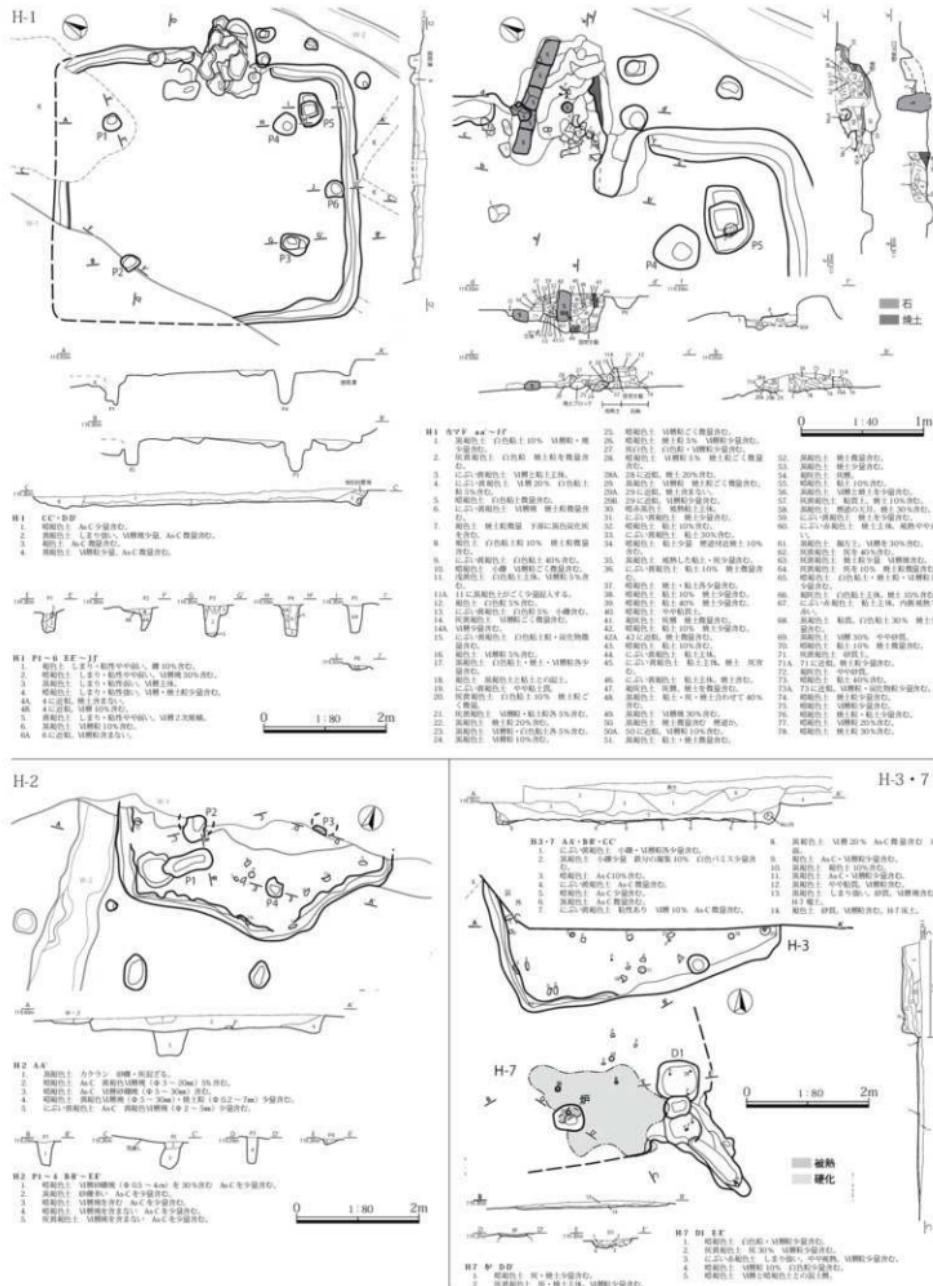


Fig. 7 H-1 • 2 • 3 • 7

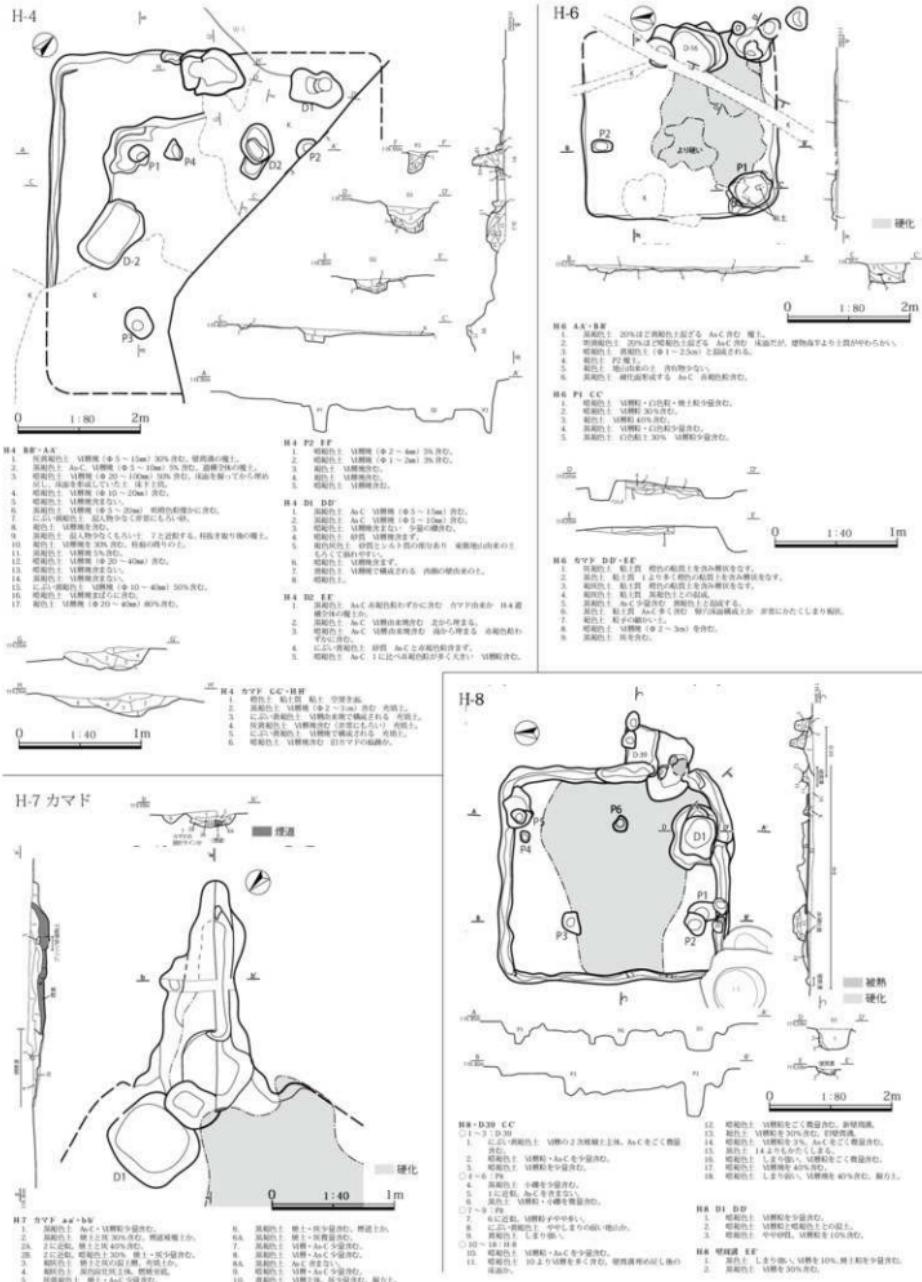
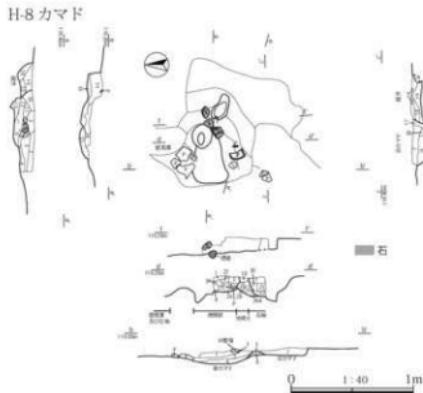
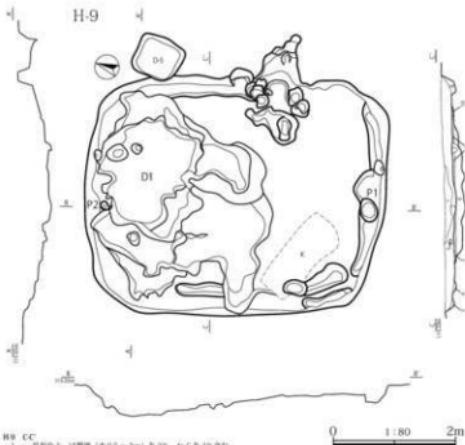


Fig. 8 H-4・6・7カマド・8

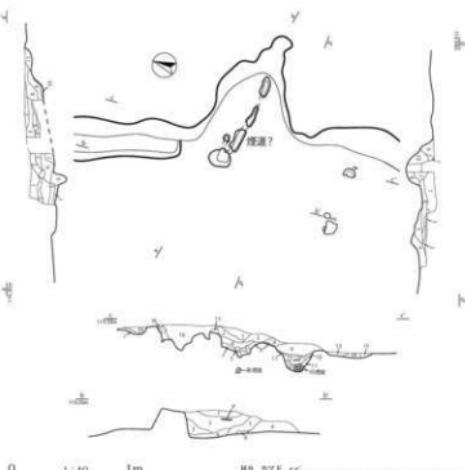


项目：为陛下，本司一并办



B9	CC
1.	暗褐色土・ <u>粘質壤土</u> ( $\phi 0.5\sim 3cm$ )を3%、 <u>Aa-C</u> を4%含む。
2.	暗褐色土・ <u>粘質壤土</u> ( $\phi 0.5\sim 3cm$ )を2%、 <u>Aa-C</u> を3%含む。
3.	褐色土・ <u>プロトナ-<u>Aa-C</u>を含む</u> 。深さ。
4.	褐色土・ <u>プロトナ-<u>Aa-C</u>を含む</u> 。深さ。
5.	深褐色土・ <u>プロトナ-<u>Aa-C</u>を含む</u> 。
6.	褐褐色土・ <u>プロトナ-<u>Aa-C</u>を含む</u> 。

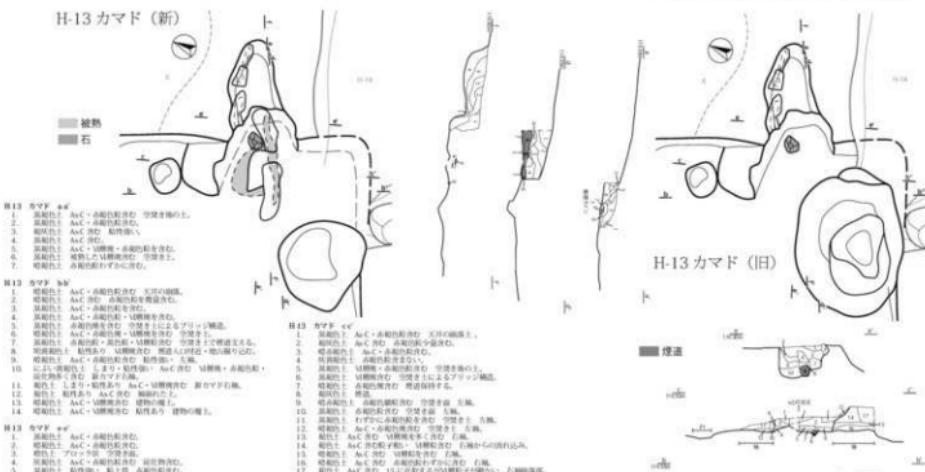
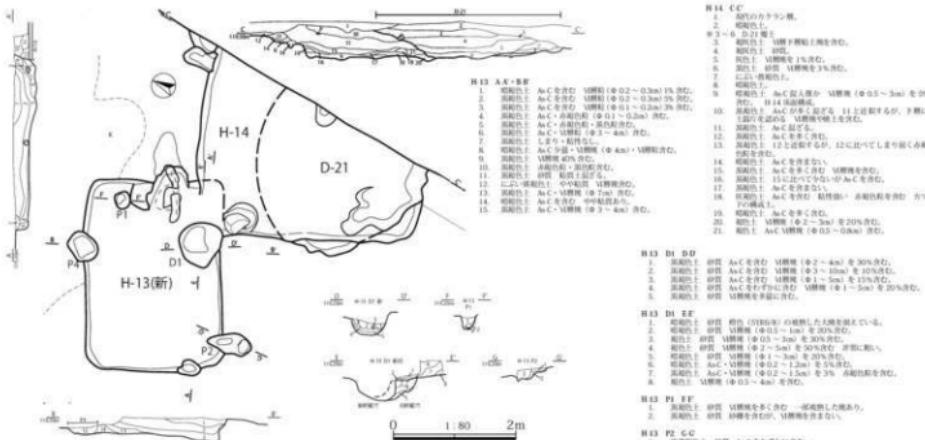
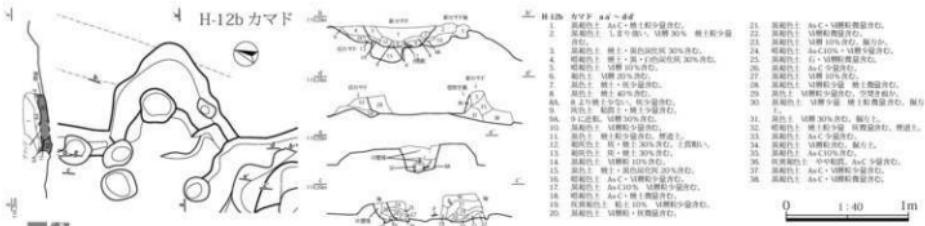
下：赤い鶴見色土 ブロック、 $AaC$  を含まない  
 中：鶴見色土 ブロック、 $AaC$  を含まない  
 上：鶴見色土 破壊  $AaC$  を含まない 部分。  
 右：鶴見色土 破壊  $AaC$  を含まない 部分。



8カマド：9：10

Fig. 9 H-8 カマド・9・10





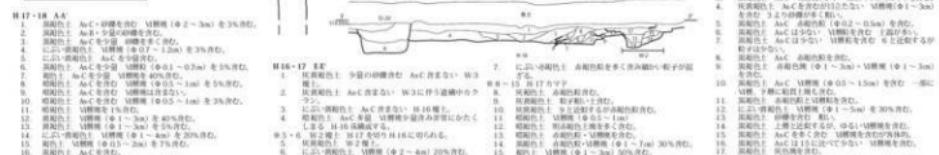
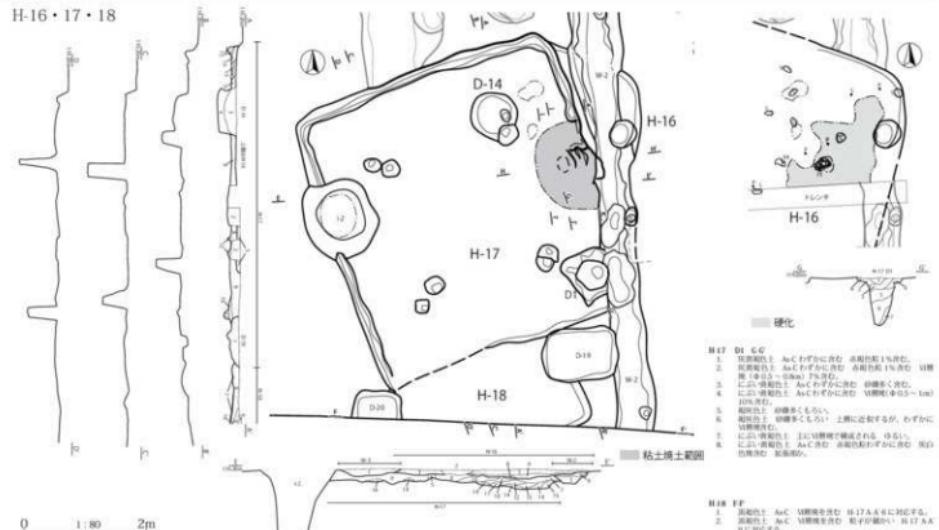
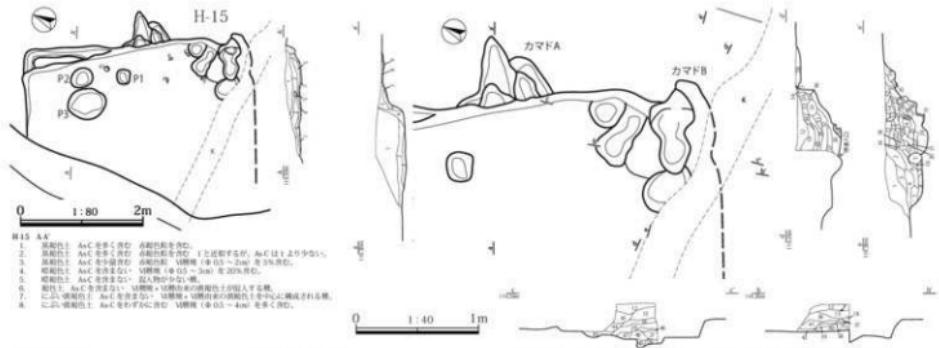


Fig.12 H-15・16・17・18, D-8・14・19, I-2



第 17 章 安全性



H-17 カマド

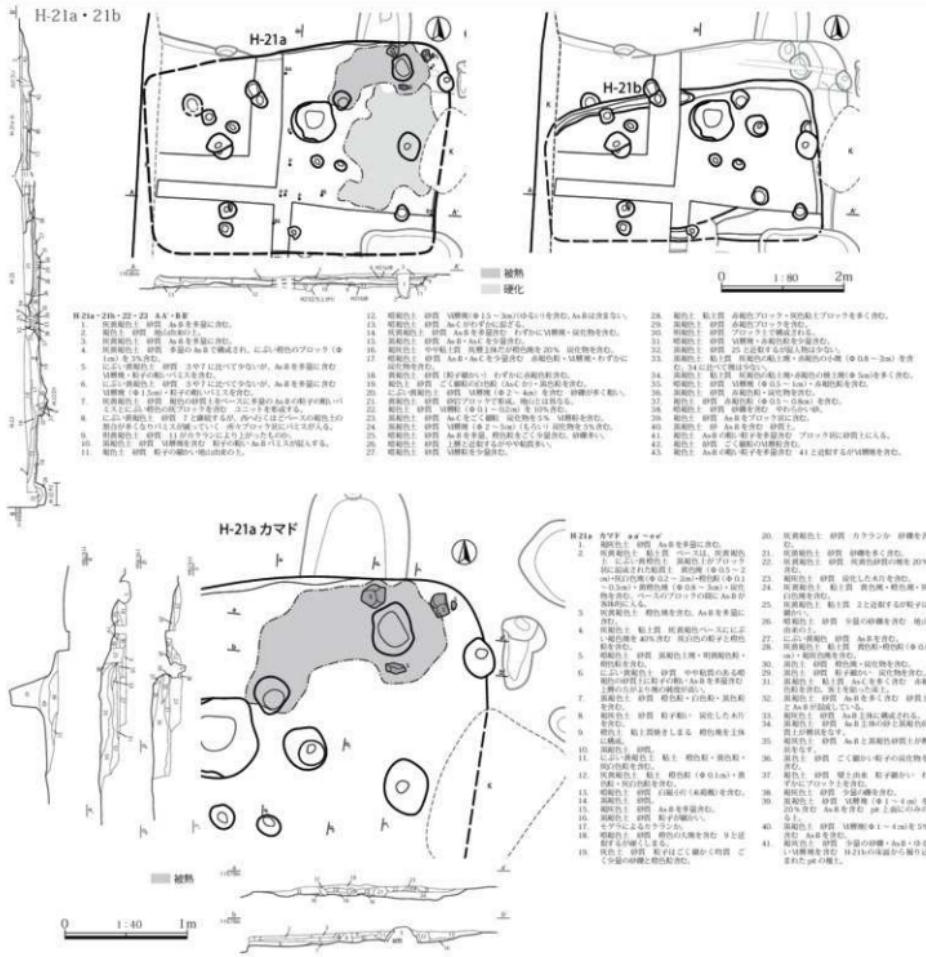


Fig.13 H-17 カマド・21

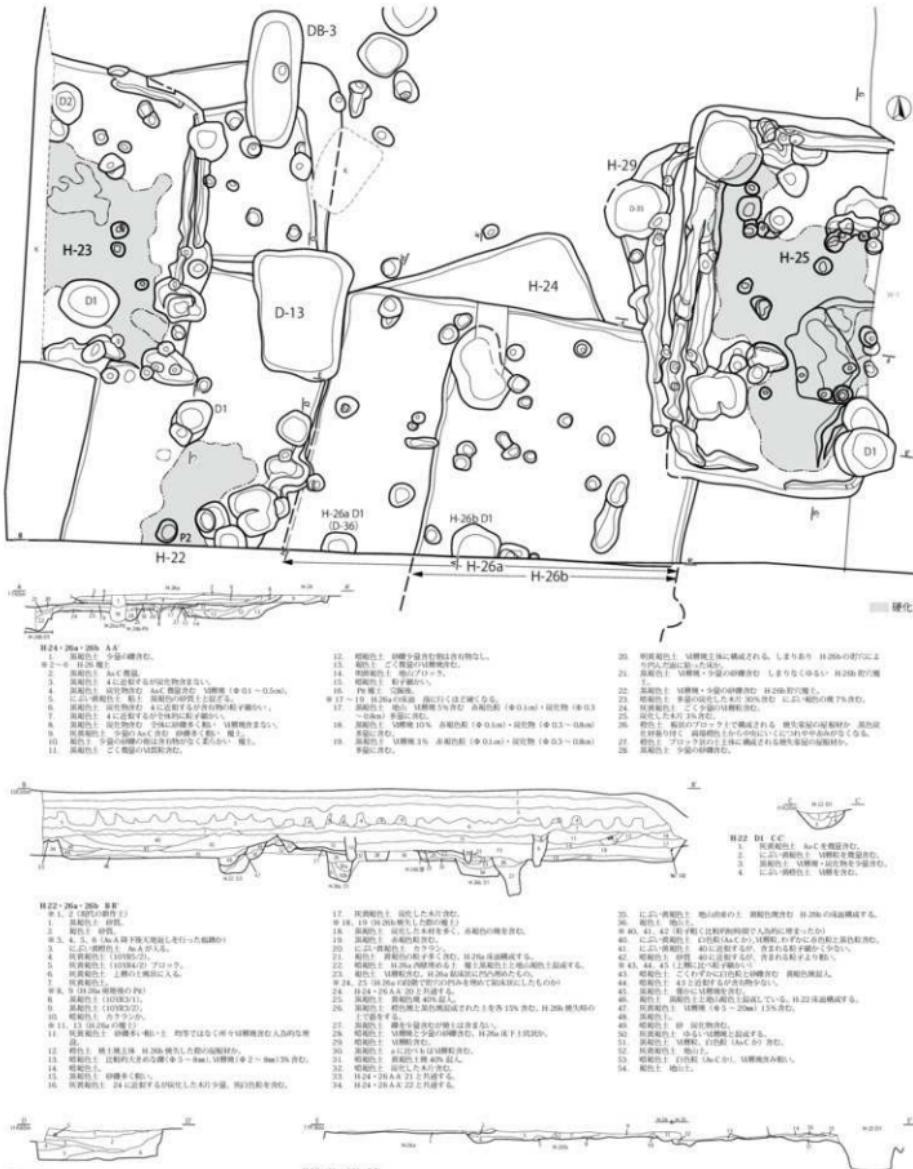


Fig.14 H-22·23·24·25·26, D-13



第25-29章



頁 25 / 66

2. 電子管：  
電子管的音色，與喇叭的音色，有著很大的不同。  
3. 電子管的音量：  
喇叭的音量，約在 20% 與 30% 之間。  
4. 電子管的音質：  
A. 少許 B. 多許 C. 很多許。

5. 電子管的音色：  
A. 很少 B. 有少許 C. 很多許。

6. 電子管的音量：  
A. 很少 B. 有少許 C. 很多許。

7. 電子管的音質：  
A. 很少 B. 有少許 C. 很多許。

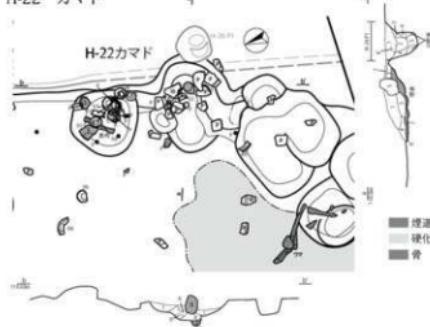


第30章·第3節·基底

1. 非毛細胞壁上 Au-C (中 0.1m) を 5% 結晶粒子を 30% 含む。  
 2. 非毛細胞壁上 結晶粒子を 50% 含む。  
 3. 毛細胞壁上 Au-C (中 0.1m) を 1% 結晶粒子 (中 2m) を毛細孔に含む 液性物を毛細孔に含む。  
 4. 非毛細胞壁上 結晶粒子を 50% 含む。

0 1:80 2m

H-22 カマド



四 281 71 23

- |   |      |                        |
|---|------|------------------------|
| 1 | 黄褐色土 | 白色粉。M解離度重慶。            |
| 2 | 黑褐色土 | しまり弱い。M解離 30%。白色粉少量含む。 |
| 3 | 黑褐色土 | M解離度重慶。                |
| 4 | 黑褐色土 | M解離度重慶。                |
| 5 | 黑褐色土 | しまり弱い。M解離 30%含む。       |

0 1 : 40 1m

图 22 为“P”字面。图 23



第23章

1. 麻油面糊： 做法請看清。

2. 1(已熟)： 麻油面糊， 做法請看清。

3. 麻油面糊： 做法請看清。

4. 麻油面糊： 做法請看清。

5. 麻油面糊： 做法請看清。

6. 麻油面糊： 做法請看清。

7. 麻油面糊： 做法請看清。

8. 麻油面糊： 做法請看清。

9. 麻油面糊： 做法請看清。

10. 麻油面糊： 做法請看清。

11. 麻油面糊： 做法請看清楚。

12. 麻油面糊： 做法請看清楚。

13. 麻油面糊： 做法請看清楚。

14. 麻油面糊： 做法請看清楚。

15. 麻油面糊： 做法請看清楚。

16. 麻油面糊： 做法請看清楚。

17. 麻油面糊： 做法請看清楚。

18. 麻油面糊： 做法請看清楚。

19. 麻油面糊： 做法請看清楚。

20. 麻油面糊： 做法請看清楚。

21. 可愛麻油面糊： 做法請看清楚。

22. 麻油面糊： 做法請看清楚。

23. 麻油面糊： 做法請看清楚。

24. 麻油面糊： 做法請看清楚。

- ZK13 今子ⅡB 手系

  1. 酸面团：糖 5%，酵母 10% 酵母。
  2. 酸面团：糖 5%，酵母 10% 酵母。
  3. 酸面团：糖 5%，酵母 10% 酵母。
  4. 酸面团：糖 5%，酵母 10% 酵母。
  5. 酸面团：糖 5%，酵母 10% 酵母。
  6. 酸面团：白面 100% 糖 5%，酵母 10% 酵母。解冻后，加水至 100%。
  7. 酸面团：白面 100% 糖 5%，酵母 10% 酵母。
  8. 酸面团：白面 100% 糖 5%，酵母 10% 酵母。
  9. 酸面团：白面 100% 糖 5%，酵母 10% 酵母。
  10. 酸面团：白面 100% 糖 5%，酵母 10% 酵母。
  11. 酸面团：白面 100% 糖 5%，酵母 10% 酵母。
  12. 酸面团：白面 100% 糖 5%，酵母 10% 酵母。
  13. 酸面团：白面 100% 糖 5%，酵母 10% 酵母。
  14. 酸面团：白面 100% 糖 5%，酵母 10% 酵母。
  15. 酸面团：白面 100% 糖 5%，酵母 10% 酵母。
  16. 酸面团：白面 100% 糖 5%，酵母 10% 酵母。
  17. 酸面团：白面 100% 糖 5%，酵母 10% 酵母。
  18. 酸面团：白面 100% 糖 5%，酵母 10% 酵母。
  19. 酸面团：白面 100% 糖 5%，酵母 10% 酵母。
  20. 酸面团：白面 100% 糖 5%，酵母 10% 酵母。
  21. 酸面团：白面 100% 糖 5%，酵母 10% 酵母。
  22. 酸面团：白面 100% 糖 5%，酵母 10% 酵母。
  23. 酸面团：白面 100% 糖 5%，酵母 10% 酵母。

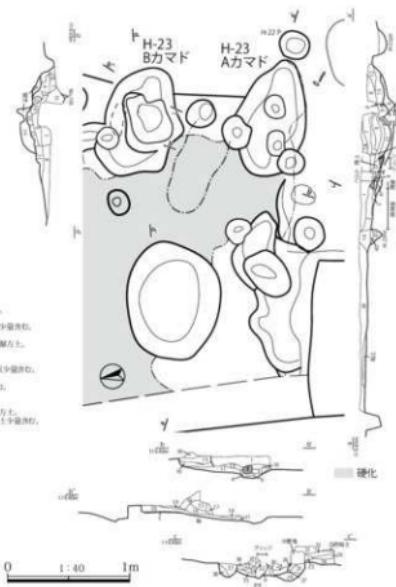


Fig. 15 H-25・26・29・22 カマド・23

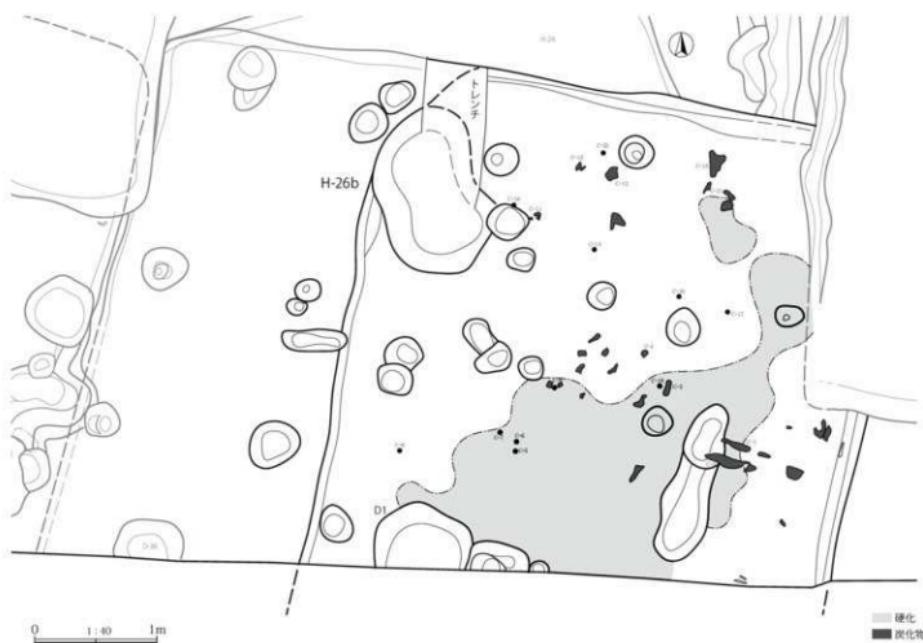
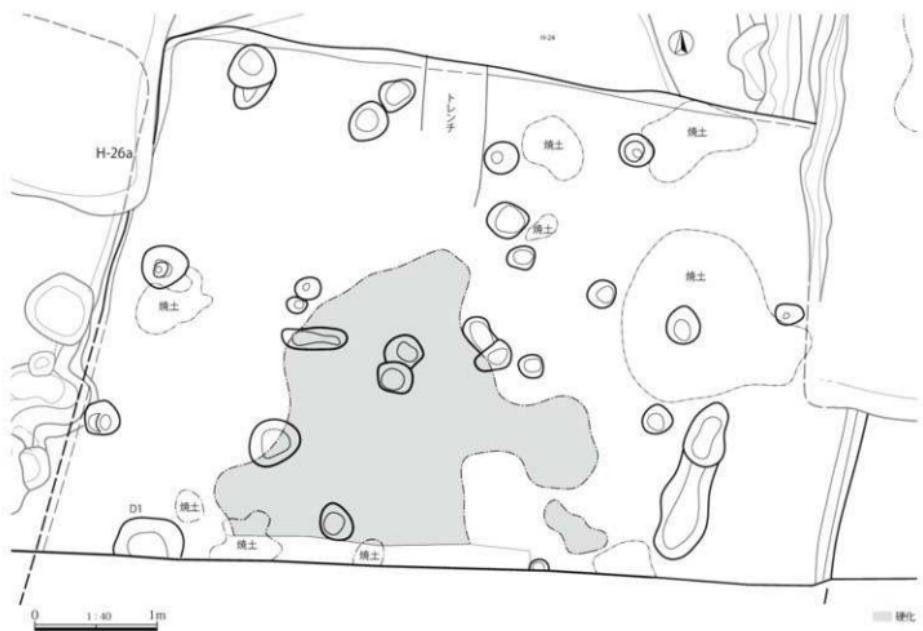
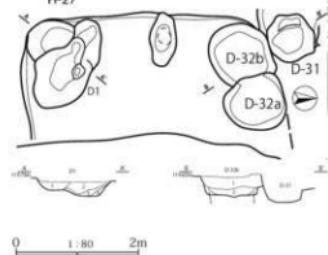


Fig.16 H-26a・26b

H-27 H-27



0 1:80 2m

H-27 D1 A.C.  
1. 沈積物上: Ac-C (Φ 0.5m) 10%。由田を含む。  
2. 沈積物上: 鮎灰 50%。炭酸物を含む。  
3. 沈積物上: 灰色砂岩 30%。  
4. 沈積物上: 砂質細粒土。

D-32  
1. 沈積物上: Ac-C (Φ 0.5m) を 10% 含む。  
2. 沈積物上: Vb-B (Φ 0.1m) を 1% 含む。  
3. 沈積物上: 灰色砂岩を 30% 含む。

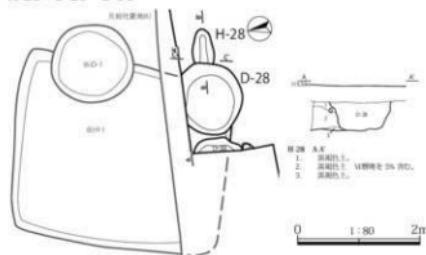
H-27 a-d  
1. 沈積物上: Ac-C の塊を 1% 含む。砂質泥状の粒子を含む。  
2. 沈積物上: Ac-C の塊を 2%。由田を含む。  
3. 沈積物上: 沈積物のコロリ (Φ 1~3m) を 30%。白色ブロック。  
4. 沈積物上: 灰色砂岩 (Φ 0.1~0.2m)。白色砂 (Φ 0.1~0.2m) を含む。  
5. 沈積物上: 灰色砂岩 (Φ 0.1~0.2m)。白色砂 (Φ 0.1~0.2m) を含む。  
6. 沈積物上: 灰色砂岩 (Φ 0.1~0.2m)。白色砂 (Φ 0.1~0.2m) を含む。

H-27 カマド

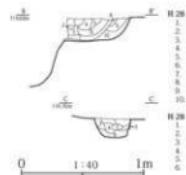


0 1:40 1m

H-28・D-28・D-38



0 1:80 2m



0 1:40 1m

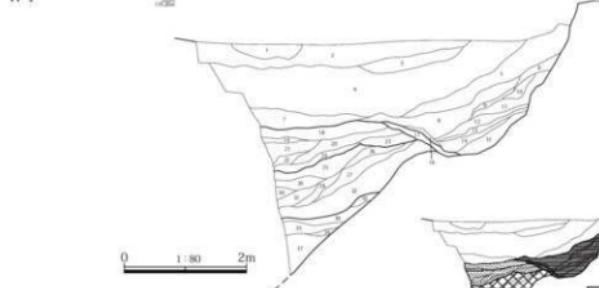
H-28 カマド C-E

1. 沈積物上: 小磯礁を含む。白色砂質ブロックを含む。  
2. C-E 2 塵層。  
3. C-E 3 塘層。  
4. 沈積物上: 灰色砂岩を含む。  
5. 沈積物上: 灰色砂岩を含む。  
6. 沈積物上: 灰色砂岩 (Φ 0.1~0.2m) を 50% 含む。  
7. 灰色砂岩: 灰色砂岩を含む。薄層。  
8. 沈積物上: 灰色砂岩 (Φ 0.1~0.2m) を 20% 含む。  
9. 沈積物上: 少量の礫を含む。  
10. 沈積物上: 少量の礫を含む。

H-28 カマド D-F

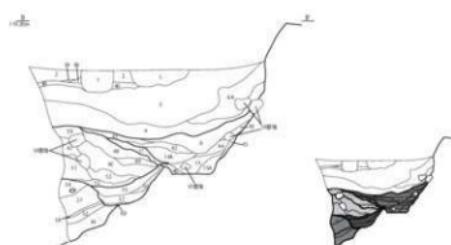
1. 沈積物上: 小磯礁を含む。白色砂質ブロックを含む。  
2. 沈積物上: 灰色砂岩を含む。  
3. 灰色砂岩: 2 層構造の塊を含む (Φ 0.05m) を含む。  
4. 沈積物上: 灰色砂岩を含む。  
5. 沈積物上: 灰色砂岩を含む。

W-1



W-1 (左側トントンガ・西側)  
1. にじみ・薄い粘土: 10% 含む。  
2. 沈積物上: 灰色砂岩を含む。薄層。  
3. 沈積物上: Vb-B を含む。  
4. 沈積物上: 灰色砂岩を含む。  
5. 沈積物上: 灰色砂岩を含む。  
6. 沈積物上: 灰色砂岩を含む。  
7. 沈積物上: 灰色砂岩を含む。  
8. にじみ・薄い粘土: 10% 含む。Vb-B を含む。  
9. 沈積物上: 灰色砂岩を含む。  
10. 沈積物上: 灰色砂岩を含む。  
11. 沈積物上: 灰色砂岩を含む。  
12. 沈積物上: 灰色砂岩を含む。  
13. 灰色砂岩: 灰色砂岩塊を含む。薄層。  
14. 沈積物上: Vb-B を含む。薄層。  
15. にじみ・薄い粘土: 10% 含む。  
16. 沈積物上: 灰色砂岩を含む。薄層。  
17. にじみ・薄い粘土: 10% 含む。  
18. 沈積物上: 灰色砂岩を含む。薄層。  
19. 沈積物上: 灰色砂岩を含む。薄層。  
20. 沈積物上: Vb-B を含む。薄層。  
21. 沈積物上: 灰色砂岩を含む。薄層。  
22. 沈積物上: Vb-B を含む。薄層。  
23. 沈積物上: 灰色砂岩を含む。薄層。  
24. 沈積物上: Vb-B を含む。薄層。  
25. 沈積物上: Vb-B を含む。薄層。  
26. にじみ・薄い粘土: 10% 含む。  
27. 沈積物上: 灰色砂岩を含む。薄層。  
28. 沈積物上: 灰色砂岩を含む。薄層。  
29. 沈積物上: 灰色砂岩を含む。薄層。  
30. 沈積物上: 灰色砂岩を含む。薄層。  
31. 沈積物上: Vb-B を含む。薄層。  
32. 沈積物上: Vb-B を含む。薄層。  
33. 沈積物上: Vb-B を含む。薄層。  
34. 灰色砂岩: 灰色砂岩を含む。薄層。  
35. 灰色砂岩: 中厚層。  
36. 灰色砂岩: 中厚層。  
37. 沈積物上: 灰色砂岩を含む。薄層。  
38. にじみ・薄い粘土: 10% 含む。Vb-B を含む。薄層。  
39. 沈積物上: 灰色砂岩を含む。薄層。  
40. 沈積物上: Vb-B を含む。薄層。  
41. 沈積物上: Vb-B を含む。薄層。  
42. 沈積物上: Vb-B を含む。薄層。  
43. 沈積物上: 中厚層。  
44. 沈積物上: 灰色砂岩を含む。薄層。  
45. 沈積物上: 灰色砂岩を含む。薄層。  
46. 沈積物上: Vb-B を含む。薄層。  
47. 沈積物上: Vb-B を含む。薄層。  
48. 沈積物上: Vb-B を含む。薄層。  
49. 沈積物上: 小磯礁を含む。  
50. 沈積物上: 灰色砂岩を含む。薄層。  
51. 沈積物上: 灰色砂岩を含む。薄層。  
52. 沈積物上: Vb-B を含む。薄層。  
53. 沈積物上: Vb-B を含む。薄層。  
54. 沈積物上: Vb-B を含む。薄層。  
55. 沈積物上: Vb-B を含む。薄層。  
56. 沈積物上: Vb-B を含む。薄層。  
57. 沈積物上: Vb-B を含む。薄層。  
58. 沈積物上: Vb-B を含む。薄層。  
59. 沈積物上: 少量の礫を含む。薄層。  
60. 沈積物上: Vb-B を含む。薄層。

c層底土  
c層底部時挟土  
b層底土  
実例上層由来土



c層底土  
c層底部時挟土  
人为的堆浸土  
堆浸土(b-c期の間)  
実例上層由来土

Fig.17 H-27・28、D-28・31・32、W-1

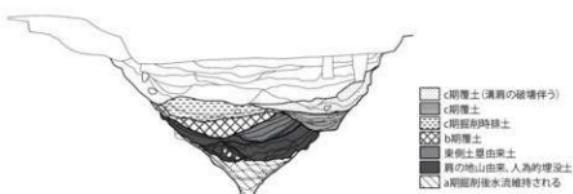
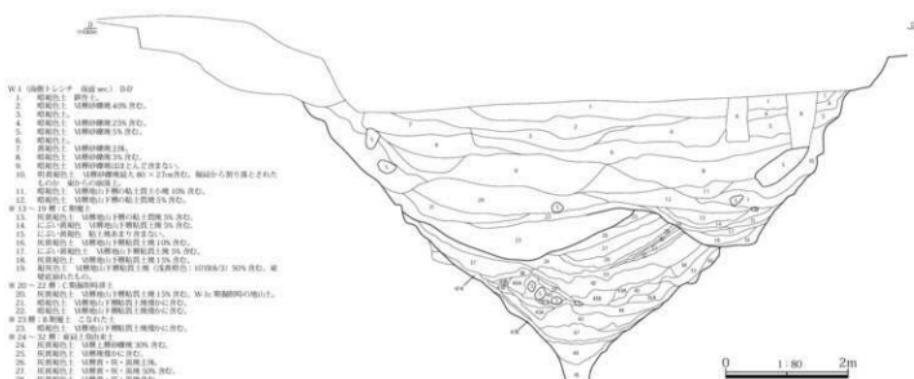
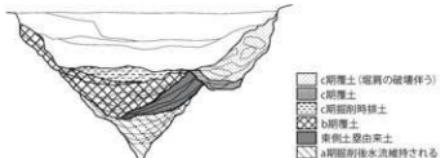
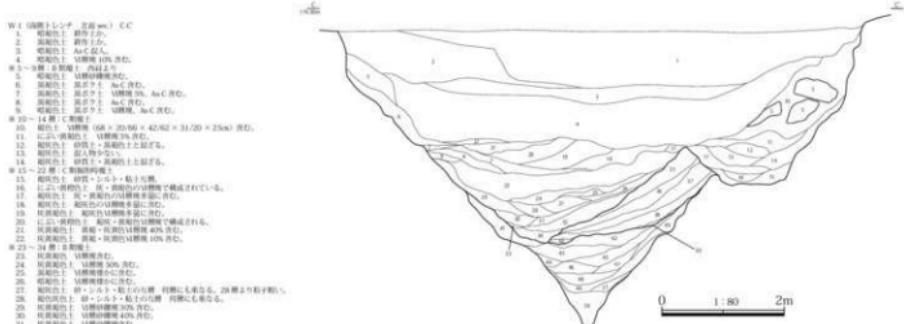


Fig. 18 W-1

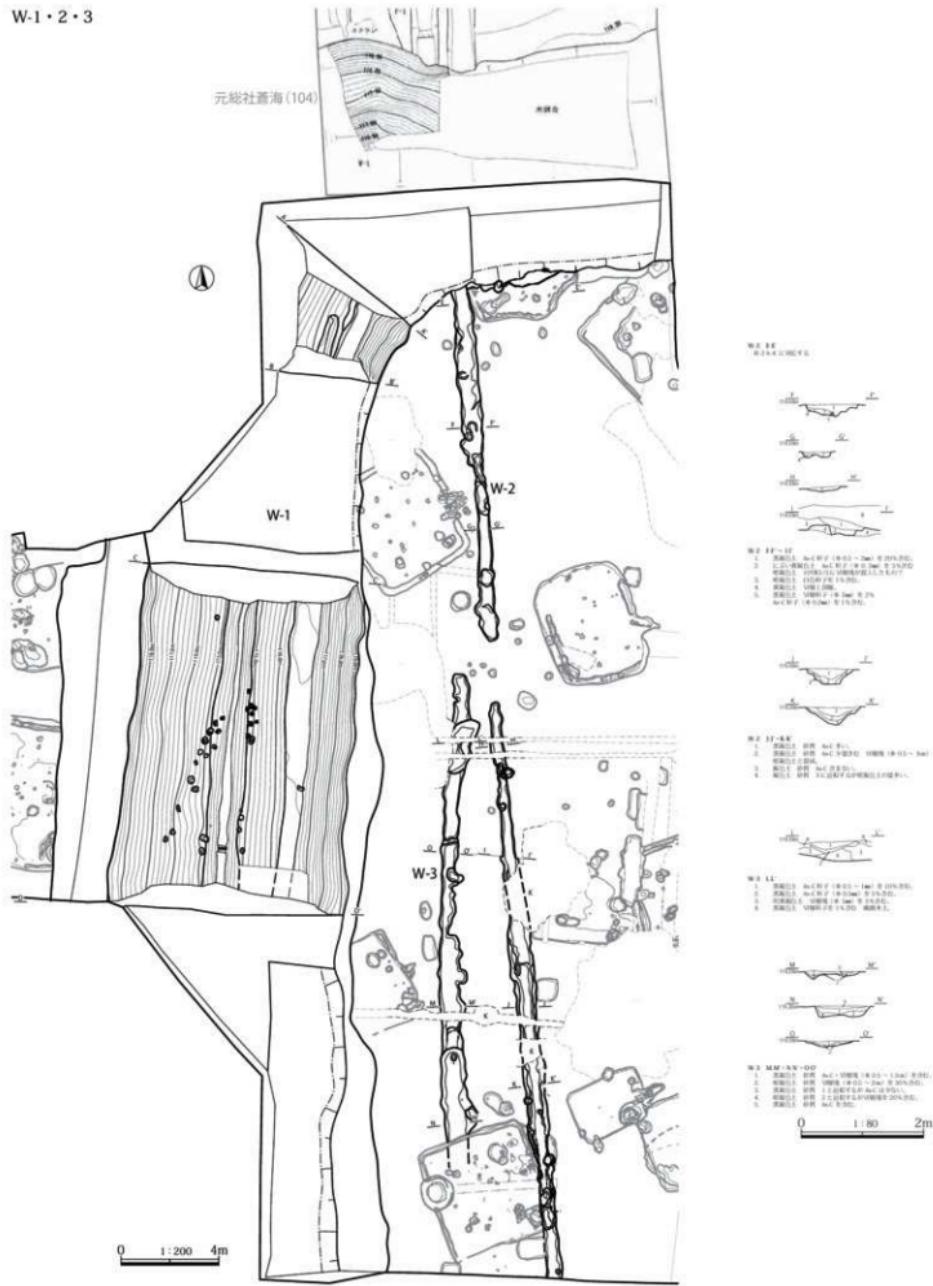
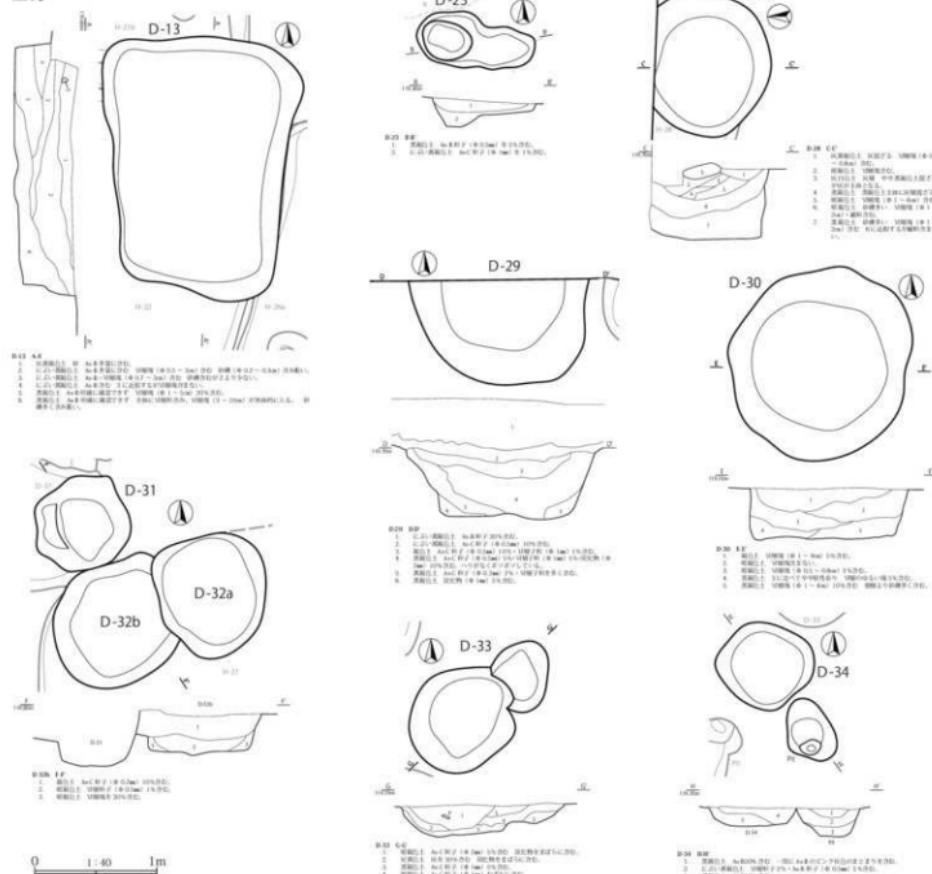


Fig.19 W-1・2・3

## 土坑



## 墓跡

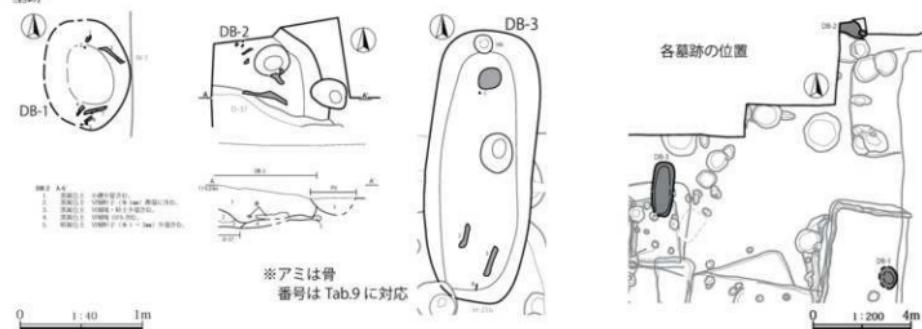


Fig.20 D - 13 • 25 • 28 ~ 34 • DB - 1 ~ 3

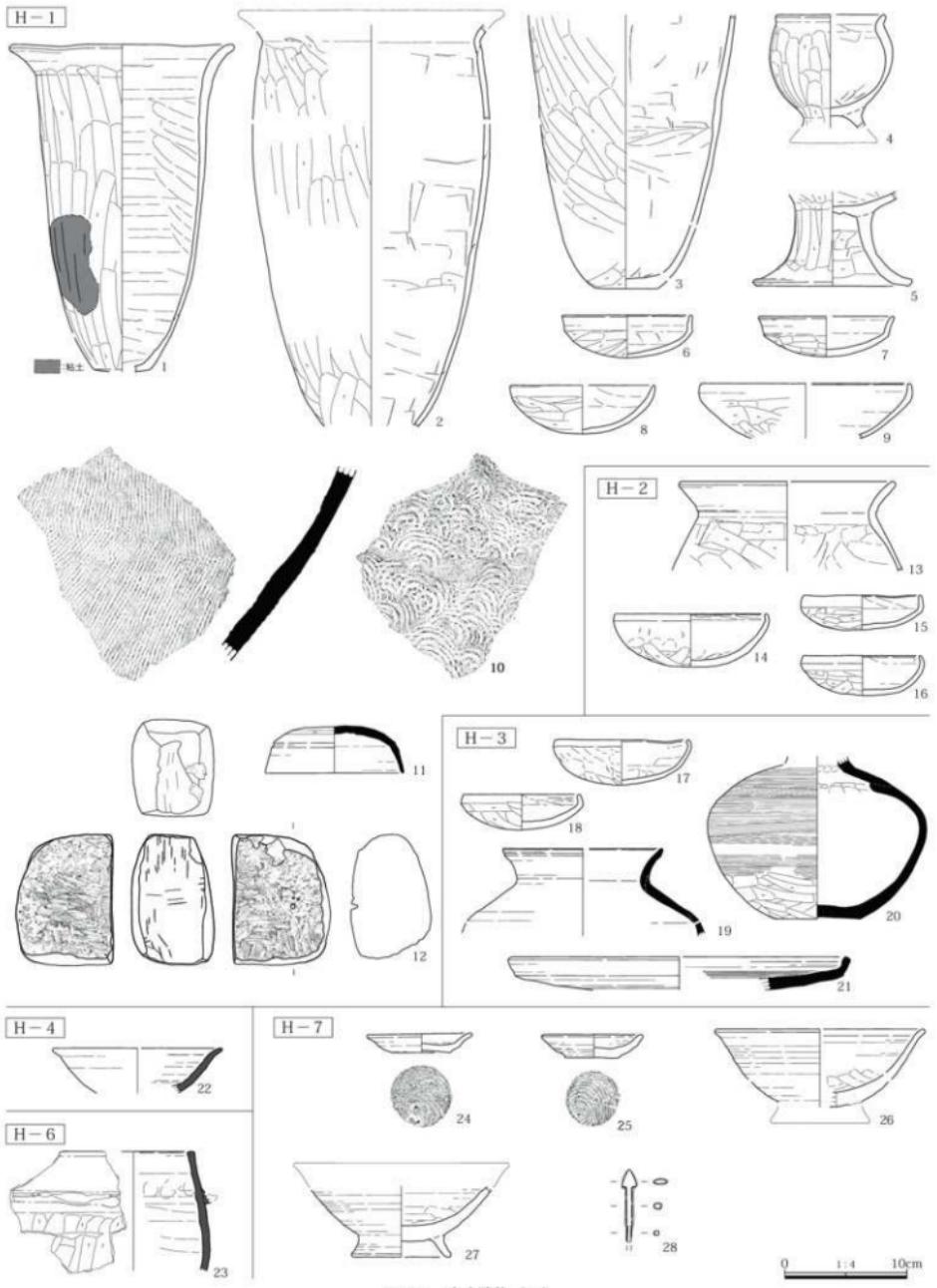


Fig.21 出土遺物 (1)

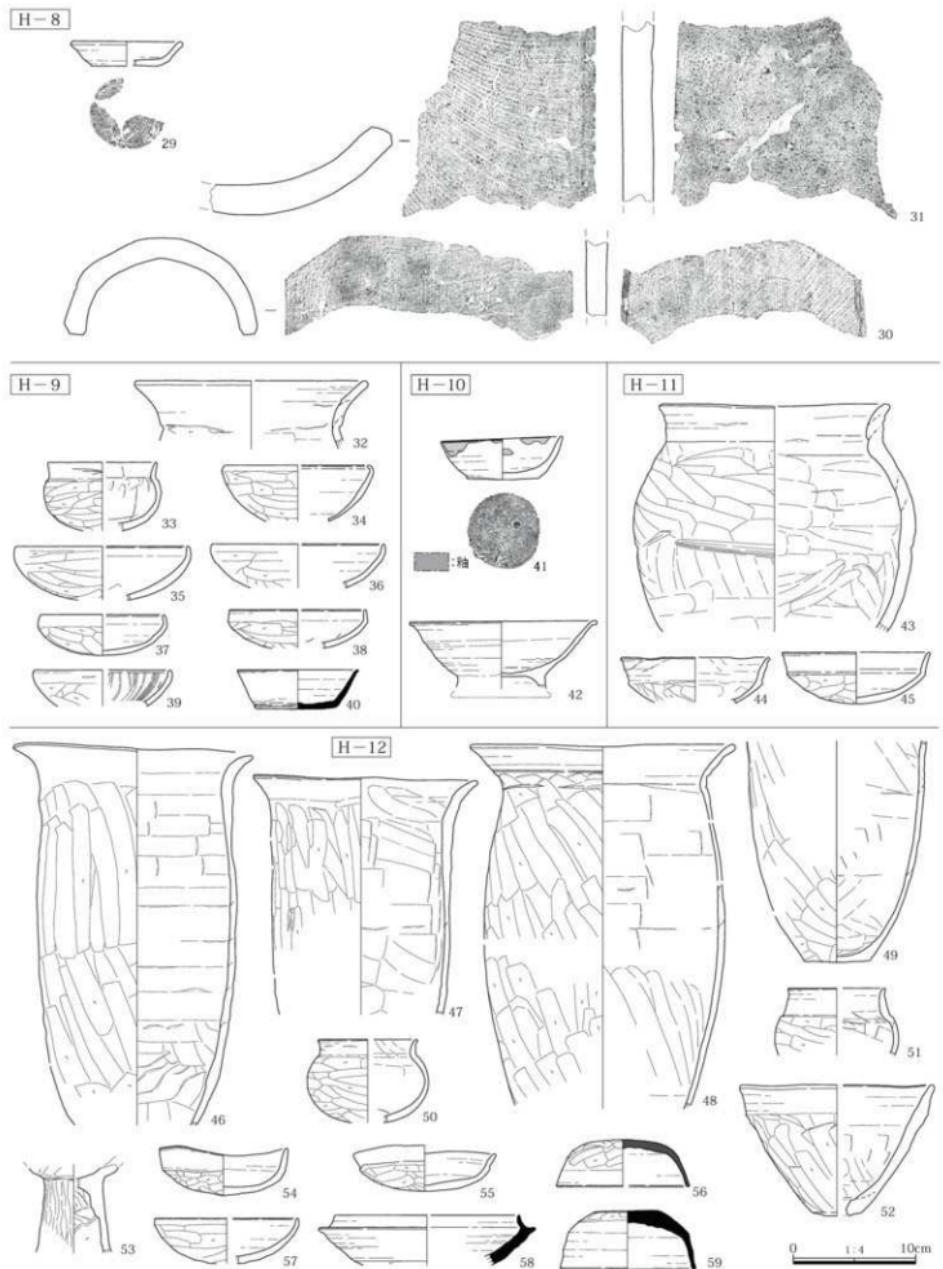


Fig.22 出土遺物 (2)

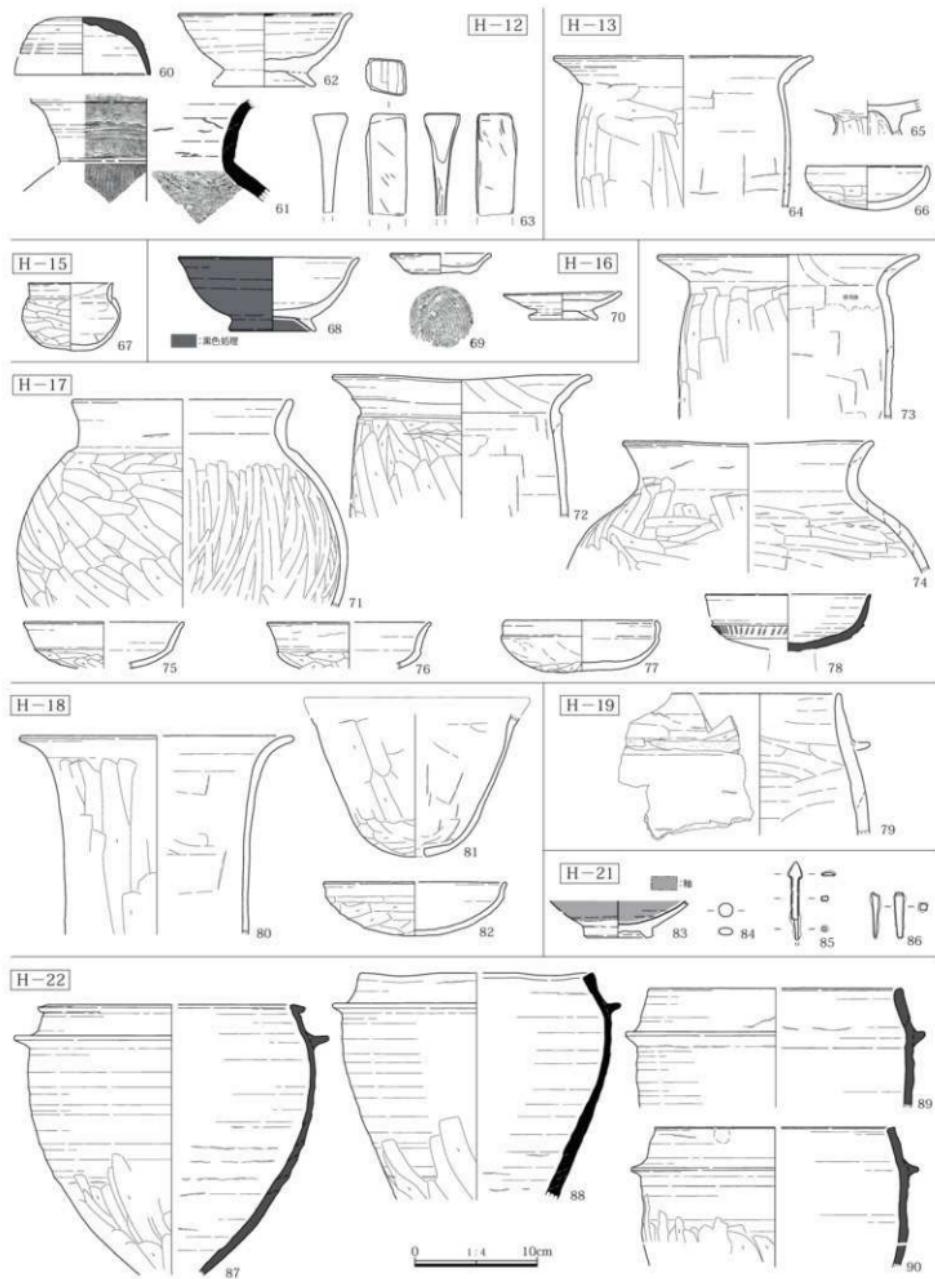


Fig.23 出土遺物 (3)

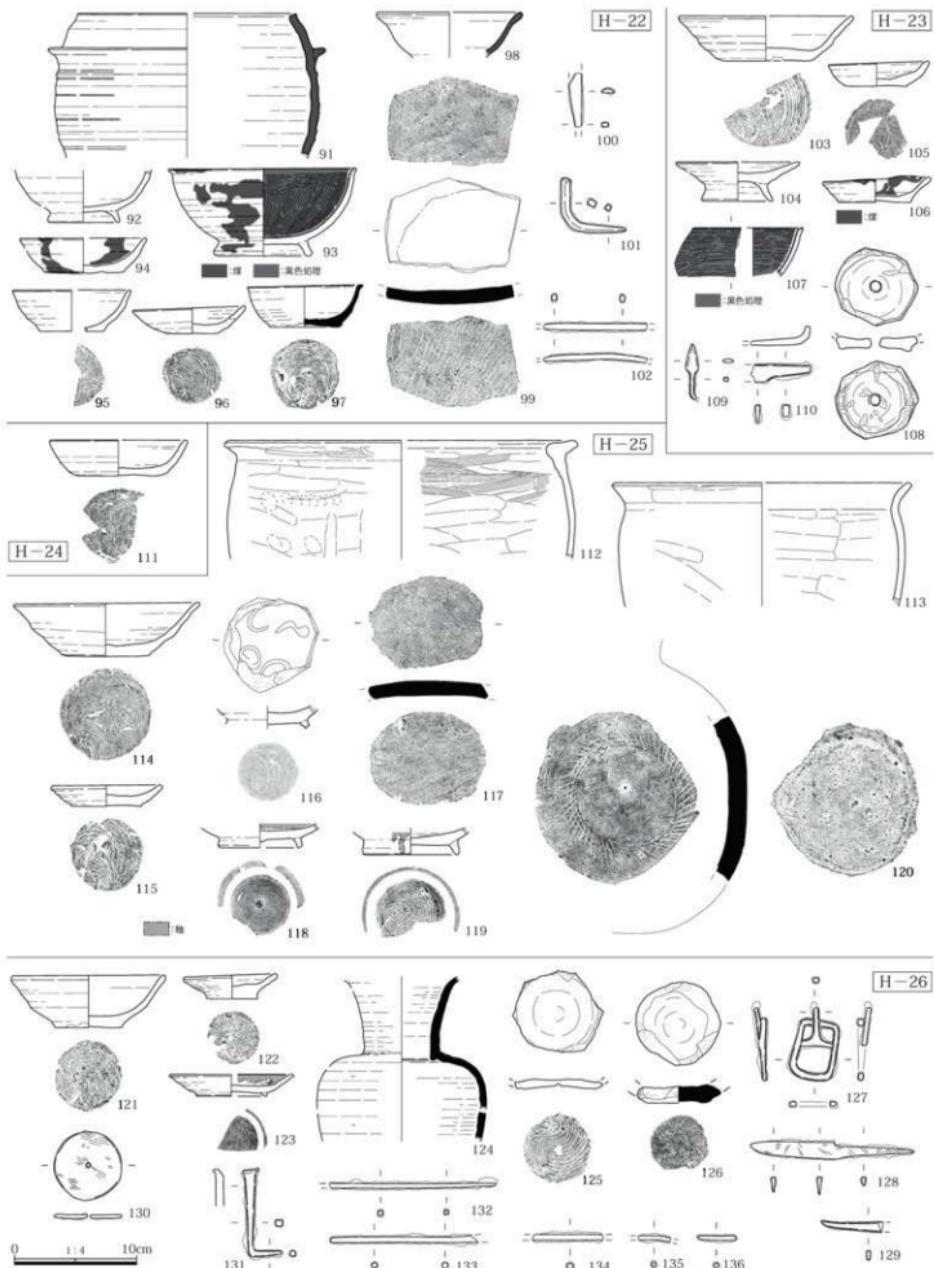


Fig.24 出土遺物 (4)

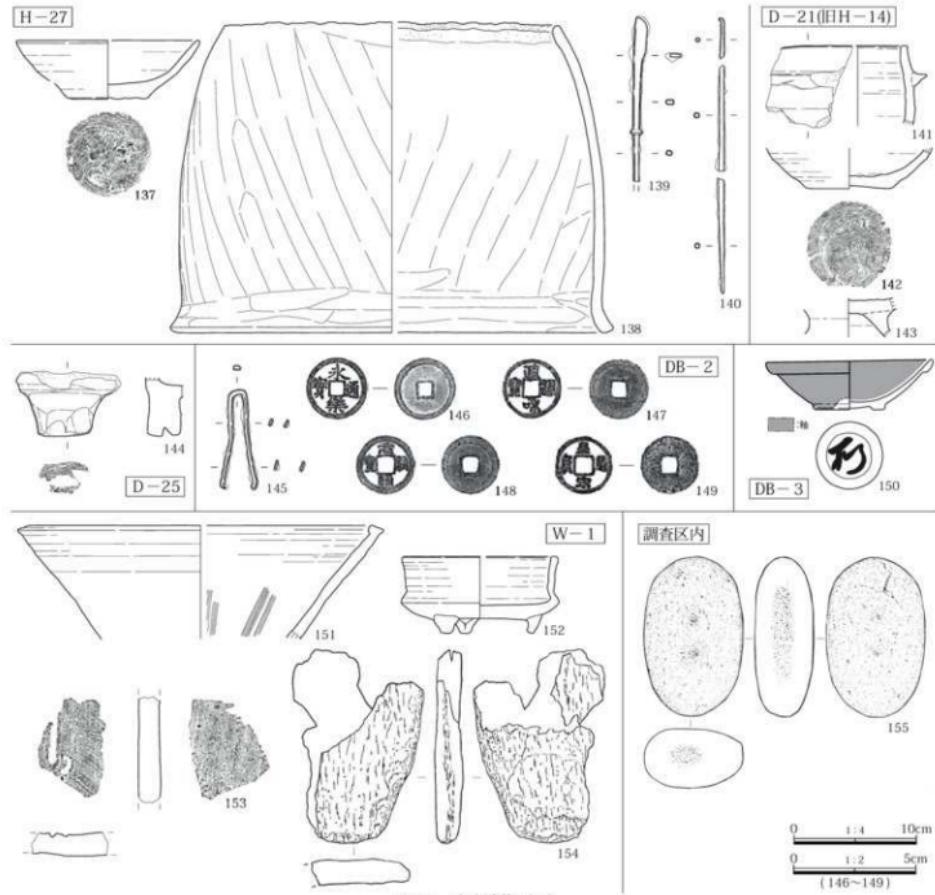


Fig.25 出土遺物 (5)

Tab.3 出土遺物観察表

No.	遺物	種別	器種	部位	法規 (cm)			形状	色調	出土	測定	備考	
					上部	中部	底径						
1	H-1	土器類	壺	口縁一部深9.0cm	1.80	0.70	<4.6	直	明褐色	礫石・長石・角閃石・雲母・小礫	内:ヨコナデ ケズリ/内:ヨコナデ ナデ 外:黒い粒付有 力マフ		
2	H-1	土器類	壺	口縁一部1/5	0.30			直	褐色	にぶい相	礫石・長石・角閃石・雲母	内:ヨコナデ ケズリ/内:ヨコナデ ヘラチテ カマフ	
3	H-1	土器類	壺	脚一部1/4	12.25	5.2	直	明褐色	礫石・長石・角閃石	内:ケズリ/内:ハナナデ			
4	H-1	土器類	小型の付壺	口縁一部4.0cm	8.8	0.30		直	褐色	礫石・長石・角閃石・雲母	内:ヨコナデ ケズリ/内:ヨコナデ ヘラチテ カマフ		
5	H-1	土器類	壺	脚一部2/3	17.8	12.4	直	褐色	にぶい褐色	礫石・長石・角閃石・雲母	内:ヨコナデ ケズリ/内:体部ナデ 圓部ヨコナデ ケズリ		
6	H-1	土器類	坪	口縁一部4.0cm	10.6	3.5	直	白	暗	礫石・長石・角閃石・雲母	内:ヨコナデ ケズリ/内:ヨコナデ	P5	
7	H-1	土器類	坪	口縁一部1/3	12.0	3.3	直	白	暗	礫石・長石・角閃石・雲母	内:ヨコナデ ケズリ/内:ヨコナデ		
8	H-1	土器類	坪	口縁一部1/3	13.8	4.0	直	にぶい相	礫石・長石・角閃石・雲母	内:ヨコナデ ケズリ/内:ヨコナデ			
9	H-1	土器類	坪	口縁一部1/3	17.0	4.50	直	明褐色	礫石・長石・角閃石・雲母	内:ヨコナデ ケズリ/内:ヨコナデ	カマフ 極方		
10	H-1	須無鉢	盤	脚一部	0.60			直	灰	石	内:平行タガノノ内:瓦の内:瓦てて		
11	H-1	須無鉢	盤	口縁一部	11.3	4.1	直	白	暗	礫石・長石・角閃石・小礫	内:ヨコナデ ケズリ/内:ヨコナデ	東海道? P5	
12	H-2	土器類	壺	口縁一部深9.0cm	17.4	0.45	直	にぶい相	礫石・長石・角閃石・雲母	内:ヨコナデ ケズリ/内:ヨコナデ			
13	H-2	土器類	壺	口縁一部深9.0cm	17.4	0.45	直	にぶい相	礫石・長石・角閃石・雲母	内:ヨコナデ ケズリ/内:ヨコナデ ナデ			
14	H-2	土器類	坪	口縁一部	12.3	4.4	直	明褐色	礫石・長石・角閃石・雲母	内:ヨコナデ ケズリ/内:ヨコナデ			
15	H-2	土器類	坪	口縁一部	0.6	2.0	直	にぶい相	礫石・長石・角閃石・雲母	内:ヨコナデ ケズリ/内:ヨコナデ			
16	H-2	土器類	坪	口縁一部7.0cm	0.6	3.3	直	白	暗	礫石・長石・角閃石・雲母	内:ヨコナデ ケズリ/内:ヨコナデ		
17	H-3	土器類	坪	口縁一部	13.0	3.7	直	白	暗	礫石・長石・角閃石・雲母	内:ヨコナデ ケズリ/内:ヨコナデ	1脚間に並みあり	
18	H-3	土器類	坪	口縁一部	0.4	2.9	直	白	暗	礫石・長石・角閃石・雲母	内:ヨコナデ ケズリ/内:ヨコナデ		
19	H-3	須無鉢	盆	口縁一部深9.0cm	13.0	7.2	直	灰	暗	礫石・長石・角閃石・雲母	内:ヨコナデ ケズリ/内:ヨコナデ		
20	B-3	須無鉢	盤	脚一部4/5	0.33	7.0	直	灰	暗	礫石・長石	内:ヨコナデ 多タガノ内:脚部下手位付モヘケツリ		
21	B-3	須無鉢	高盤	口縁一部深9.0cm	2.75		直	灰	暗	礫石・長石	内:ヨコナデ ケズリ/内:ヨコナデ		
22	B-4	須無鉢	坪	口縁一部深9.0cm	-1.8	0.75	直	にぶい相	礫石・長石・雲母	内:ヨコナデ ケズリ/内:ヨコナデ	20		
23	B-6	須無鉢	坪	口縁一部深9.0cm	0.85		直	にぶい相	礫石・長石・角閃石	内:ヨコナデ ケズリ/内:ヨコナデ			
24	B-7	須無鉢	盆	口縁一部深9.0cm	0.45		直	白	暗	礫石・長石・角閃石・雲母	内:ヨコナデ ケズリ/内:ヨコナデ		

Tab.4 出土遺物観察表

No.	遺物	種別	形態	部位	法線 (cm)			地質	色調	胎土	調査	備考	
					上部	中部	下部						
25	H-7	土師質土器	小皿	定形	8.0	1.9	4.4	普通	浅褐色	陶石・白石	外:ロクロ整型 亂刷印斜面切り (右斜面) / 内:ロクロ整型		
26	H-7	土師質土器	壺	上縁・底付/1/6	-17.0	16.0	-	普通	に赤・褐色	陶石・白石・角閃石	外:ロクロ整形 / 内:ロクロ整型	赤道	
27	H-7	土師質土器	壺	体・底付/1/3	-5.0	8.0	-	普通	に赤・褐色	陶石・白石・角閃石	外:ロクロ整形 / 内:ロクロ整型		
29	H-8	土師質土器	小皿	上縁・底付/1/2	8.7	2.1	5.8	普通	浅褐色	陶石・白石・角閃石	外:ロクロ整形 亂刷印斜面切り (右斜面) / 内:ロクロ整型		
30	H-8	瓦	瓦片	磚片	8.5	0.3	0.5	褐色	褐色	瓦石	表面: 瓦片・瓦石・角閃石 裏面: 瓦片・瓦石・鉄錆	セマフ	
31	H-8	瓦	瓦片	磚片	11.0	1.0	2.5	普通	灰	瓦石・輝石・石英	表面: 瓦片・瓦石 / 裏面: ハナナ子割れ: ケズリ	一枚造	
32	H-9	土師質土器	壺	上縁・底付/1/6	-18.6	15.0	-	良	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・ケズリ / 内: ヨコナナ		
33	H-9	土師質土器	小型切妻形	上縁・底付/1/5	-9.8	5.0	-	良	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・ケズリ / 内: ヨコナナ		
34	H-9	土師質土器	壺	上縁・底付/1/4	-11.8	6.0	-	普通	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・ケズリ / 内: ヨコナナ		
35	H-9	土師質土器	壺	上縁・底付/1/8	-14.0	6.4	-	良	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・ケズリ / 内: ヨコナナ		
36	H-9	土師質土器	壺	上縁・底付/1/6	-14.0	6.0	-	良	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・ケズリ / 内: ヨコナナ		
37	H-9	土師質土器	壺	上縁・底付/1/5	-10.0	3.0	-	良	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・ケズリ / 内: ヨコナナ		
38	H-9	土師質土器	壺	上縁・底付/1/4	-11.0	5.0	-	良	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・ケズリ / 内: ヨコナナ		
39	H-9	土師質土器	壺	上縁・底付/1/6	-12.5	2.9	-	良	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・ケズリ / 内: ヨコナナ	前文あり	
40	H-9	漆器類	漆	漆皮(瓦)	9.8	3.2	0.3	良	灰	瓦石	表面: 瓦片・角閃石・雲母 裏面: 瓦片・角閃石・角閃石	外: ロクロ整型 亂刷印斜面切り / 内: ロクロ整型	
41	H-10	土師質土器	小皿	はさみ形	9.9	3.6	0.0	普通	浅褐色	陶石	外: ロクロ整型 亂刷印斜面切り (右斜面) / 内: ロクロ整型		
42	H-10	土師質土器	壺	上縁・底付/2/3	15.3	5.0	-	普通	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・ケズリ / 内: ヨコナナ		
43	H-11	土師質土器	壺	上縁・底付/1/3	18.2	0.8	-	普通	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母・小礫	ナ・ナ・ナ・ナ	セマフ	
44	H-11	土師質土器	壺	上縁・底付/1/2	-12.0	0.7	-	良	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・ケズリ / 内: ヨコナナ		
45	H-11	土師質土器	壺	上縁・底付/1/4	-12.0	0.5	-	良	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・ケズリ / 内: ヨコナナ		
46	H-12	土師質土器	壺	上縁・底付/1/6	-17.0	2.5	-	良	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・ケズリ / 内: ヨコナナ		
47	H-12	土師質土器	壺	上縁・底付/1/3	18.2	0.9	-	普通	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・ケズリ / 内: ヨコナナ		
48	H-12	土師質土器	壺	上縁・底付/1/2	21.4	2.9	-	普通	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・ケズリ / 内: ヨコナナ		
49	H-12	土師質土器	壺	上縁・底付/1/6	10.0	3.1	-	普通	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・ケズリ / 内: ナ・ナ		
50	H-12	土師質土器	小型切妻形	上縁・底付/1/6	-8.0	6.0	-	良	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・ケズリ / 内: ナ・ナ		
51	H-12	土師質土器	小型切妻形	上縁・底付/1/6	-7.8	5.0	-	良	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・ケズリ / 内: ナ・ナ		
52	H-12b	土師質土器	壺	上縁・底付/2/3	15.6	30.7	4.0	普通	外: 深褐色 内: 浅褐色	陶石・白石・角閃石・小礫	外: ヨコカド・ケズリ / 内: ナ・ナ	西面黒色	
53	H-12b	土師質土器	壺	上縁・底付/2/3	-	0.2	-	普通	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・ケズリ / 内: ナ・ナ		
54	H-12b	土師質土器	壺	上縁・底付/2/3	10.4	3.9	-	普通	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・ケズリ / 内: ヨコナナ	セマフ・金目みあり セマフ	
55	H-12b	土師質土器	壺	上縁・底付/2/3	11.4	3.7	-	良	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・ケズリ / 内: ヨコナナ	セマフの好みが無い	
56	H-12b	土師質土器	壺	上縁・底付/2/3	10.8	3.9	-	普通	褐色	陶石・白石・雲母・小礫	外: ヨコカド・ケズリ / 内: ヨコナナ	黒面斑	
57	H-12b	土師質土器	壺	上縁・底付/2/4	-11.0	3.5	-	良	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・ケズリ / 内: ヨコナナ		
58	H-12b	土師質土器	壺	上縁・底付/1/3	-15.0	6.0	-	良	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・ケズリ / 内: ヨコナナ		
59	H-12b	土師質土器	壺	上縁・底付/1/6	10.8	4.9	-	良	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・ケズリ / 内: ヨコナナ		
60	H-12b	土師質土器	壺	上縁・底付/1/6	11.0	4.7	-	普通	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・ケズリ / 内: ヨコナナ	黒面斑	
61	H-12b	漆器類	漆	漆皮(瓦)	8.8	4.0	-	普通	褐色	瓦石	外: ヨコカド・ケズリ / 内: ヨコナナ	西面	
62	H-12a	土師質土器	壺	上縁・底付/1/6	14.0	6.0	8.0	普通	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・ケズリ / 内: ヨコナナ		
63	H-13	土師質土器	壺	上縁・底付/1/4	-11.0	12.4	-	良	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・ケズリ / 内: ヨコナナ		
64	H-13	土師質土器	壺	上縁・底付/1/6	-11.0	12.4	-	良	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・ケズリ / 内: ヨコナナ		
65	H-13	土師質土器	高麗	体・脚輪脚	-	2.0	-	普通	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ナ・ナ・ナ・ナ	西面	
66	H-13	土師質土器	壺	上縁・底付/1/6	9.3	3.6	-	良	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・ケズリ / 内: ヨコナナ	P1	
67	H-13	土師質土器	小型切妻形	上縁・底付/1/6	6.8	5.6	-	良	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・ケズリ / 内: ヨコナナ		
68	H-16	土師質土器	壺	上縁・底付/4/5	14.7	6.1	6.8	普通	8. 黒	陶石	外: ヨコカド / 内: ロクロ整型	表面と背面の黒面地	
69	H-16	土師質土器	小皿	上縁・底付/2/4	8.0	1.7	4.8	良	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・乱刷印斜面切り (右斜面) / 内: ロクロ整型		
70	H-16	土師質土器	壺	上縁・底付/5/6	9.6	2.3	5.4	普通	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・乱刷印斜面切り / 内: ロクロ整型	前17.17として取扱う	
71	H-17	土師質土器	壺	上縁・底付/1/4	-18.0	11.7	-	普通	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・ケズリ / 内: ナ・ナ		
72	H-17	土師質土器	壺	上縁・底付/1/8	21.0	11.7	-	良	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・ケズリ / 内: ヨコナナ	セマフ	
73	H-17	土師質土器	壺	上縁・底付/1/8	21.2	13.0	-	普通	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・ケズリ / 内: ヨコナナ		
74	H-17	土師質土器	壺	上縁・底付/1/4	-11.0	10.0	-	普通	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母・小礫	外: ヨコカド・ケズリ / 内: ヨコナナ		
75	H-17	土師質土器	壺	上縁・底付/1/4	-13.0	10.0	-	普通	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・ケズリ / 内: ヨコナナ		
76	H-17	土師質土器	壺	上縁・底付/1/4	-13.0	10.0	-	良	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・ケズリ / 内: ヨコナナ		
77	H-17	土師質土器	壺	上縁・底付/4/5	12.3	4.3	-	普通	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・ケズリ / 内: ヨコナナ		
78	H-17	土師質土器	高杯	上縁・底付/1/3	-13.4	16.7	-	普通	褐色	陶石・白石	外: ヨコカド / 内: ロクロ整型	側面と背面の黒面地	
79	H-19	土師質土器	壺	上縁・底付/4/5	11.6	-	-	普通	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・乱刷印斜面切り (右斜面) / 内: ロクロ整型		
80	H-18	土師質土器	壺	上縁・底付/4/5	-22.0	10.6	-	普通	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・乱刷印斜面切り / 内: ロクロ整型	02	
81	H-18	土師質土器	壺	上縁・底付/4/5	-13.0	11.7	-	普通	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・ケズリ / 内: ナ・ナ		
82	H-18	土師質土器	壺	上縁・底付/2/5	14.8	4.4	-	普通	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・ケズリ / 内: ヨコナナ		
83	H-21a	土師質土器	体・台面/1/2	(3.8)	5.0	普通	赤・黒	陶石	赤・黒	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド / 内: ロクロ整型		
87	H-22	土師質土器	壺	上縁・底付/1/6	-20.0	12.5	-	褐色	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・ケズリ / 内: ロクロ整型		
88	H-22	土師質土器	壺	上縁・底付/1/5	-19.0	12.5	-	良	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・乱刷印斜面切り (右斜面) / 内: ロクロ整型		
89	H-22	土師質土器	壺	上縁・底付/1/6	-20.0	12.5	-	良	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・乱刷印斜面切り (右斜面) / 内: ロクロ整型		
90	H-22	土師質土器	壺	上縁・底付/1/6	-19.0	11.4	-	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・乱刷印斜面切り (右斜面) / 内: ロクロ整型			
91	H-22	土師質土器	壺	上縁・底付/1/6	-18.0	11.8	-	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・乱刷印斜面切り (右斜面) / 内: ロクロ整型			
92	H-22	土師質土器	体・台面/1/2	(4.8)	5.6	普通	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド / 内: ロクロ整型				
93	H-22	土師質土器	壺	上縁・台面/1/2	15.2	7.2	7.4	普通	外: 明褐色 内: 黒	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド / 内: ロクロ整型	内面黒色地色	
94	H-22	土師質土器	壺	上縁・底付/7	10.2	2.9	6.5	普通	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・乱刷印斜面切り (右斜面) / 内: ロクロ整型	内面黒色地色	
95	H-22	土師質土器	壺	上縁・底付/2	9.6	3.4	5.0	普通	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド / 内: ロクロ整型	内面黒色地色	
96	H-22	土師質土器	小皿	上縁・底付/3/4	9.1	2.3	4.3	良	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・乱刷印斜面切り (右斜面) / 内: ロクロ整型	内面黒色地色	
97	H-22	土師質土器	壺	上縁・底付/1/6	9.3	3.5	5.6	普通	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・乱刷印斜面切り (右斜面) / 内: ロクロ整型	内面黒色地色	
98	H-22	土師質土器	壺	上縁・底付/1/6	-11.6	0.7	-	褐色	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母・小礫	外: ヨコカド / 内: ロクロ整型	内面黒色地色	
99	H-22	土師質土器	壺	上縁・底付/2/5	-10.5	7.8	1.1	良	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド / 内: 当て丸	側面黒色地色	
103	H-23	土師質土器	壺	上縁・底付/2/5	14.0	3.7	7.0	普通	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・乱刷印斜面切り (右斜面) / 内: ロクロ整型	内面黒色地色	
104	H-23	土師質土器	壺	上縁・底付/3/4	10.0	3.2	5.6	普通	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド / 内: ロクロ整型	内面黒色地色	
105	H-23	土師質土器	小皿	上縁・底付/1/2	8.6	2.3	5.0	普通	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド・乱刷印斜面切り (右斜面) / 内: ロクロ整型	内面黒色地色	
106	H-23a	土師質土器	壺	上縁・底付/1/2	8.6	2.1	5.8	普通	褐色	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド / 内: ロクロ整型	内面黒色地色	
107	H-23	土師質土器	壺	上縁・底付/2/5	-	14.0	-	普通	黒	陶石・白石・角閃石・雲母	外: ヨコカド / 末ギサギサ / 内: ロクロ整型	黒色十数 末ギサギサ	

Tab.5 出土遺物觀察表

No.	遺構	種別	部位	量算 (cm)			地城	色調	形状	調整			備考	
				長さ	幅	厚さ				長さ	幅	厚さ		
108	H-23	土師質土器	土器・鋸歯形 柄切手	1.80	0.6	0.4	長円筒	黒褐色	直筒	外:ロクロ整彫 / 内:ロクロ整彫	地城:土器	地城:土器	地城:土器	
111	H-25	土師質土器	土器	1.10m	3.0	0.2	圓筒	灰褐色	直筒・片口・内凹円筒	内:ロクロ整彫 / 地城:土器	地城:土器	地城:土器	地城:土器	
112	H-25	土師質土器	土器	0.80	2.80	0.71	圓筒	灰褐色	直筒・片口・内凹円筒	内:ロクロ整彫 / 地城:土器	地城:土器	地城:土器	地城:土器	
113	H-25	土師質土器	土器	1.00	2.60	0.72	圓筒	灰褐色	直筒・片口・内凹円筒	内:ロクロ整彫 / 地城:土器	地城:土器	地城:土器	地城:土器	
114	H-25	土師質土器	土器	1.10	2.00	0.75	圓筒	灰褐色	直筒・片口・内凹円筒	内:ロクロ整彫 / 地城:土器	地城:土器	地城:土器	地城:土器	
115	H-25	土師質土器	土器	1.00	2.00	0.50	圓筒	灰褐色	直筒・片口・内凹円筒	内:ロクロ整彫 / 地城:土器	地城:土器	地城:土器	地城:土器	
116	H-25	土師質土器	土器	1.00	2.00	0.50	圓筒	灰褐色	直筒・片口・内凹円筒	内:ロクロ整彫 / 地城:土器	地城:土器	地城:土器	地城:土器	
117	H-25	土師質土器	土器・鋸歯形 柄切手	1.80	0.6	0.4	圓筒	灰褐色	直筒・片口・内凹円筒	外:平行タキシ / 内:当て具	地城:土器	地城:土器	地城:土器	
118	H-25	陶製陶	陶	1.00	6.2	0.4	圓筒	灰褐色	直筒・片口・内凹円筒	外:ロクロ整彫 / 地城:土器	地城:土器	地城:土器	地城:土器	
119	H-25	陶製陶	陶	-	2.25	0.74	圓筒	灰褐色	直筒・片口・内凹円筒	外:ロクロ整彫 / 地城:土器	地城:土器	地城:土器	地城:土器	
120	H-25	陶製陶	土器	-	13.0	0	直筒	灰褐色	直筒・片口・内凹円筒	外:ロクロ整彫 / 地城:土器	地城:土器	地城:土器	地城:土器	
121	H-26	土師質土器	土器	1.10	2.0	0.70	12.4	4.3	5.4	直筒	灰褐色	直筒・片口・内凹円筒	地城:土器	
122	H-26	土師質土器	小器	1.10	0.45	7.3	2.1	4.1	0.5	直筒	灰褐色	直筒・片口・内凹円筒	地城:土器	
123	H-26	陶製陶	陶	1.00	1.00	0.80	圓筒	灰褐色	直筒・片口・内凹円筒	外:ロクロ整彫 / 地城:土器	地城:土器	地城:土器	地城:土器	
124	H-26	陶製陶	陶	1.00	1.00	0.80	圓筒	灰褐色	直筒・片口・内凹円筒	外:ロクロ整彫 / 地城:土器	地城:土器	地城:土器	地城:土器	
125	H-26	土師質土器	土器・鋸歯形 柄切手	1.80	0.6	0.4	圓筒	灰褐色	直筒・片口・内凹円筒	外:ロクロ整彫 / 地城:土器	地城:土器	地城:土器	地城:土器	
126	H-26	陶製陶	陶	1.00	1.00	0.80	圓筒	灰褐色	直筒・片口・内凹円筒	外:ロクロ整彫 / 地城:土器	地城:土器	地城:土器	地城:土器	
137	H-27	土師質土器	土器	1.00	2.0	2.2	14.9	4.8	8.5	直筒	灰褐色	直筒・片口・内凹円筒	地城:土器	
138	H-27	土師質土器	土器	1.00	2.0	2.50	直筒	灰褐色	直筒・片口・内凹円筒	内:ロクロ整彫 / 地城:土器	地城:土器	地城:土器	地城:土器	
141	D-21	土師質土器	土器	0.50	0.50	0.50	圓筒	灰褐色	直筒・片口・内凹円筒	外:ロクロ整彫 / 地城:土器	地城:土器	地城:土器	地城:土器	
142	D-21	土師質土器	土器	0.50	0.50	0.50	圓筒	灰褐色	直筒・片口・内凹円筒	外:ロクロ整彫 / 地城:土器	地城:土器	地城:土器	地城:土器	
143	D-21	土師質土器	土器	0.50	0.50	0.50	圓筒	灰褐色	直筒・片口・内凹円筒	外:ロクロ整彫 / 地城:土器	地城:土器	地城:土器	地城:土器	
144	D-25	瓦質土器	瓦質土器	1.00	1.00	0.80	圓筒	灰褐色	直筒・片口・内凹円筒	内:ナチュラル / 外:コナカナ	地城:土器	地城:土器	地城:土器	
150	B-3	白陶	白陶	1.00	4.1	5.4	直筒	白色	直筒	外:ロクロ整彫 / 内:ロクロ整彫	地城:土器	地城:土器	地城:土器	
151	W-1	陶器	陶器	-	2.80	0.93	圓筒	灰褐色	直筒・片口・内凹円筒	外:ロクロ整彫 / 内:ロクロ整彫	地城:土器	地城:土器	地城:土器	
152	W-1	陶器	施釉陶器	1.00	2.0	1.22	6.3	7.2	直筒	灰褐色	直筒・片口・内凹円筒	外:ロクロ整彫 / 内:ロクロ整彫	地城:土器	地城:土器
153	W-1	瓦	瓦	平瓦	0.50	0.25	圓筒	灰褐色	直筒	表面:白目 / 施釉:ナゲ	地城:土器	地城:土器	地城:土器	

Tab.6 石製品觀察表

No.	遺構	種別	部位	量算 (cm)			石材	備考	量算 (cm)			石材	備考							
				長さ	幅	厚さ			長さ	幅	厚さ									
12	H-1	石製品	石器	10.7	6.8	8.0	90%	輪郭剥離	未剥離の保存 3ヶ所	154	W-1	石製品	打削	0.90	0.07	2.7	416	点綴剥離片	刃削り面	
63	H-12	石製品	石器	-	(0.3)	3.3	2.8	83	剝離剥離	剥離 O-Sリット	155	透析内	石製品	磨	0.20	0.10	8.1	815	磨削面	刃削り面
84	H-21a	石製品	石器	1.2	1.1	0.6	3	石器	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

Tab.7 鉄製品觀察表

No.	遺構	種別	部位	量算 (cm)			備考	量算 (cm)			備考				
				長さ	幅	厚さ		長さ	幅	厚さ					
28	H-7	鉄製品	武器	0.98	1.2	0.4	0.01直・刃削り丸丸	132	H-25	鉄製品	鍛錬鉄頭	0.30	0.4	0.3	地城:土器
85	H-21b	鉄製品	武器	0.45	1.1	0.3	0.03直・刃削り丸丸	133	H-25	鉄製品	丸丸直刃削り	0.15	0.5	0.5	地城:土器
86	H-21b	鉄製品	F型	2.6	0.7	0.5	くさび形 手刀	134	H-25	鉄製品	丸丸直刃削り	0.50	0.5	0.5	地城:土器
100	H-22	鉄製品	武器	1.40	1.0	0.3	0.03直・刃削り丸丸	135	H-25	鉄製品	鍛錬鉄頭	0.20	0.5	0.5	地城:土器
101	H-22	鉄製品	武器	0.50	5.3	4.4	0.5直・刃削り丸丸	136	H-25	鉄製品	鍛錬鉄頭	0.31	0.4	0.4	地城:土器
102	H-22	鉄製品	武器	0.50	0.5	0.5	0.03直・刃削り丸丸	137	H-27	鉄製品	直削	1.0	1.0	0.3	地城:土器
109	H-23	鉄製品	武器	1.40	1.0	0.3	0.03直・刃削り丸丸丸丸	140	H-27	鉄製品	鍛錬鉄頭	<2.25	0.4	0.3	地城:土器
110	H-23	鉄製品	刀子	1.40	1.0	0.3	0.03直・刃削り丸丸丸丸	145	H-22	鉄製品	鍛錬鉄頭	0.80	3.0	0.2	地城:土器
127	H-26	鉄製品	武器	0.50	4.1	0.6	馬具か	146	H-22	鉄	小形直削	2.2	2.5	0.3	地城:土器
128	H-26	鉄製品	刀子	1.00	13.0	1.4	0.3 ワタ状木質付柄	147	H-22	鉄	直削直削	2.4	0.6	0.1	地城:土器
129	H-26	鉄製品	刀子	1.00	0.8	0.3	初見のみ	148	H-22	鉄	直削直削	2.4	0.6	0.1	地城:土器
130	H-26	鉄製品	劍	5.7	5.5	0.3	ワタ状木質付柄	149	H-22	鉄	直削直削	2.3	0.6	0.1	地城:土器
131	H-26	鉄製品	刀子	7.3	5.1	0.4	L字形直削	156	H-19	鉄	直削	5.3	0.3	0.2	地城:土器

Tab.8 穴穴建物跡出土土器・陶製器・瓦一覧表(重量比)

遺構名	遺構	種別	部位	量算 (g)			遺構名	種別	量算 (g)			遺構	備考								
				小型品 (1kg・塊 他)	大型品 (1kg・塊 他)	羽釜・ 土釜			長さ	幅	高さ										
H-1	422.0	3,061.0	155.5	635.0	0.0	0.0	0.0	4,273.5	7.5	29.0	377.0	9.5	0.0	9.0	0.0	226.0	658.0				
H-2	568.5	4,710.4	310.8	308.0	0.0	0.0	0.0	1,421.5	17.0	20.7	2,814.0	20.0	271.5	0.0	7.0	0.0	65.0	3,561.0			
H-3	378.0	485.0	75.0	1,491.0	0.0	0.0	0.0	2,420.0	116.0	335.5	0.0	94.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	545.5			
H-4	16.5	61.5	54.0	67.5	0.0	0.0	0.0	0.0	199.5	17.0	58.0	488.0	175.5	98.5	148.0	0.0	0.0	2,600.0	1,228.0		
H-6	0.0	63.0	6.0	0.0	0.0	86.0	0.0	0.0	155.0	21.7	31.5	62.0	137.0	12.0	18.5	125.0	241.5	931.0			
H-7	37.0	22.9	498.5	88.0	0.0	0.0	13.5	171.0	1,375.0	22.3	75.0	892.0	1,277.0	461.5	1,968.0	26.5	0.0	36.0	4,734.5		
H-8	31.5	188.0	160.0	50.0	111.5	0.0	0.0	2,126.5	2,669.5	13.0	180.0	888.0	417.0	107.0	83.5	76.0	0.0	310.5	2,012.0		
H-9.3	553.0	80.80	196.0	460.5	0.0	0.0	0.0	0.0	2,017.5	24.2	22.0	2,275.5	122.5	121.5	32.5	0.0	0.0	0.0	526.0		
H-10	7.0	2.5	462.0	0.0	15.5	6.0	2,320.0	747.0	25.0	13.0	1,133.5	1,105.0	1,022.0	2,640.0	17.6	0.0	1,005.0	4,757.5			
H-11	298.5	1,704.5	90.0	313.5	0.0	0.0	1,495.5	2,556.0	2.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4,749.0			
H-12	894.0	6,473.5	61.50	3,427.0	467.0	46.5	944.5	12,967.5	2.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3,210.0		
H-13	208.0	377.5	226.0	273.5	0.0	0.0	5.5	0.0	1,091.5	2.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	116.0		
H-15	122.5	279.0	19.0	0.0	0.0	0.0	21.0	0.0	441.5	2.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	125.0		
												計(g)	4,322.0	23,059.0	7,040.0	10,624.5	5,631.0	529.5	125.0	10,204.0	61,535.0

## VI 元総社蒼海遺跡群（143）出土人骨

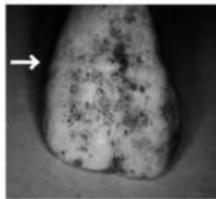
谷畠美帆（明治大学）

人骨は3遺構（DB-1～3）から出土している。いずれの資料についても遺存状態は不良であり、詳細を把握することは困難である。しかし、数点の歯など同定が可能な部位も出土しているため、以下、遺構ごとに記述する。

### （1）DB-1（中世）遺構

歯槽は遺存していないが、本遺構からは合計6本の歯が出土している（歯式を下記に示す）。上顎第2切歯はシャベル型切歯であり、エナメル質形成の所見が確認できる（第1図）。咬耗はエナメル質にとどまるが、上顎第1切歯では不規則な咬耗が確認できている。この他、切歯や犬歯とみなされる歯根が数本遺存している。成人個体である（性別不明）。

右 ————— 3 2 1 ————— 左  
————— | —————  
1 2 ————— —歯牙遺存なし



第1図

### （2）DB-2（中世）遺構

本遺構からは、比較的保存の良い左大腿骨骨幹の一部が出土している。この他、歯根を含め、約30本の歯が遺存している。咬耗は切歯および犬歯ではエナメル質にとどまるが、小臼歯および第1大臼歯では、象牙質の多くが露出しており、不規則な咬耗を呈し、歯冠の形態がく

ずれてしまっている（第2図）。歯槽は、上顎左右第1大臼歯および下顎左右第1大臼歯においてのみ遺存している。女性と推定される成人個体である。

右 ————— 6 5 4 — 2 1 | 1 2 3 4 5 6 — 左  
8 — 6 — 4 3 — 1 | 1 ————— 6 —  
—歯牙遺存なし



第2図

### （3）DB-3（古代）遺構

本遺構からは下肢骨片および大臼歯片が数点出土している。咬耗はエナメル質にとどまっている。遺存部位が少ないため、詳細は不明であるが、成人個体と記しておく。

Tab.9

DB-1（中世）	No.3	破片
	No.4	下肢骨片
	No.5	破片（長骨？）
	No.7	破片（下肢骨片？）
DB-2（中世）	—	頭蓋骨片
	胸付近	下肢骨片
	—	左大腿骨骨幹（女性？）
DB-3（古代）	—	下肢骨片・確認
	No.2	下肢骨片
	No.3	下肢骨片
	No.1	骨粉・臼歯片

## VII 元総社蒼海遺跡群（143）出土獣骨・魚骨の同定結果

樋泉岳二（明治大学）

H-22（10世紀の堅穴建物跡）、W-1（蒼海城堀跡）、D-28（中世土坑）、D-16（近世土坑）から獣骨4点と魚骨3点が検出された。同定結果をTab.10に示す。

### （1）獣骨

No.1：H-22床面からウマ左前肢骨が交連状態で出土した。保存状態は悪いが、幸うじて原型を保っている。上腕骨骨幹部から基節骨までが確認できた。上腕骨遠位端は融合しており成骨である。上腕骨近位端と中節骨・末節骨は確認できなかったが、保存状態が悪いことからみて、元は存在していた可能性が高く、肩関節で切り離された前肢が持ち込まれたのではないかと推測される。ただし肉がついた状態であったか、肉の除去後の骨だけであったかは不明である。

No.2：ウマ上腕骨の骨幹部で遠位の関節部を欠く、保存状態は比較的良好。

No.3：ウマ臼歯破片。

No.4：シカ角（落角）。角製品の素材として持ち込まれたものか（ただし加工痕は認められなかった）。

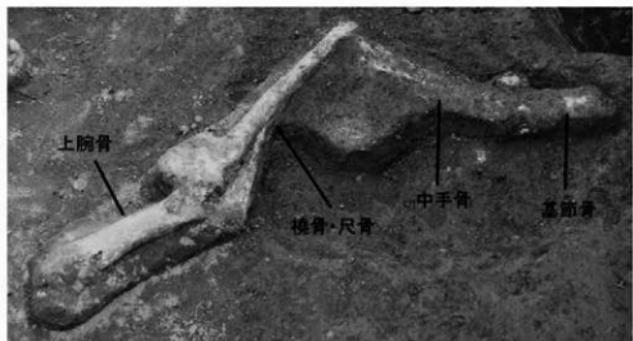
### （2）魚骨

No.1・2：カツオの左右の主鰓蓋骨で、おそらく同一個体。保存状態は比較的良好。

No.3：カツオ尾椎、No.1・2と同一個体の可能性がある。保存状態は比較的良好。

Tab.10. 元庭社跡（143）出土獣骨・魚骨の同定結果

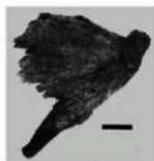
資料 No.	出土位置	種類	部位	残存位置	左右	計測	備考
獣骨 No. 1	H-22 床面	ウマ	上腕骨	近位端欠損	L		交通
			橈骨	完存	L		
			尺骨	完存	L		
			中手骨	完存	L	SD=31.3mm	
			基節骨	遠位端欠損	L		
獣骨 No.2	W-1 覆土	ウマ	上腕骨	骨幹	R		
獣骨 No.3	D-28	ウマ	臼歛	破片	?		
獣骨 No.4	H-22 床面	シカ	角	角座～中央部	?	角座径約 40mm	落角
魚骨 No.1	D-16 他	カツオ	主鰓蓋骨		L		同一個体
魚骨 No.2	D-16 他	カツオ	主鰓蓋骨		R		
魚骨 No.3	D-16 他	カツオ	尾椎				



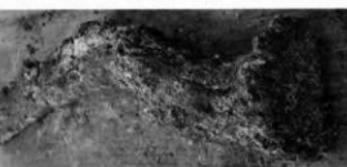
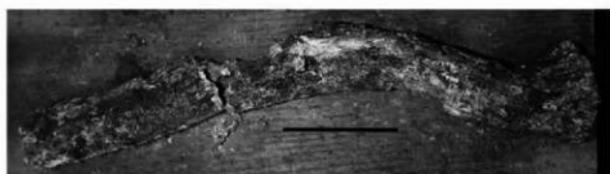
獣骨No.1 ウマ前肢骨



獣骨No.2 ウマ上腕骨



魚骨No.1 カツオ主鰓蓋骨



獣骨No.4. シカ角



魚骨No.3 カツオ尾椎

## VIII 元総社蒼海遺跡群（143）出土炭化材・炭化種実の同定

高橋 敦（株式会社古生態研究所）

### はじめに

10世紀末と考えられる堅穴建物跡H-26bから出土した炭化材の樹種同定と炭化種実の種実同定を実施した。

### （1）試料

H-26b出土の炭化物22点（C-01～22）で、このうち19点（C-01～14,16～20）が炭化材、3試料（C-15,21,22）は炭化種実である。

### （2）分析方法

炭化材は、自然乾燥させた後、木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接縫断面）の3断面について割断面を作製し、アルミ合金製の試料台にカーボンテープで固定する。炭化材の周囲を樹脂でコートイングして補強する。走査型電子顕微鏡（低真空）で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。炭化種実遺体は、双眼実体顕微鏡下で観察し、現生標本と特徴を比較して分類群を同定する。

### （3）結果

樹種同定結果および種実同定結果をTab.11に示す。炭化材は広葉樹11分類群（アワブキ属、ハギ属、エノキ属、サクラ属、コナラ属、コナラ節、クリ、クマシデ属イヌシデ節、ヌルデ、カキノキ属、ハイノキ属サワタガ節、エゴノキ属）に同定された。炭化種実は、イネの穀果（炭化米）、ダイズ属およびダイズ属？の種子に同定された。なお、紙面の関係で、記載と図版は割愛する。

### （4）考察

出土した炭化材のうち、C-01,02の2点は床面直上出土で、垂木などの建築部材に由来する可能性がある。2点の炭化材はクリとアワブキ属に同定され、少なくとも2種類が利用されたことが推定される。強度の高いクリと、やや重硬なアワブキ属が利用されている。

その他の炭化材は、中央部を中心に炭化種実も含めて散在しており、元位置から動いていると考えられる。炭化材のうち、C-04,20は芯持丸木、C-05,06は芯持材、C-04は節付近の破片、C-08はミカン割状を呈しており、いずれも小径材に由来すると考えられる。炭化材は、アワブキ属、エゴノキ属、イヌシデ節、ハギ属に同定され、比較的強度の高い分類群が多い。これらは、小径材でも利用可能な部位（横木など）に由来する可能性がある。なお、C-20は、直径が1cm未満の小径材（当年枝）であり、資材等として利用された可能性がある。

残る炭化材は小さな破片で、形状や部位の詳細は不明である。エノキ属、サクラ属、コナラ節、クリ、ヌルデ、カキノキ属、エゴノキ属、サワタガ節が認められ、様々な種類が利用されたことが推定される。

伊東・山田（2012）のデータベースを用いて、周辺地域の調査例を見ると、半田劍城遺跡（津川市）、保渡田八幡塚古墳（高崎市）、下東西清水上遺跡（前橋市）で住居跡出土炭化材の樹種同定が実施されている。その結果を見ると、いすれの遺跡でも多くの分類群が確認されており、その中にはイヌシデ節、サクラ属、エノキ属、コナラ節、クリなど、今回の調査で確認されている分類群も含まれているなど、今回と類似した用材傾向が推定される。確認できる範囲では、同様の傾向を示す資料は同時期の県内他地域では確認できない。このことは、本地域の地形や土地利用とそれに起因する古植生を考える上で注目される。一方、炭化種実には、イネとダイズ属（ダイズ属？を含む）が確認され、これらの穀類が植物食糧として利用されたことが推定され

る。また、種実は認められなかったが、炭化材に認められたクリも食糧として有用である。炭化材に確認されたことから果実の入手も可能であったと考えられる。また、カキノキ属には、在来種と栽培種が含まれるが、在来種のトキワガキは静岡県以西に分布している。同じく在来種のリュウキュウマメガキは、埼玉県南部の越生町や飯能市付近が分布北限とされている（須田,2019）。これらの分布状況から、今回のカキノキ属は、栽培者のカキノキまたはマメガキの可能性がある。なお、日本の遺跡出土大型植物遺体データベース（石田ほか,2016）によれば、カキノキ属は万歳寺廻り遺跡（吉岡町）の平安時代とされる種実遺体中に確認された例がある。また、種実遺体に認められたダイズ属については報告例が確認できないが、元総社寺田遺跡（前橋市）の奈良時代～平安時代とされる種実遺体や、阿久津遺跡（吉岡町）および万歳寺廻り遺跡の平安時代とされる種実遺体の中にマメ科の種子が確認された例がある。

### 引用文献

- 石田糸絵・工藤雄一郎・百原 新 2016.日本の遺跡出土大型植物遺体データベース、植物生史研究,24,18-24.  
伊東隆夫・山田昌久（編）2012.木の考古学 出土木製品用材データベース、海青社,444p.  
須田大樹,2019.埼玉県の暖温帯域の石灰岩地で見出されたリュウキュウマメガキ *Diospyros japonica*（埼玉県新産）について、埼玉県立自然の博物館研究報告,1,61-64.

Tab.11 H-26bの樹種同定及び種実同定結果

試料名	状態	部位	形状	樹種	備考
C-01	炭化材	垂木？	棒状	クリ	
C-02	炭化材	垂木？	棒状	アワブキ属	
C-03	炭化材	不明	破片	コナラ属コナラ節	
C-04	炭化材	不明	芯持丸木	エゴノキ属	
C-05	炭化材	不明	節付近破片	アワブキ属	
C-06	炭化材	不明	芯持材	アワブキ属	小径材
C-07	炭化材	不明	芯持材	クマシデ属イヌシデ節	小径材
C-08	炭化材	不明	ミカン割状	クマシデ属イヌシデ節	
C-09	炭化材	不明	破片	コナラ属コナラ節	壁面
C-10	炭化材	不明	破片	エゴノキ属	
C-11	炭化材	不明	破片	エゴノキ属	
C-12	炭化材	不明	破片	サクラ属	
C-13	炭化材	不明	破片	クリ	
C-14	炭化材	不明	破片	エノキ属	
C-15	炭化種実	—	—	イネ（穀果）	塊状
C-16	炭化材	不明	破片	？	
C-17	炭化材	不明	破片	カキノキ属	
C-18	炭化材	不明	破片	クリ	板状
C-19	炭化材	不明	破片	ハイノキ属サワタガ節	
C-20	炭化材	芯持丸木	—	ハギ属	当年枝
C-21	炭化種実	—	—	イネ（穀果）	短粒小型
		—	—	イネ（穀果）	小型以上
		—	—	イネ（穀果）	小型以上
		—	—	ダイズ属？（種子）	破片
C-22	炭化種実	—	—	ダイズ属（種子）	完形未満
		—	—	ダイズ属（種子）	完形未満
		—	—	ダイズ属（種子）	完形未満

## IX 発掘調査の成果と課題

今回報告した元総社蒼海遺跡群（143）では、多岐にわたる遺構が確認され、多様な遺物の出土をみた。区画整理事業に伴う発掘調査は未だ進行中で、令和5年2月現在も、今回報告地点の南隣接地（148）地点の発掘調査実施中である。本章では（143）地点で確認された遺構・遺物を時期別に再確認し、特記される成果について幾つかの見解を提示し、総括としたい。

### （1）古墳時代後期～飛鳥・白鳳期、国府成立以前

堅穴建物跡を12軒確認した。全て北に対して斜行する軸方向の方形プランで、最も古いのはH-17、6世紀後半に遡り藤岡系の須恵器無蓋高杯が出土している。最新は7世紀末～8世紀初頭のH-2・3・9・13で、土師器・須恵器の高盤が出土、律令的土器様式を窺える。6世紀～7世紀前半が堅穴部は正方形で描うが、竈や貯蔵穴の位置は比較的多様という特徴がある。一方で7世紀後半～8世紀初頭は堅穴部が丸みを帯びる方形や南側出入口に張出舟をもつもの、舟形や長方形のもの等、バリエーションがある反面、竈は東で貯蔵穴は竈の右というように統一感がある。また、新旧問わず壁周溝や柱穴、竈や貯蔵穴の様相から大規模な改修が行われたものが多い。庵屋段階で竈材の採掘を行うH-9の存在も踏まえれば、多数の堅穴建物跡の実態は、新築も多いが庵屋やそれをリノベーションする利用形態が指摘可能で、一定人口が定住する一般的な集落のイメージとは異なる。該期集落は既往の調査によれば5世紀後半まで遡り、粗密はあるが牛池川の両岸に広く堅穴建物が展開する、一見すると大集落遺跡と言って良い様相だが、その実は人の出入りが頻繁な販場的様相という点は注意すべきと思う。遺跡北東に展開し、繰り起に大型古墳が造営された総社古墳群と無関係とは思えない。そうした視点での分析が急務だろう。

### （2）奈良時代 大規模な区画の出現

前時期までの堅穴建物群は一斉に姿を消す。調査区内では区画溝であるW-2のみである。この区画溝は、今回調査区では一直線、北に対して西へ5°振れている。平面図を合成したところ、北に隣接する（104）で「方形周溝墓」とされているL字形状の溝跡は、この区画溝の延長かつ屈曲部に相当することが判明した。南方は未調査部分や既調査地点であっても中世蒼海城跡に相当している為、不明であった。なお、総社神社の旧所在地伝承がある宮鍋神社の南方では、東西軸の総地業建物跡や布地業建物跡が現存までに10軒確認されている。この建物群が何であるのかは諸説あるが、国府北方に所在していた倉庫群か、群馬郡衙正倉である可能性が考えられる。これに伴う区画溝は、市教育委員会による長年の確認調査から推定されており、南・西辺にはほぼ確定しつつある。ところで現在実施中の上野国府等範囲内確認調査の79トレンチでは、この南辺区画溝の立ち上がり部分から、先行区画溝の可能性がある遺構が確認された（市文化財保護課阿久澤智和氏ご教示）。これを今回確認した区画溝W-2による区画の南辺と仮定すると南北約370m、東西は牛池川までの間最大約350mという、大規模な区画が想定される。さらに言えばW-2から推定される区画は、現在推定されている区画より大きく、かつ先行する。屋上屋を架すかも知れないが、今回W-2から想定した区画は、群馬郡衙正倉初期の区画と考えたい。溝自体が小規模である点はやや気になるところだが、これについては計画線として先行削除された地割の可能性も考えている。今少しデータの蓄積を俟って、改めて検討を行いたい。

### （3）平安時代 国府のマチ

10世紀になると、再び堅穴建物跡が確認される。今回は17軒を確認したが、周辺調査区でも多数確認されており、その総数は数え切れず、夥しいという表現が相応しい。ほとんどの建物は地形の勾配に

関わらず正方ないしはそれに近く、計画性は高いと言える反面、土地区画を示す痕跡は具体的な遺構としてはほっきりしない。また、堅穴建物跡は12世紀初頭までの200年に満たない時期幅であるにも関わらず改修・重複が激しく、不特定多数人が離合集散を繰り返した結果と思われる。また、堅穴建物の重複する間に土塙墓（DB-3）も存在しており、土地利用の変化も激しかったようである。遺物としては、当該期に一般的な土師質器の壺・塊・小皿や羽釜・土釜に加え、縁釉・灰釉陶器や白磁も目立つ。金属製品の出土も多く、今回のH-26bでは各種鉄器が多く出土しているが銀治遺構は確認できず、リサイクルに伴う故銀収集の結果と考えられる。H-19では銅鏡も出土しており、何らかの工房が一定数存在していることは確かである。H-22では床面から馬骨と鹿角が出土しており、馬は食用の可能性もある。

白磁を副葬する土塙墓（DB-3）が堅穴建物群の中に、突如として営まれている点も興味深い。土塙墓を直接切るH-21a・b以外、つまり土塙墓とほぼ同時期と考えられる堅穴建物跡は、H-22→H-23（一部重複する建替え）、H-26b→H-26a（改修としての拡張）という位置関係で、H-23がその周堤帯推定範囲に土塙墓がかかる可能性があるものの、墓と建物は一定の距離を置いている。とは言え限りなく接近していることは変わらず、堅穴建物と住居とは言え、現代人の感覚では理解しがたい。ところで本遺跡南方の西部第一落合遺跡群の古代墓を検討した佐野良平は、「日本後記」延暦十六年（797）正月壬子条の山城郡についての記述から、8世紀末には家の側に死者を葬る習慣が存在していたとし、「屋敷墓」のようなものと推定している（佐野2022）。西部第一落合遺跡群と元総社蒼海遺跡群、双方の遺跡相がどう同じで、どこが異なっていたのかは現状まだわからないが、今回の土塙墓も「屋敷墓」のような性格を想定することは不可能ではない。近々の課題としたい。何れにせよ、現時点での上野国府のマチは、複雑かつ混在とした様相であることは否めない。関わった調査機関の垣根を超えた、純粹に考古学的な検討の場が必要だと感じるのは、きっと報告者だけでは無いだろう。

### （4）中世 蒼海城

今回の調査では、蒼海城の主たる城郭としては初めて、堀底まで調査することが出来た。詳細な所見はV章に譲るが、調査し得た部分の堀の最初期は断面がV字状の薬研堀で、少なからず水流があったことが予想された。おそらく堀は北方の牛池川から取水し、「本丸」とされる城の中核部分の堀を巡った後、最終的には南方の染谷川に落ちる仕組みとなっていたと考えられる。具体的な時期については、明確な出土遺物も無いために判断としなかったが、防護的な機能に加え、むしろ水利権を示す、古墳時代の「豪族居館」の延長にあるように思えた。また、堀廻はある程度埋没が進んだ後、東側の立ち上がりを切岸状の直線に近い漸削形を削り出す改修を行っている。調査時の感覚では極めて高い防御性をもった、戦禦時代のイメージながらといった構造であった。この改修は本調査区東方の（31）地点でも確認されており、その内側は「蒼海城跡」によれば「諂訪屋敷」とされ、「本丸」の北を守る曲輪であったと思われる。今回の調査では城に伴う明確な遺構は不鮮明であった。蒼海城についても国府のマチ同様、全体的な検討の段階に来ているように思う。今後に期待したい。

#### 引用文献

- 中村昌平 2018 「推定上野国府の古代景観」「豊馬文化」332  
佐野良平 2022 「DB-3木棺相について」「西部第一落合遺跡（4）」  
日向耕史 2016 「群馬県前橋市元総社地域における地形の形成と土地利用」「地域考古学」1号  
中村に多くの報告書を参考とさせて頂いたが、細面の都合で割愛させて頂く。



最初の作戦会議



人海戦術

竜調査の指導

元総社蒼海遺跡群 (143)

# 写真図版



太田の二人



竜女子?



重機でダメ押し



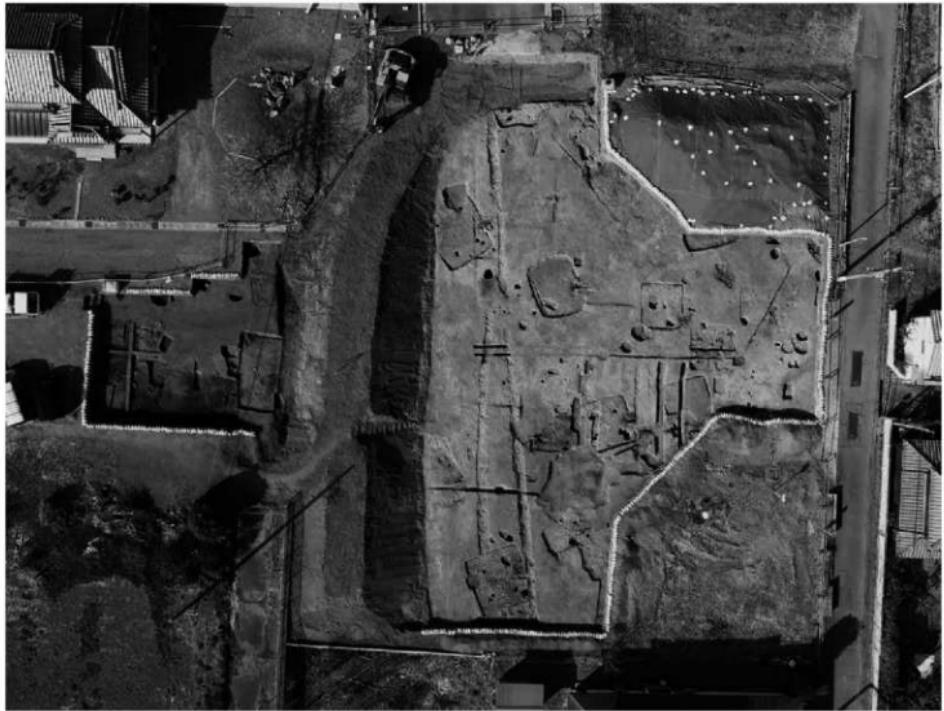
蒼海城堀跡 堀底まで頑張って掘りました



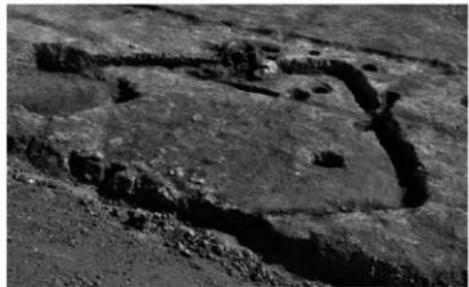
北方上空から見た元社着海遺跡群（143）調査区



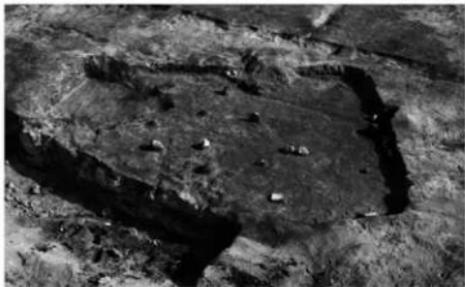
南東上空から見た元総社蒼海遺跡群（143）調査区



調査区垂直（北が上）



H-1 完掘（南西から）



H-1 遺物出土状況（南西から）



H-1 遺物出土状況 南東壁際の埴縞石



H-1 遺物出土状況 貯蔵穴の土器 2点



H-1 窟 検出（南西から）



H-1 窟 調査状況（南西から）



H-1 窟 遺物と土層断面（南西から）



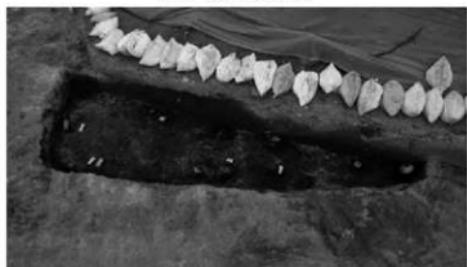
H-1 窟 掘方（南西から）



H-2 完掘（北から）



H-2 完掘（南東から）



H-3 完掘・遺物出土状況（南から）



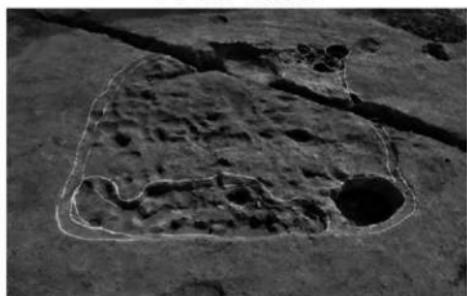
H-3 遺物出土状況近景（南から）



H-4 完掘（南東から）



H-4 掘方（南東から）



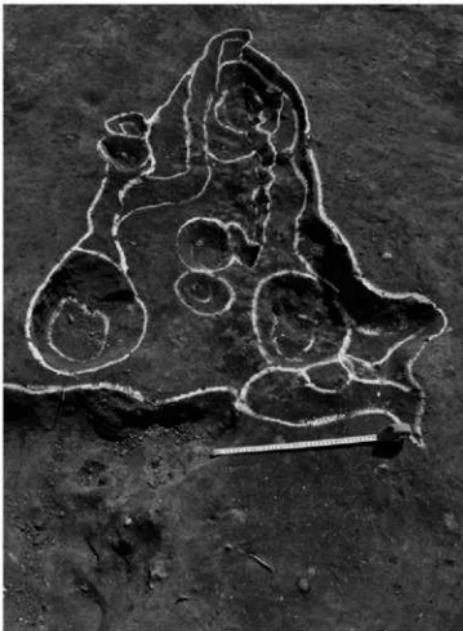
H-6 完掘・掘方（西から）



H-6 貯藏穴 土層断面（西から）

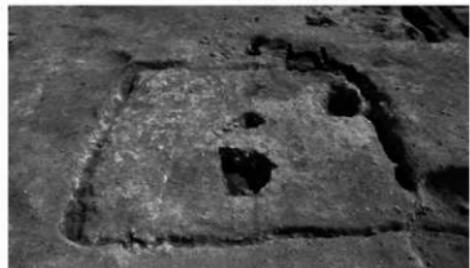


H-7 遺物出土状況（北から）

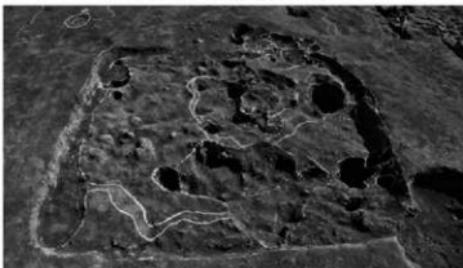


H-7 窑 使用面（南西から）

H-7 窯 掘方（北西から）



H-8 完掘（西から）



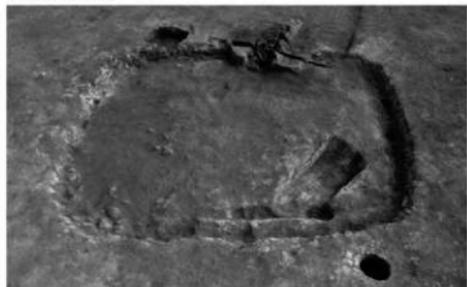
H-8 掘方（西から）



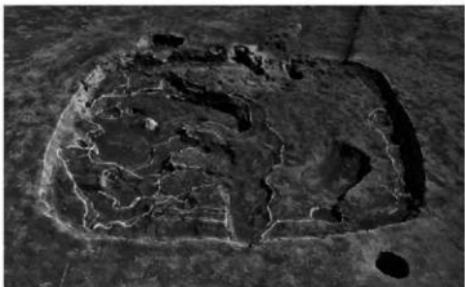
H-8 窯 空焚き面（西から）



H-8 窯 掘方（西から）



H-9 完掘（南西から）



H-9 完掘・掘方（南西から）



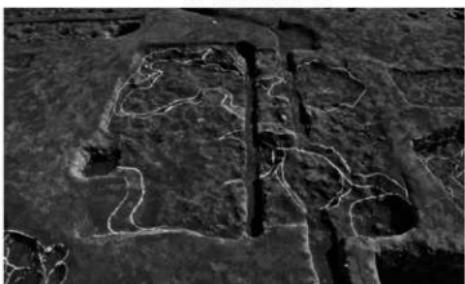
H-9 窟 調査状況（南西から）



H-9 窺 完掘（南西から）



H-10 調査状況（西から）



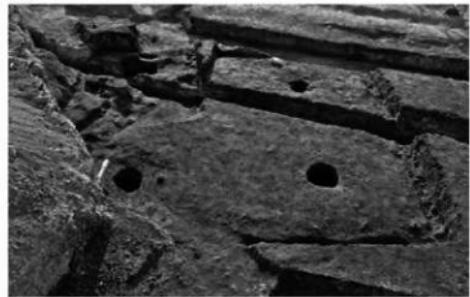
H-10 掘方（西から）



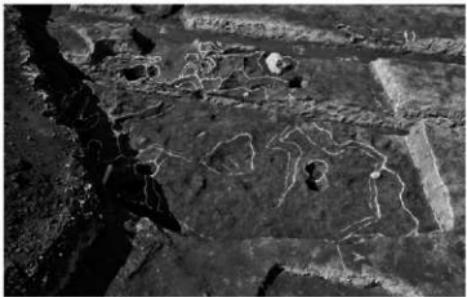
H-10 貯藏穴 土層断面と遺物（西から）



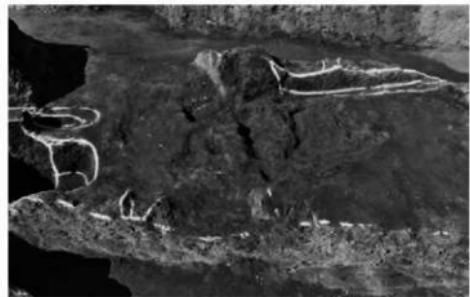
H-10 貯藏穴 遺物出土状況（東から）



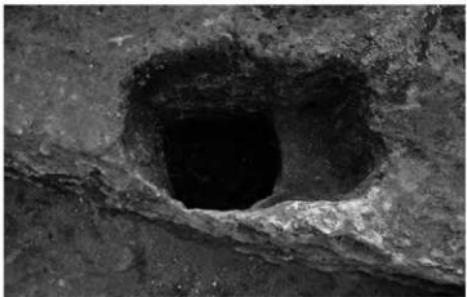
H-11 完掘（北東から）



H-11 挖方（北東から）



H-11 窟掘方（北東から）



H-11 貯藏穴（北東から）



H-12a 床面 検出状況（西から）



H-12a 床面 遺物出土状況（北から）



H-12b 完掘（南西から）



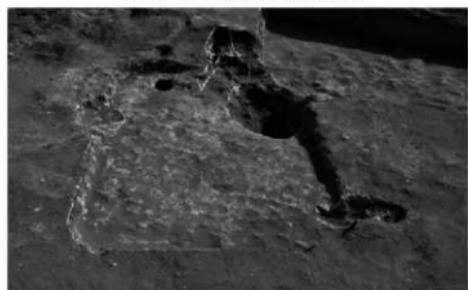
H-12b 遺物出土状況（北から）



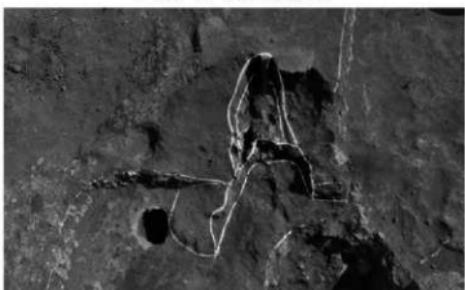
H-12b 窟 空焚き面（南西から）



H-12b 窟 煙道（東から）



H-13 完掘（南西から）



H-13 窟（南西から）



H-13 窟 調査途中（南西から）



H-14 完掘（南西から）



H-15 完掘（南西から）



H-15 新窓（南西から）



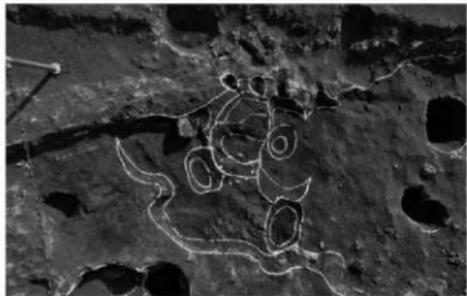
H-16 床面検出状況（北から）



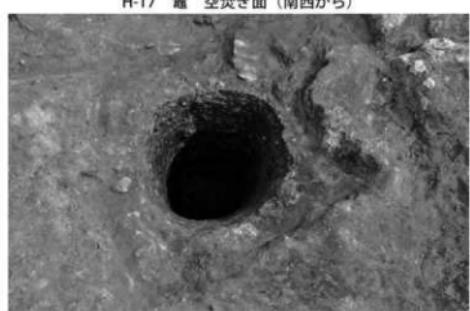
H-17 完掘（西から）



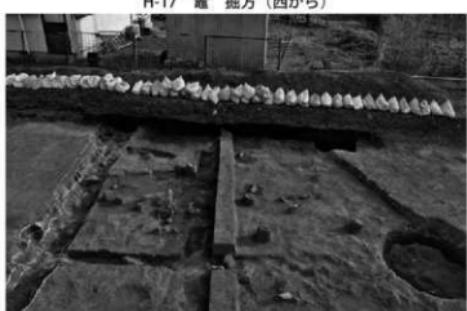
H-17 窟 空焚き面（南西から）



H-17 窟 捣方（西から）



H-17 貯藏穴（西から）



H-18 調査状況（北から）



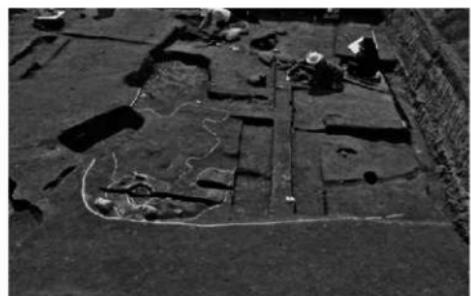
H-19 完掘・掘方（西から）



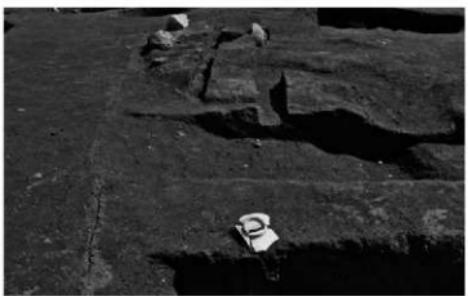
H-19 貯藏穴と竪の残骸（西から）



H-21a・b 調査状況（西から）



H-21a 調査状況（北から）



H-21a 白磁片出土状況（西から）



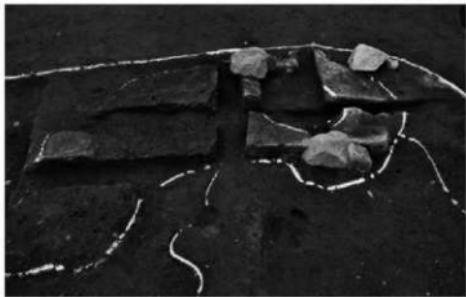
H-21a・b 土層断面（南から）



H-21a 竪 調査状況①（南から）



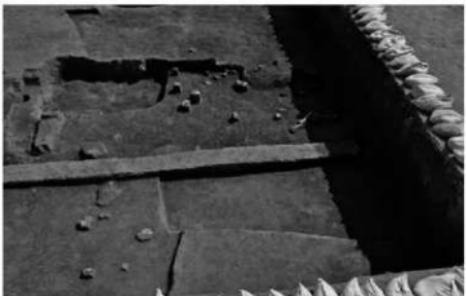
H-21a 窪 調査状況②（西から）



H-21a 窪 調査状況③（南から）



H-22 完掘（西から）



H-22 遺物出土状況（西から）



H-22 窪 左脇遺物出土状況（西から）



H-22 窪前 馬骨出土状況（西から）



H-22 窪 遺物出土状況（西から）



H-22 窪 完掘（西から）



H-23 完掘（西から）



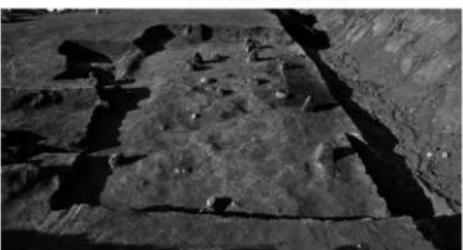
H-23 A 窟 調査状況（南から）



H-23 B 窟 調査状況（北から）



H-25 完掘（東から）



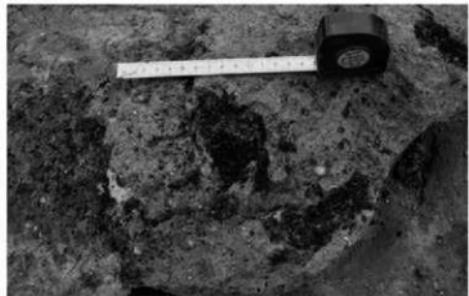
H-25 遺物出土状況（南から）



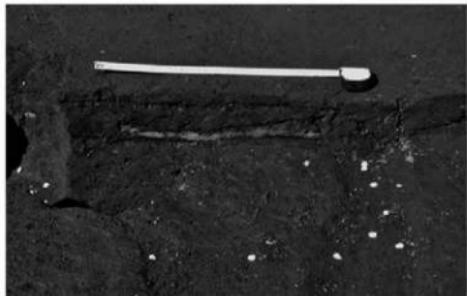
H-24・26a・26b 完掘（北から）



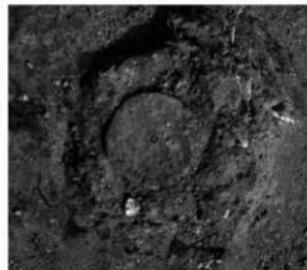
H-26b 炭化材・焼土検出状況（北から）



H-26b 炭化米・穀物塊



H-26b 土屋根状の焼土断面



H-26b 鉄製品（紡錘車）



H-26b 鉄製品（刀子）



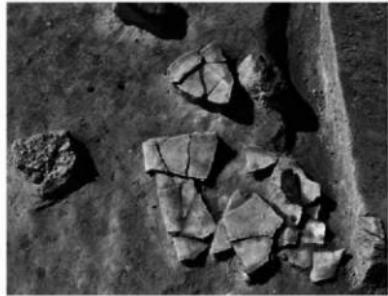
H-26b 鉄製品（鉗具）



H-27 完掘（東から）



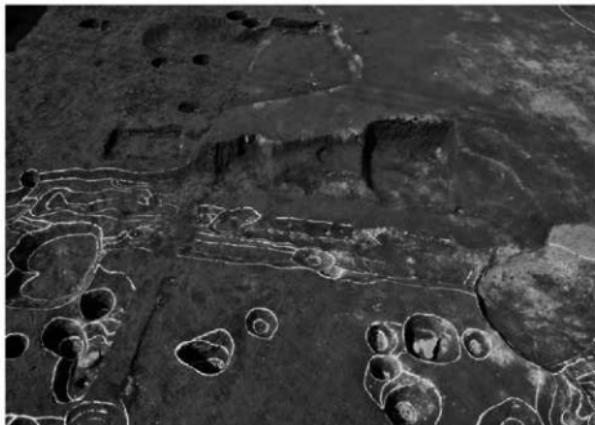
H-27 遺物と土層断面（南から）



H-27 瓢前の土釜（転用移動式竈）



H-28 竪 (西から)



H-29 完掘 (東から)



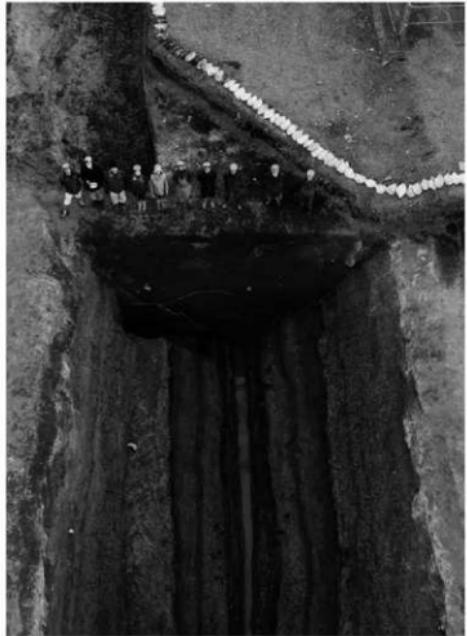
W-1 蒼海城堀 (北が上)



W-1 蒼海城堀 (北から)



W-1 蒼海城堀 (南から)



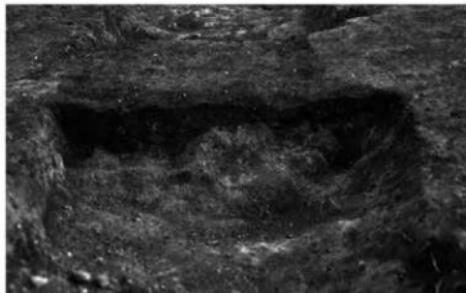
W-1 蒼海城堀 対人比 (北から)



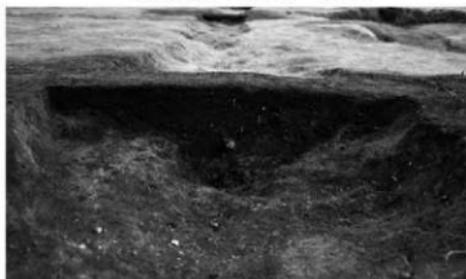
W-1 側面のピット列 足場? (東から)



W-2 古代区画溝 (南から)



W-2 古代区画溝 土層断面 C (北から)



W-2 古代区画溝 土層断面 D (北から)



DB-1 骨 検出状況（西から）



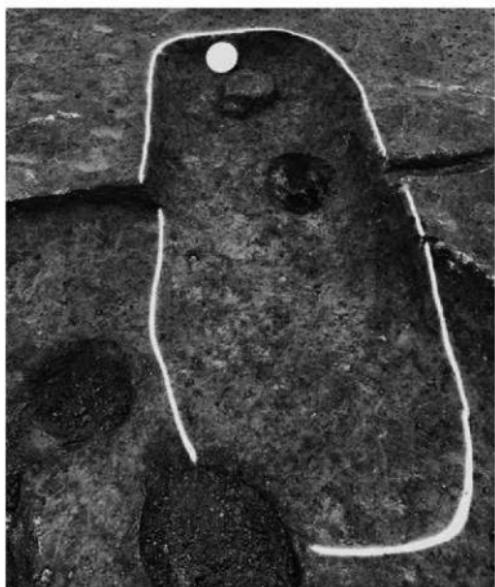
DB-1 歯 検出状況（西から）



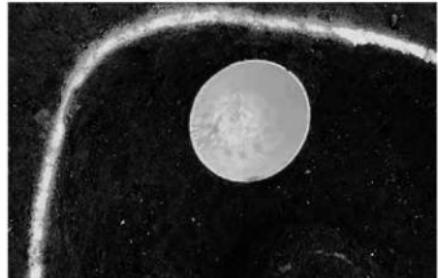
DB-2 骨 検出状況（西から）



DB-2 毛抜形鉄製品 出土状況



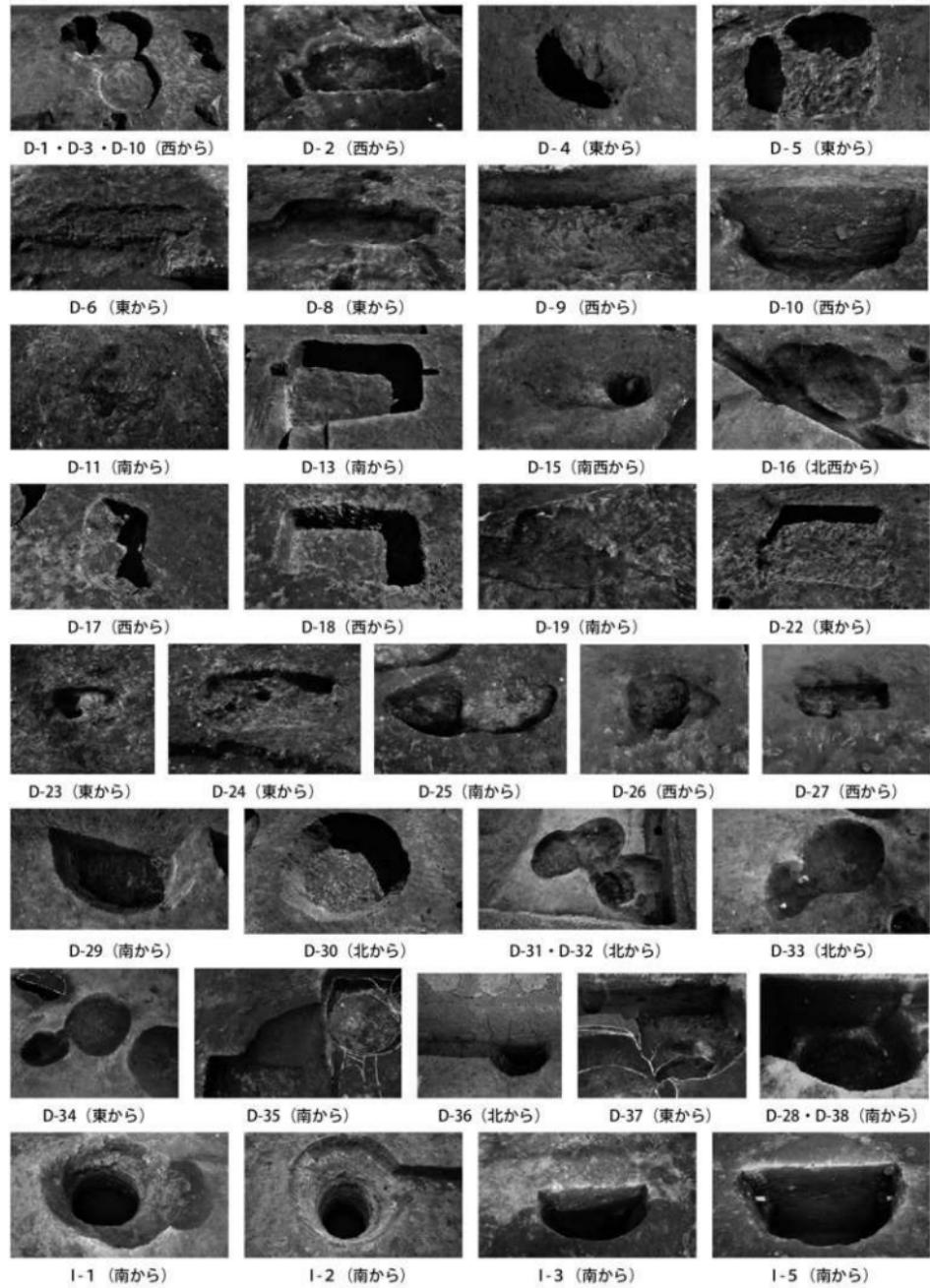
DB-3 (南から)



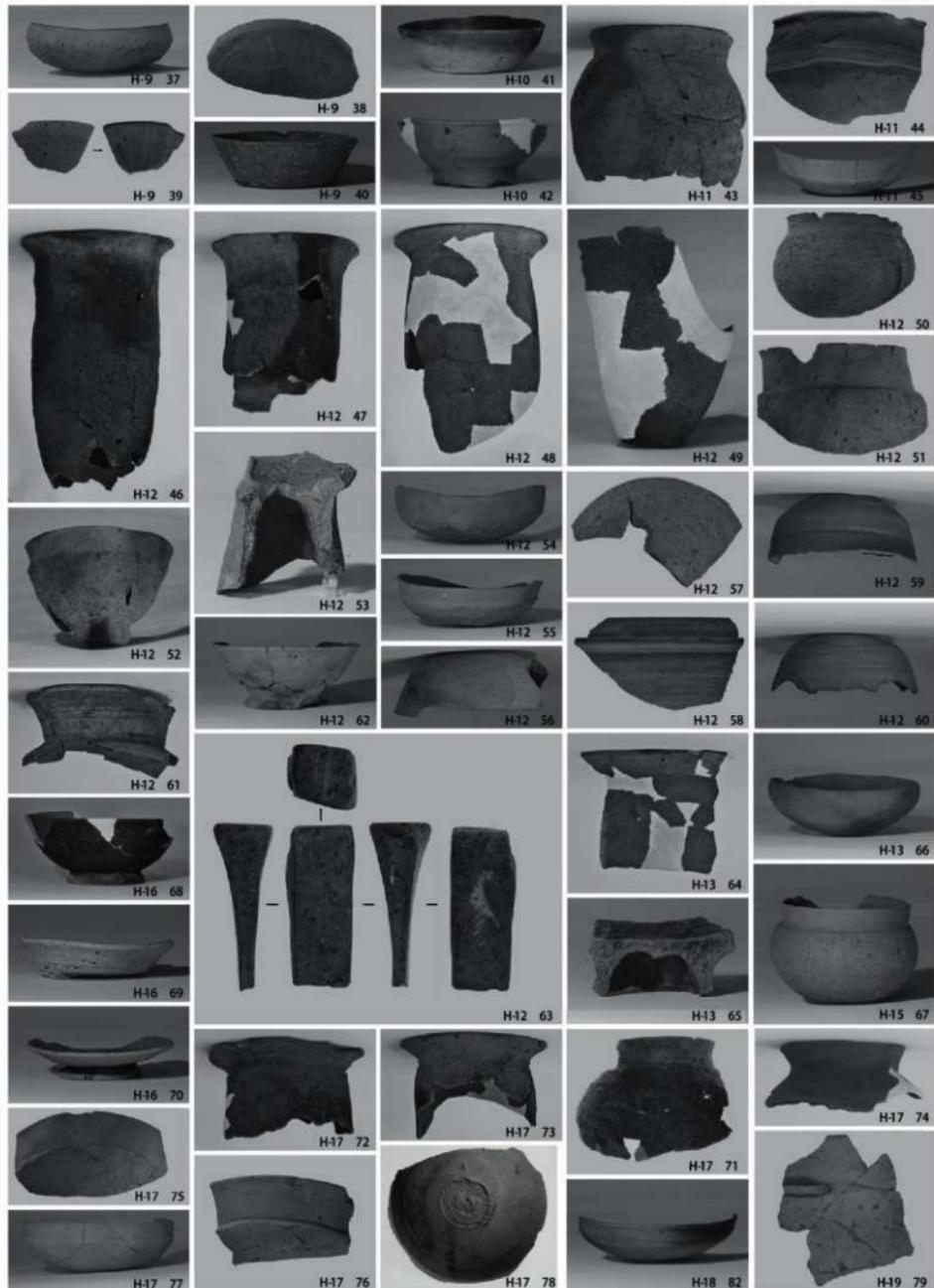
DB-3 白磁と頭骨（南から）



DB-3 肢骨検出状況（西から）





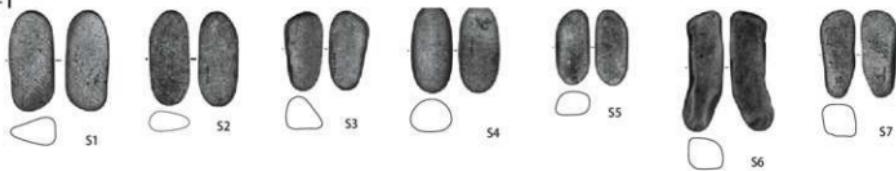






## 菰編石

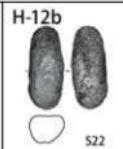
H-1



H-9



H-10



H-17



0 1:8 20cm

Table 12 石製品観察表

※( )は残存値

No.	遺構	種別	断面	部位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	備考	No.	遺構	種別	断面	部位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	備考
S1	H-1	石製品	菰編石	完形	16.5	7.2	4.6	831	閃緑岩		S18	H-9	石製品	磨石	1/2 (7.3)	7.5	4.7	377	安山岩		
S2	H-1	石製品	菰編石	完形	15.6	6.4	3.2	553	安山岩		S19	H-10	石製品	菰編石	ほぼ完形	13.0	5.5	4.8	532	安山岩	鏡石
S3	H-1	石製品	菰編石	完形	13.0	6.5	5.0	576	安山岩		S20	H-12	石製品	菰編石	完形	13.6	8.6	6.1	952	安山岩	
S4	H-1	石製品	菰編石	完形	14.1	6.3	5.0	791	安山岩		S21	H-12	石製品	菰編石	完形	13.0	4.5	4.1	205	安山岩	
S5	H-1	石製品	菰編石	完形	12.3	5.4	4.2	485	安山岩		S22	H-12b	石製品	菰編石	完形	13.5	5.6	4.6	603	安山岩	
S6	H-1	石製品	菰編石	完形	19.5	5.5	4.9	1072	ホルンフェルス		S23	H-12b	石製品	菰編石	完形	11.9	5.3	4.3	380	安山岩	鏡石
S7	H-1	石製品	菰編石	完形	14.1	5.5	6.1	778	安山岩		S24	H-12b	石製品	菰編石	完形	19.5	5.9	4.0	712	安山岩	
S8	H-1	石製品	菰編石	完形	17.0	7.0	4.8	856	安山岩		S25	H-12b	石製品	菰編石	完形	13.8	5.7	4.9	671	安山岩	
S9	H-2	石製品	完形	12.9	5.7	5.6	699	閃緑岩	鉛石	S26	H-12b	石製品	菰編石	完形	14.3	6.8	4.5	580	安山岩		
S10	H-2	石製品	菰編石	完形	13.7	5.5	4.7	653	安山岩		S27	H-12b	石製品	菰編石	完形	12.7	5.0	3.3	373	安山岩	
S11	H-3	石製品	菰編石	9/10 (15.2)	7.1	4.3	798	安山岩		S28	H-17	石製品	菰編石	完形	15.7	7.2	4.2	808	安山岩		
S12	H-3	石製品	菰編石	完形	14.0	5.2	3.8	453	安山岩		S29	H-17	石製品	菰編石	完形	12.0	6.9	2.3	417	安山岩	オレンジ・白色
S13	H-3	石製品	菰編石	完形	11.4	4.9	3.3	343	安山岩		S30	H-17	石製品	菰編石	完形	13.7	7.1	3.6	605	安山岩	
S14	H-3	石製品	菰編石	完形	12.0	6.1	3.4	404	安山岩		S31	H-17	石製品	菰編石	完形	12.4	5.5	4.0	443	安山岩	
S15	H-3	石製品	菰編石	ほぼ完形	16.0	5.9	4.4	665	安山岩		S32	H-17	石製品	菰編石	完形	14.0	7.0	4.1	758	安山岩	
S16	H-3	石製品	磨石	完形	8.2	7.3	4.2	175	軽石		S33	H-17	石製品	菰編石	完形	13.8	6.3	4.4	613	安山岩	
S17	H-9	石製品	菰編石	完形	13.2	6.4	4.2	528	安山岩	鉛石	S34	H-17	石製品	菰編石	完形	15.3	5.7	4.3	564	安山岩	鏡石

# 報告書抄録

ふりがな	もとそじゅおうみいせきぐん（143）						
書名	元総社蒼海遺跡群（143）						
副書名	前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名							
編著者名	永井智教・樋原浩二・谷畠美帆・高橋 敦・辻口菜穂子・岡田萌						
編集機関	山下工業株式会社						
発行機関	〒 371-0244 群馬県前橋市藤毛石町 207-8 前橋市教育委員会 文化財保護課						
発行年月日	2023年3月6日						
所収遺跡名	所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査対象面積	調査原因
元総社蒼海遺跡群 (143)	群馬県前橋市元総社町 1799-1、1888-1、1888-2、1888-5、2691-8	0142	0147	36°23'29"	R4. 1. 5 R4. 3. 23	1,293m <sup>2</sup>	前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業
	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
	包含層	縄文時代	—	土器・石器	後世の遺構に遺物混入。		
	集落	古墳時代	竪穴建物跡 12軒 須恵器（壺・高杯・环 荒縞石	土師器（壺・短頸壺・环） 須恵器（壺・羽釜）	竪穴建物跡は全て正方位に対して斜行する。柱穴や壁周溝、窓の様相から、大半の建物で上屋解体を伴う大規模な改修が行われたことが判明した。		
	官衙	奈良時代	区画溝 1条	土師器細片	北に接する（104）調査区や近年の範囲確認調査の成果を合わせると、一辻300m以上の方形区画の可能性があり、群馬郡衙正倉初期の区画と推定される。		
	集落	平安時代	竪穴建物跡 17軒 土壙墓 1基 土坑	土師器（土釜・坛） 土師質土器（壺・坏・小皿） 須恵器（壺・羽釜） 灰釉陶器（壺・壇・皿） 白磁（碗） 铁製品（籠・紡錘車・馬貝） 鉄滓・副滓 石製品（砥石・轡石） 炭化穀物（米・豆）	竪穴建物跡はほぼ正方位で、10世紀以降に出現し、12世紀初頭まで確認される。 多くの建物は壁周溝や窓の様相から改修されており、重複も顕著である。人の出入りが激しい、国府のマチ特有の現象と言える。建物内から馬骨・鹿角の出土も特徴的である。 また、12世紀初頭の竪穴建物跡に切られる土壙墓から出土したほぼ完形の白磁碗は、底外面に墨書き「梅」が確認された。日宋貿易の際、商人によって記された一種のサインと考えられる。		
	城館	中世	堀・溝 2条 井戸跡 5基 土壙墓 2基	陶器（壺・壇） 土師質土器（鍋・カワラケ） 铁製毛拔・残	堀と溝は蒼海城に伴うもので、堀には最低3時期が確認される。井戸跡と土壙墓も城に伴う可能性が高い。土壙墓は堀の端に位置する。		
	その他	近世・近代	土坑	陶器・煙管	農業関連と推定。蒼海城廃城以降。		

## 元総社蒼海遺跡群（143）

—前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2023年 3月6日 印刷・発行

編集 山下工業株式会社  
発行 前橋市教育委員会  
印刷 朝日印刷株式会社